

Ⅱ. 評定尺度調査の分析結果

【評定尺度調査の分析にあたって】

今回用いた評定尺度は、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」による4段階評価である。

本報告書においては、データの理解や分析のしやすさを考慮し、便宜的に4段階のカテゴリーに4～1の点数を振り、その平均値を算出することによって、データの代表値とした。

ただし評定尺度の各カテゴリーに振られた「数字」を「数値」として加減乗除の演算をすることは、厳密に言えば統計処理として適切でない。

3が2よりもあてはまる程度が大きいことは言えても、4と3の間と3と2の間が等距離（つまり1の間隔）だという保証はどこにもないからである。

しかし4つのカテゴリーごとの相対度数（パーセント）から何らかの傾向を掴み取るとは容易ではないため、平均値を回答の傾向を推察する目安の1つとして用いたい。

また、ここでの平均値は何らかの単位を持つものではないので、データ同士の相対比較でのみ、その傾向を読み取ることになる。仮にある項目の平均値が、他の項目より低かったとしても、大部分の回答者がその項目に対して肯定的な評価をしていれば、その項目の評価は低いと簡単に断言できるものではないからである。つまり絶対的な評価が把握しにくいと言える。そこで、「あてはまる」もしくは「ややあてはまる」と回答した対象者の割合を合計して提示した。

これによって、その評価項目に対し肯定的評価をしている学生がいかほどの割合で存在するかを推測する目安とする。

さらに回答者の属性ごとの回答者数について、本来ならば、グラフ等のデータごとに回答者数を示すべきであるが、全てのデータに回答者数を掲載すると極めて煩雑になるため、ここに一括して掲載することにした（次頁表2-1）。

以下、本章においては、常に次頁の回答者数に基づいてデータを見る必要がある。特に回答者数の少ない層ほど誤差が大きくなり、%表記がそぐわないため、いずれも参考値としてグラフに記載しているが、コメントを割愛する事にする。

例えば大学院では、年齢階層別の「20～29歳」（6人）、科目別の「自然環境科学」（7人）、職業別の「看護師等」（17人）、「家事専業」（13人）が挙げられる。（「農業等」と「他大学等の学生」は一人もいなかった。）

表 2 - 1 回答者数一覧

【学部】

全体	7,783	(単位:人)	
メディア		年齢階層	
テレビ科目(TV)	4,791	19歳以下	96
ラジオ科目(R)	2,992	20~29歳	601
職業		30~39歳	687
公務員等	600	40~49歳	1,705
教員	398	50~59歳	2400
会社員	1745	60~69歳	1,655
個人営業・自営業	660	70歳以上	639
農業等	26	コース	
看護師等	569	基盤科目	1144
家事専業	640	基盤科目(外国語)	1044
パート・アルバイト	1175	生活と福祉	1216
他大学等の学生	52	心理と教育	2592
無職	1,366	社会と産業	661
その他	552	人間と文化	566
		情報	44
		自然と環境	516
		夏季集中科目	-

【大学院】

全体	412	(単位:人)	
メディア		年齢階層	
テレビ科目(TV)	109	20~29歳	6
ラジオ科目(R)	303	30~39歳	43
職業		40~49歳	65
公務員等	52	50~59歳	159
教員	98	60~69歳	98
会社員	67	70歳以上	41
個人営業・自営業	26	プログラム	
農業等	0	生活健康科学	61
看護師等	17	人間発達科学	64
家事専業	13	臨床心理学	169
パート・アルバイト	35	人文学	111
他大学等の学生	0	自然環境科学	7
無職	62		
その他	42		

Ⅱ－1. 学部の分析結果

Ⅱ－1－1. 項目平均から見た全体的傾向

ここからは、A-1～B-21 の評価項目（14 頁の提供資料サンプルを参照）ごとに、平均値と肯定的評価のグラフを基に、そのデータから目立つ点や、特徴的傾向を記述していくことにする。

平均値は、評価項目の選択肢である「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」に対して順に 4 点、3 点、2 点、1 点の得点を与え、その得点合計を回答者数で割った値である。全員が「あてはまる」とした場合、平均値は 4.00 で最も高くなり、全員が「あてはまらない」とすると最低の 1.00 となる。

また、肯定的評価は文字通り「あてはまる」と「ややあてはまる」の比率の合計である。

平均値より肯定的な評価の方が（例えば回答者の 80% と）イメージしやすく、平均値と肯定的評価に齟齬が出た場合、どちらを採るか合理的な判断ができないので、記述については肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていきたい。

また、過去 2 年間との年度間の比較（23 頁等）の箇所は、比率の差の検定結果から、全体の回答者数（2021 年度：7783 人 2020 年度：7320 人 2019 年度：4550 人）が多いため、各比率の差が概ね 2 ポイントで有意となり、2 ポイント以上で差があることとした。

テレビ科目とラジオ科目のメディア間の比較では、同検定結果から概ね 2 ポイントで有意差が見られるため、年度間比較と同様 2 ポイント以上で差があることとした。

図 2－1 の肯定的評価では各項目とも 80% 代で、『通信指導・単位認定試験』が 89% と最も高く、反対に『放送授業』（82%）が低い評価であった。

『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』はそれぞれ 86% と同率であった。

図 2－1 【学部】項目平均による全体的傾向

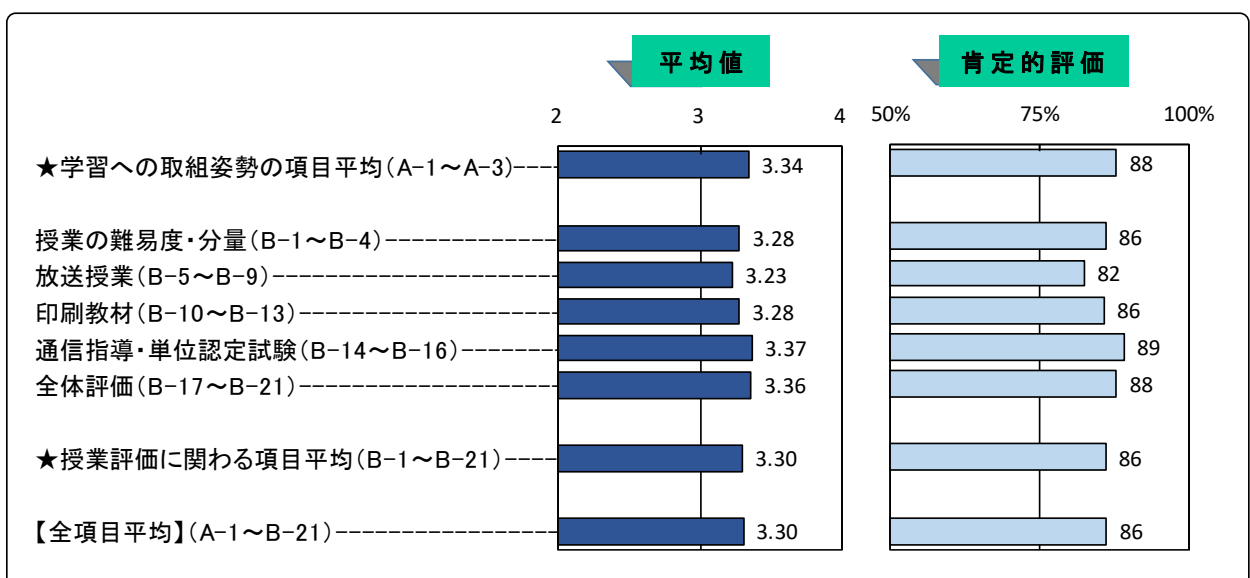
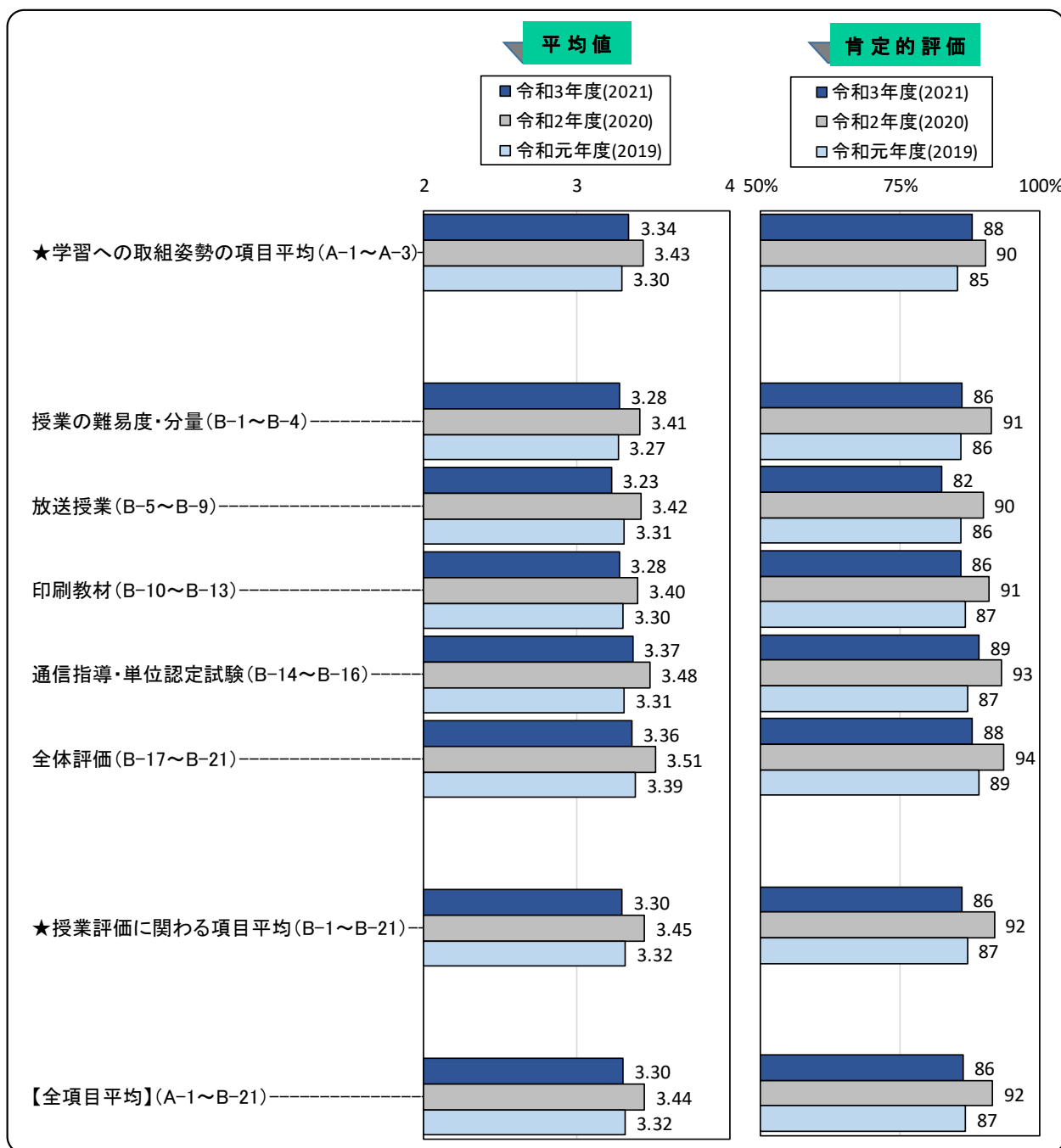


図2-2の項目平均による全体的傾向では、肯定的評価が本年度は、全ての項目で昨年度より2~8ポイントの減少で、特に『放送授業』が8ポイント減と、下げ幅が大きかった。

同様に、昨年度との比較で、『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』は共に6ポイントの減少であった。

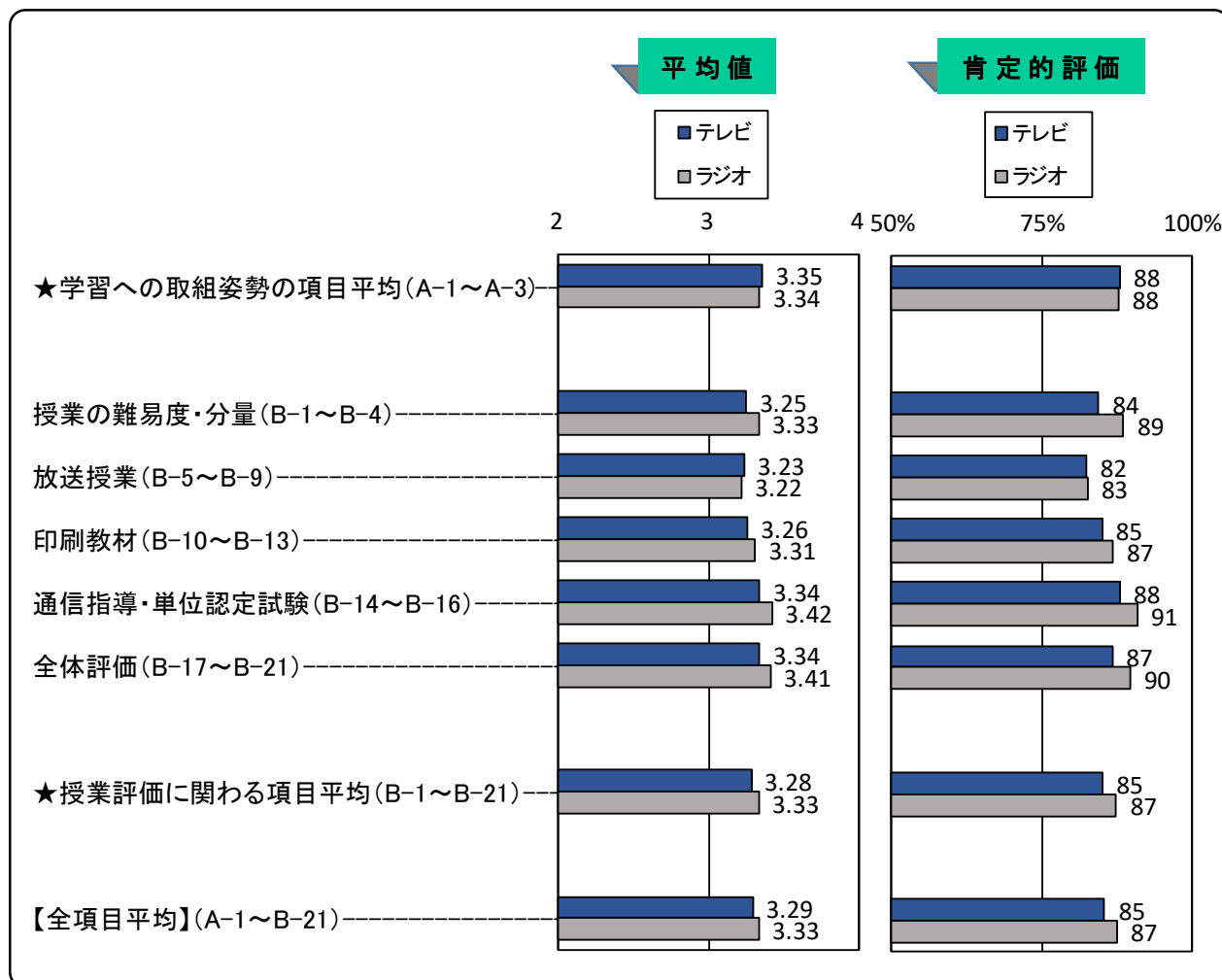
図2-2【学部】項目平均による全体的傾向（開設年度比較）



※放送授業(B-5~B-9)の質問項目については、入れ替えが行われた。
 追加された項目：B-8【TV】ロケ映像や資料映像によって、理解が深まった/【R】ロケ音声や資料音声によって、理解が深まった
 B-9ゲストや聞き手によって、理解が深まった
 削除された項目：講師の熱意が十分に伝わった
 従って、放送授業(B-5~B-9)の質問項目の年度比較については、留意されたい。

メディア別では（図2-3）、テレビ科目とラジオ科目の『学習への取り組み姿勢』だけが、88%と同率であったが、それ以外の項目平均は、ラジオの方が1~5ポイント高く、特に『授業の難易度・分量』の差は大きかった。

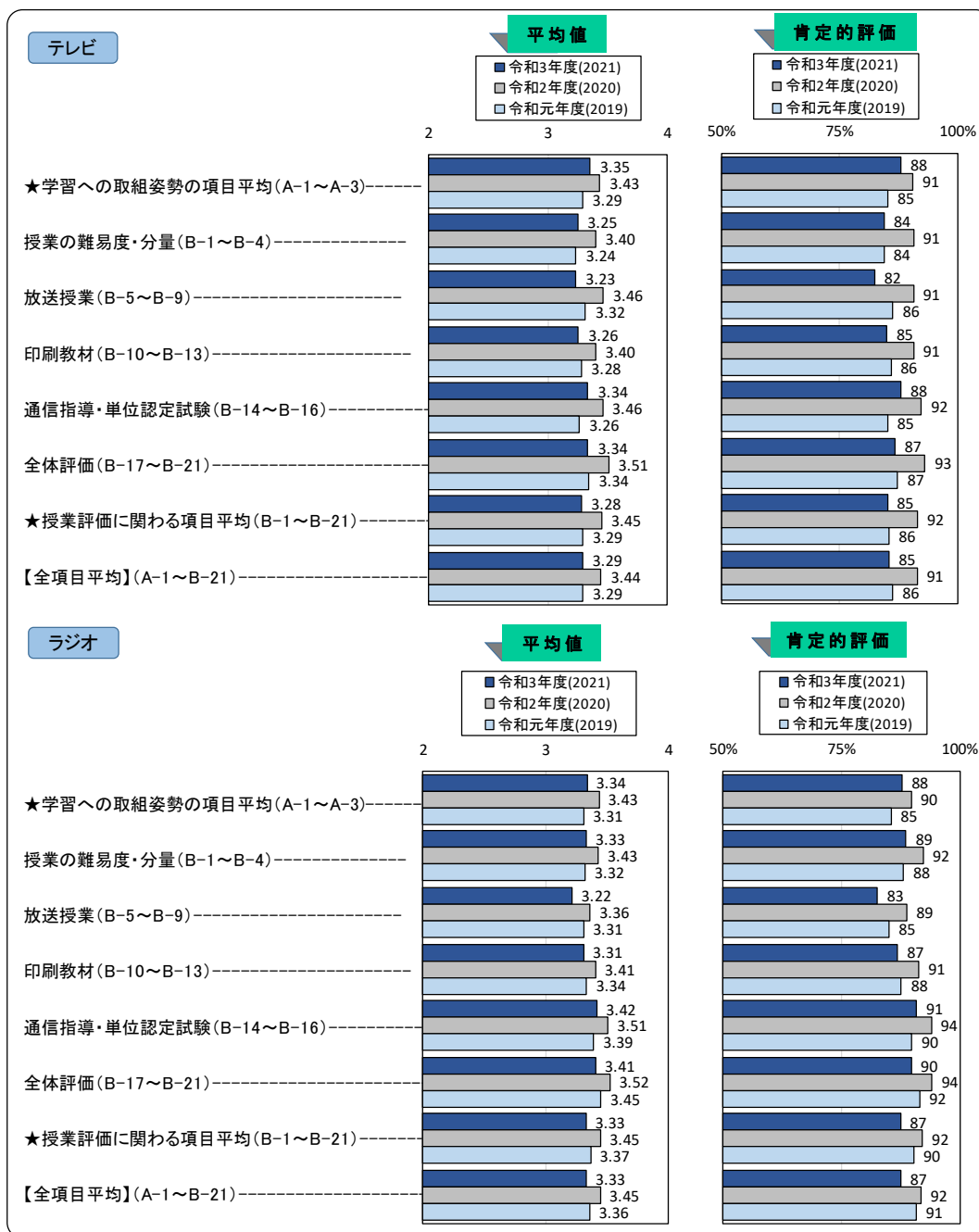
図2-3 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向



メディア別の項目平均を時系列で比較してみると（図2-4）、テレビ科目では、本年度は、昨年度より全ての項目で評価を下げており、特に『放送授業』（82%）、『授業評価に関わる項目平均』（85%）が9～7ポイントの大幅減であった。

ラジオ科目でも、全ての項目で昨年度から評価を下げ、特に『放送授業』では6ポイントのマイナスであった。

図2-4 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向（開設年度比較）



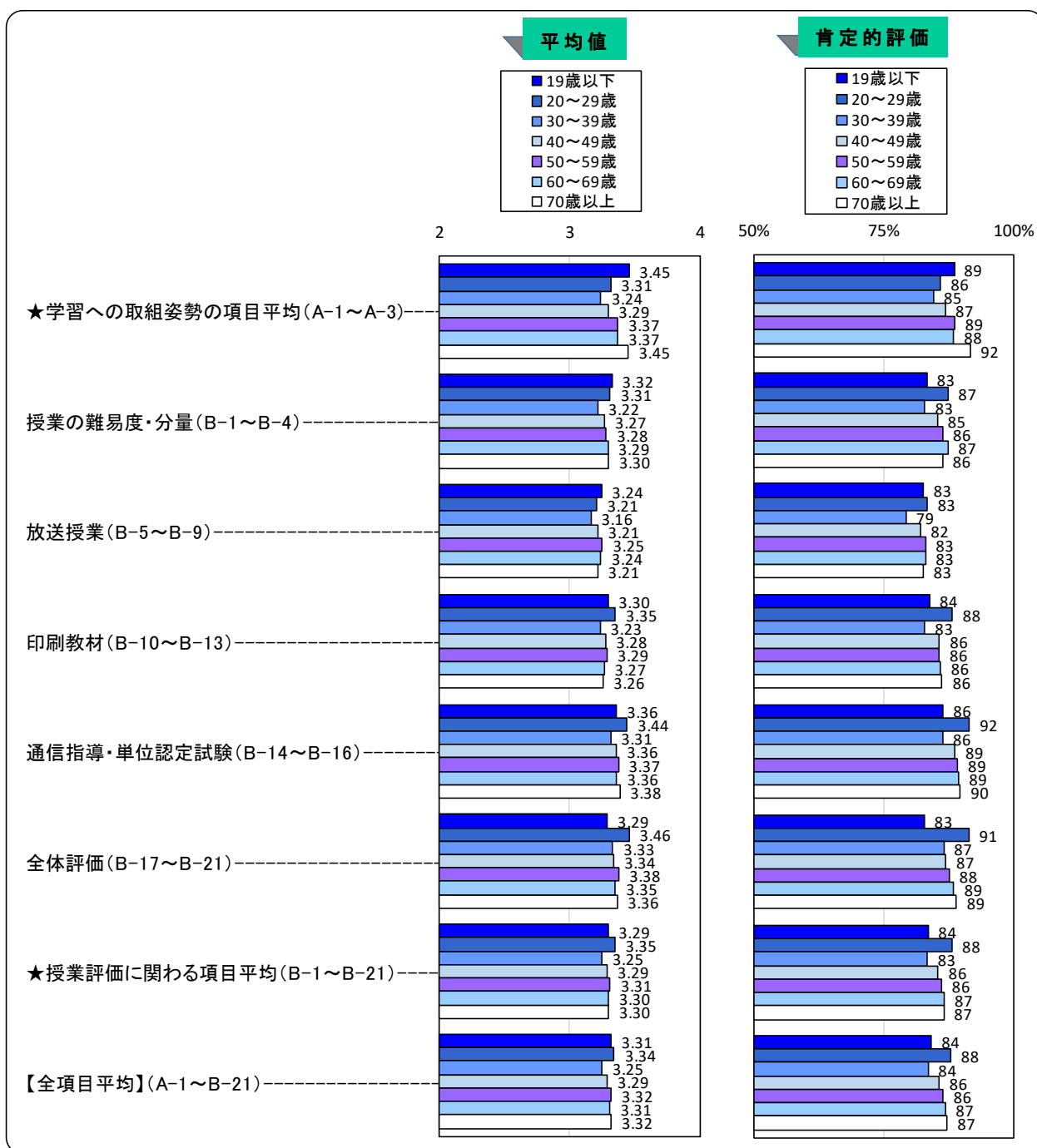
年齢階層別（図2-5）では、『学習への取組み姿勢』は、70歳以上の積極性が高く、30歳代は反対に最も低かった。

『授業の難易度・分量』の評価については、19歳以下と30歳代が低かった。

『印刷教材』『通信指導・単位認定試験』『全体評価』については20歳代が90%前後と評価が最も高く、反対に19歳以下と30歳代の評価が低かった。

『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』も20歳代が88%と、最も高かった。

図2-5 【学部】項目平均による年齢階層別全体的傾向



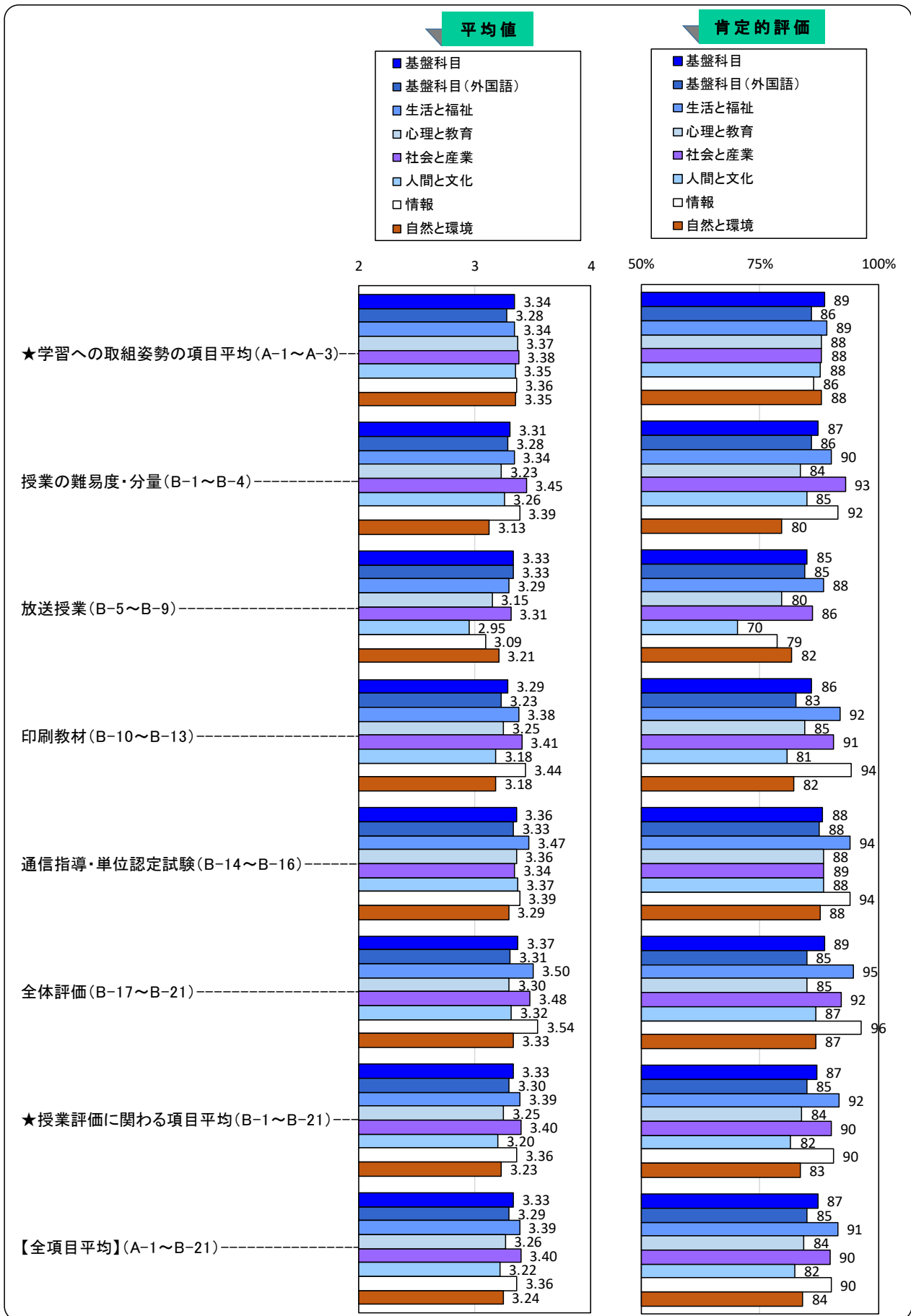
所属コース別に項目平均を見ると（次頁図 2 - 6）、『学習への取組み姿勢』については、「基盤科目」と「生活と福祉」に積極性が見られ、反対に「基盤科目（外国語）」と「情報」は積極性が低かった。

「生活と福祉」「社会と産業」「情報」の 3 つのコースは、『放送授業』を除く全ての項目で上位 1～3 位を占めていた。

また、『放送授業』では、「生活と福祉」と「社会と産業」が、上位であった。

反対に評価が低かったのは、『授業の難易度・分量』では「自然と環境」が、『放送授業』では「人間と文化」であった。

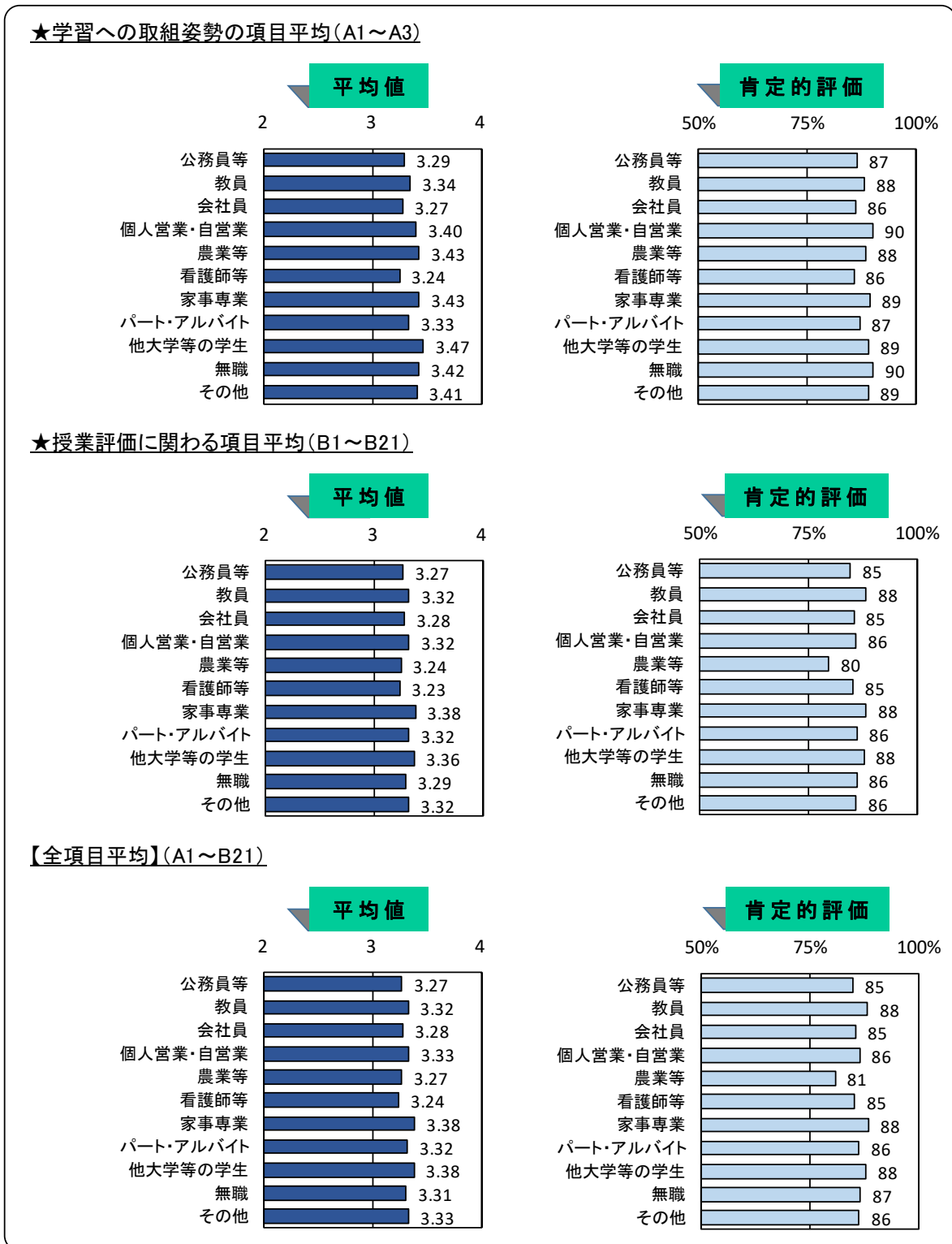
図 2 - 6 【学部】項目平均による所属コース別全体的傾向



職業別の（図2-7）『学習への取組み姿勢』で、高い積極性が見られたのは「個人営業・自営業」と「無職」で90%、積極性が低かったのは「会社員」と「看護師等」で、共に86%であった。

『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』の両項目では、「教員」「家事専業」「他大学等の学生」がそれぞれ88%と最も評価が高く、反対に「農業等」が80,81%と最も評価が低かった。

図2-7 【学部】項目平均による職業別全体的傾向



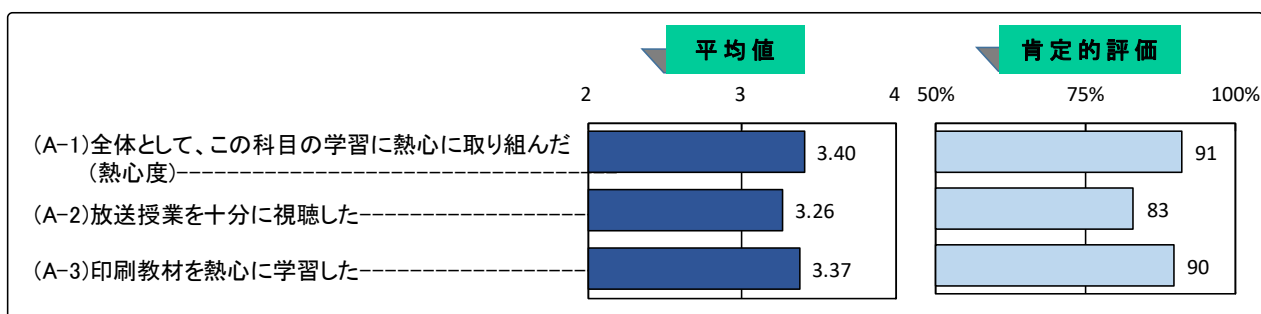
Ⅱ-1-2. 学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれの評価項目ごとに調査結果を見ていく。

学習への取組み姿勢（図2-8）は、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」（91％）と（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」（90％）の熱心度が高かった。

（A-2）「放送授業を十分に視聴した」は83％と、前述の2項目に比べ低かった。

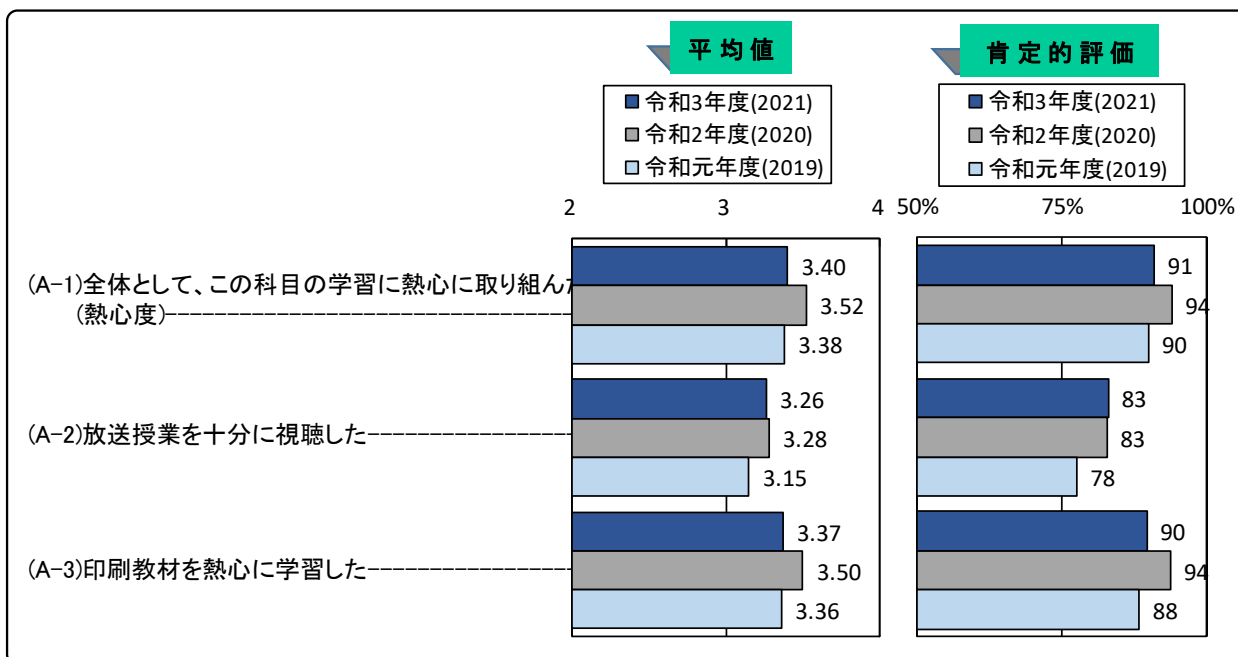
図2-8 【学部】回答者全体の取組み姿勢



取組み姿勢を時系列で見ると（図2-9）、本年度と昨年度の比較では、(A-1)と（A-3）は3,4ポイント減少し、（A-2）の「放送授業を十分に視聴した」は変わらなかった。

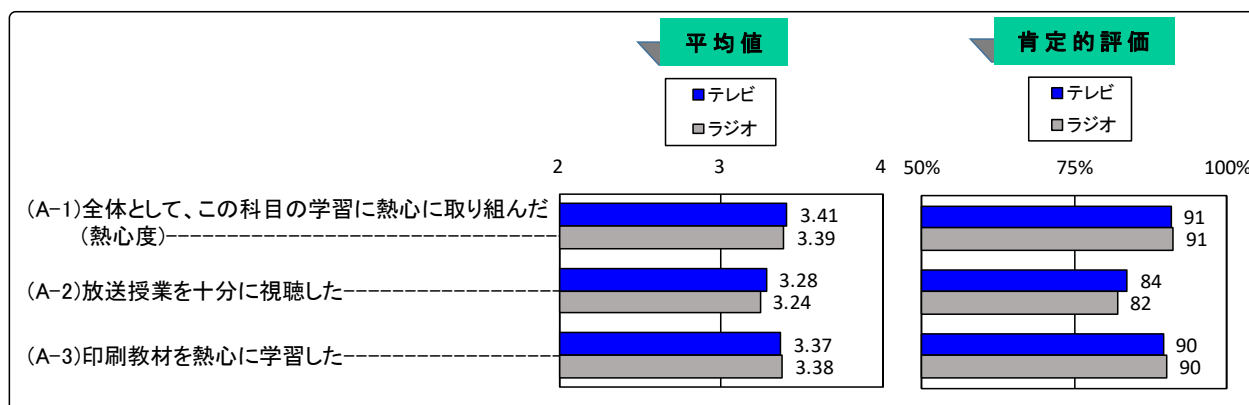
一昨年度と比べてみると、評価を下げた項目はなかった。

図2-9 【学部】回答者全体の取組み姿勢（時系列）



次にメディア別の取組姿勢では（図2-10）、テレビ科目とラジオ科目を比べると、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は同じ評価であったが、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」はテレビ科目の方が高かった。

図2-10 【学部】メディア別の取組姿勢



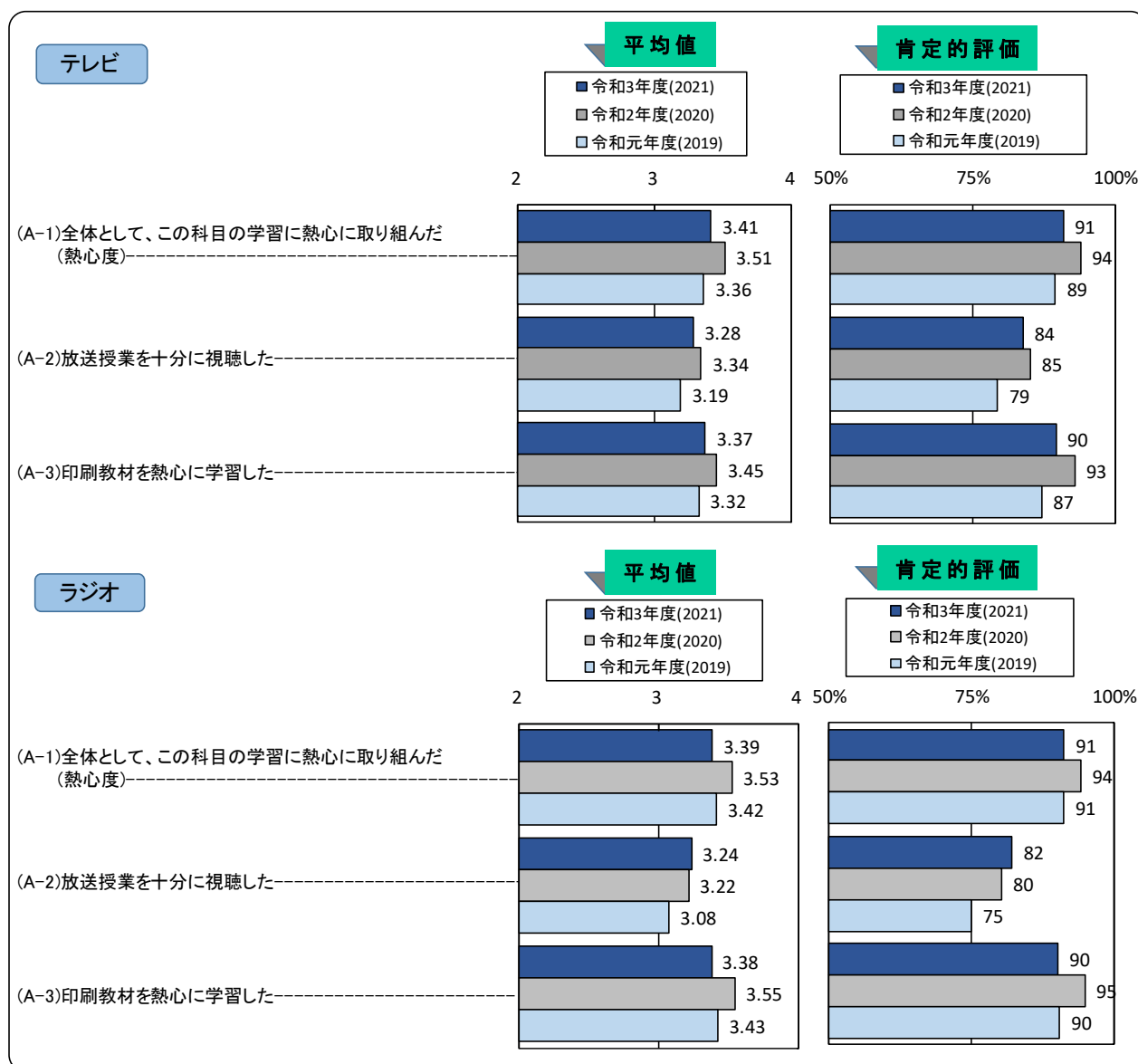
メディア別の取組姿勢を時系列で見ると（図2-11）、昨年度との比較でテレビ科目は、(A-1)～(A-3)の全ての項目で1～3ポイントの減少が見られた。

一昨年度との比較では、全ての項目で本年度が上回っていた。

ラジオ科目では、昨年度との比較で、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は評価を下げていたが、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」については、2ポイントの上昇であった。

一昨年度との比較では(A-2)「放送授業を十分に視聴した」だけが、7ポイントの大幅な上昇であった。

図2-11 【学部】メディア別の取組姿勢（時系列）

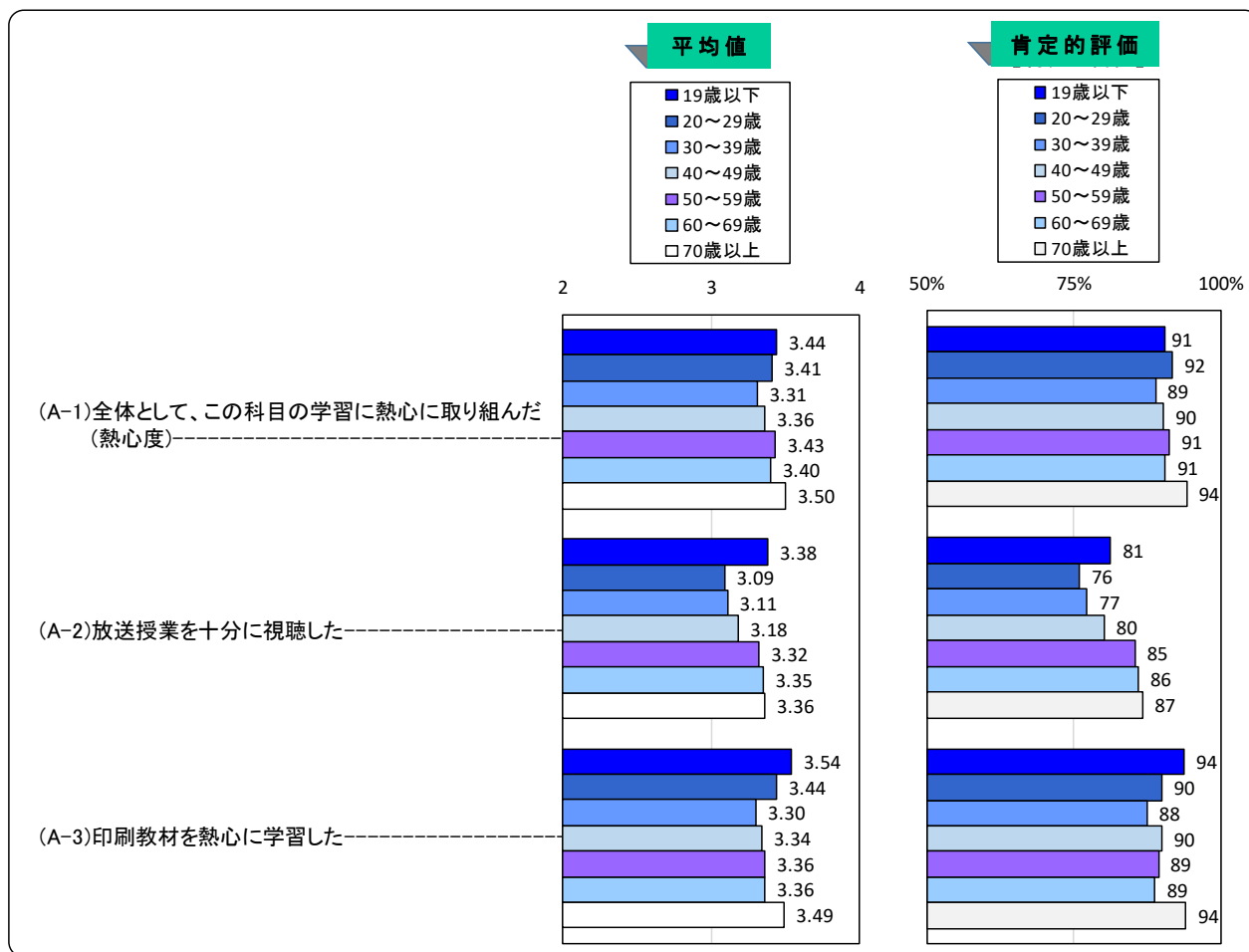


年齢階層別に取り組姿勢を見ると（図2-12）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は70歳以上が94%と最も熱心度が高く、反対に30歳代が89%と最も熱心度が低かった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」では、50歳代以上は86%前後と、放送授業の視聴に積極性が見られ、その逆の傾向が20歳代と30歳代に見られた。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では、19歳以下と70歳以上が94%と高く、30歳代が88%と最も低かった。

図2-12 【学部】年齢階層別に取り組姿勢

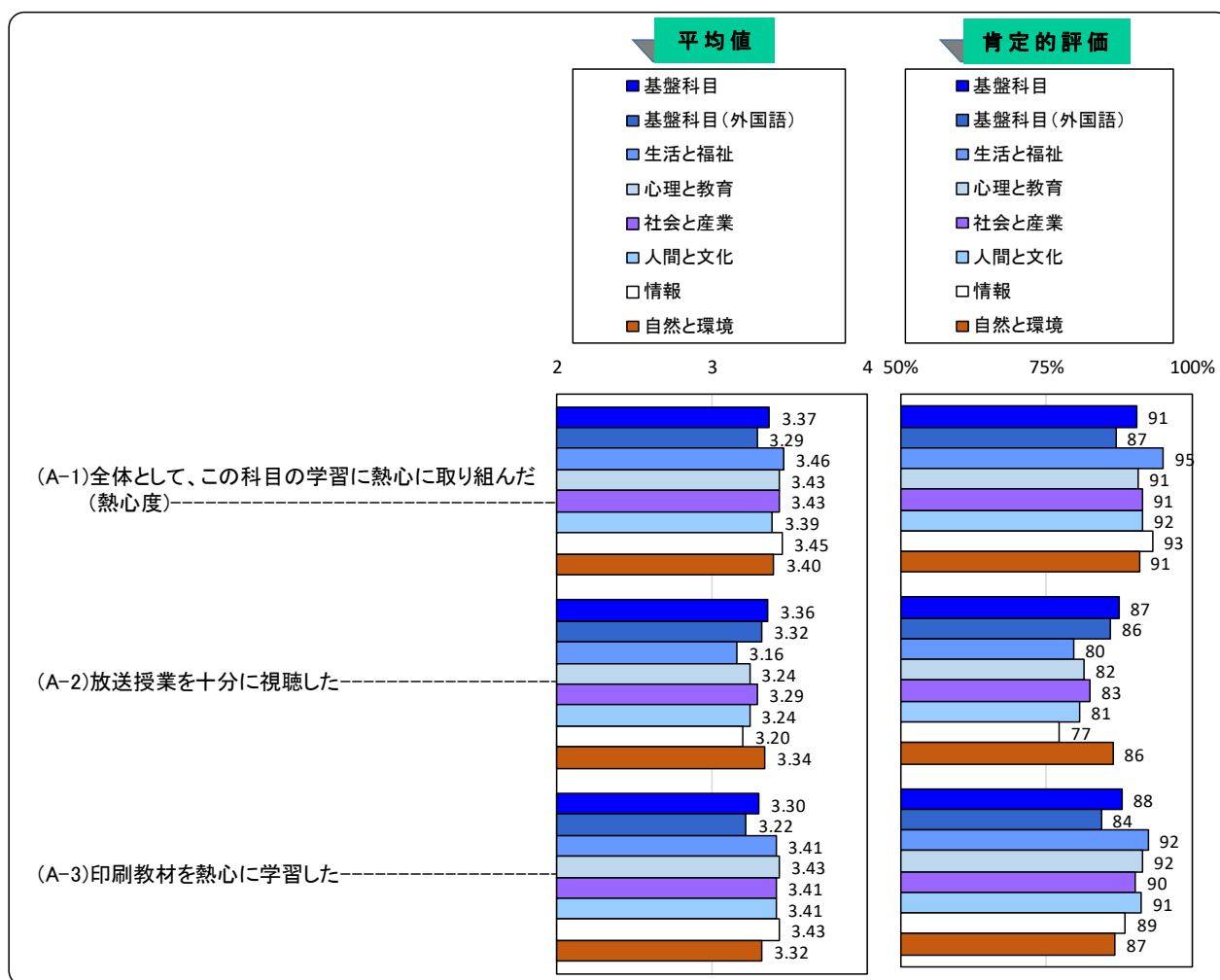


所属コース別に取り組姿勢を見ると（図2-13）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ(熱心度)」では、「生活と福祉」が95%と最も高く、「基盤科目(外国語)」が87%と最も低かった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」では、「基盤科目」「基盤科目(外国語)」「自然と環境」が86,87%と高く「情報」が77%と極端に低かった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では、「生活と福祉」「心理と教育」が92%と高く、「基盤科目(外国語)」が84%と低かった。

図2-13 【学部】所属コース別の取り組姿勢



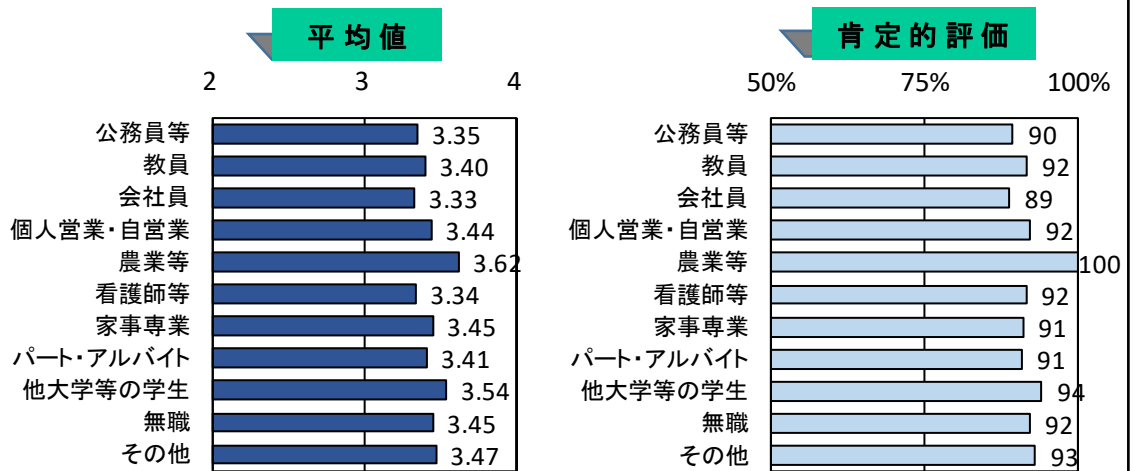
職業別に取り組姿勢を見ると（次頁図2-14）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は「農業等」（100%）が、他の職業と比べ突出しており、反対に「会社員」が89%と、最も熱心度が低かった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は「無職」（88%）が最も高く、「看護師等」（76%）が最も低かった。

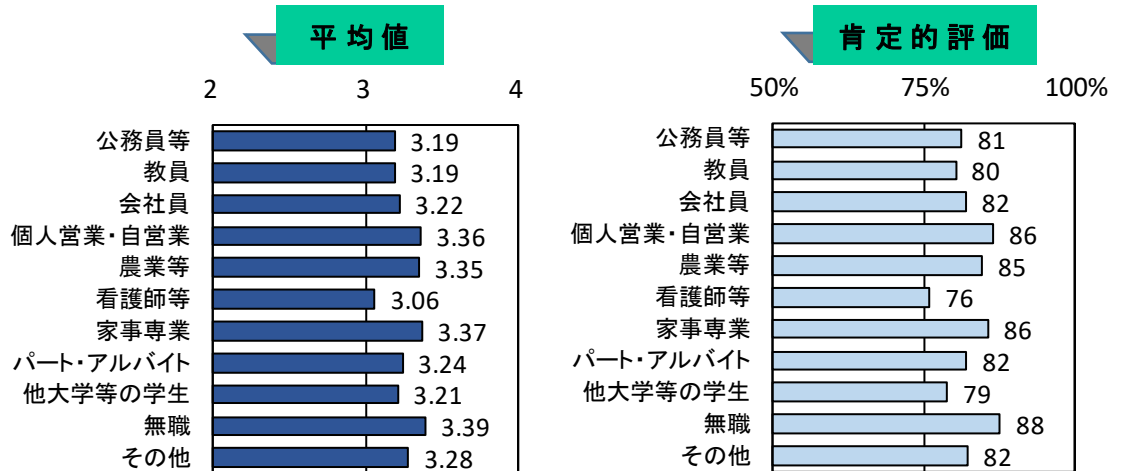
(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では「他大学等の学生」（94%）が高く、「農業等」（81%）が最も低かった。

図 2 - 1 4 【学部】職業別の取組姿勢

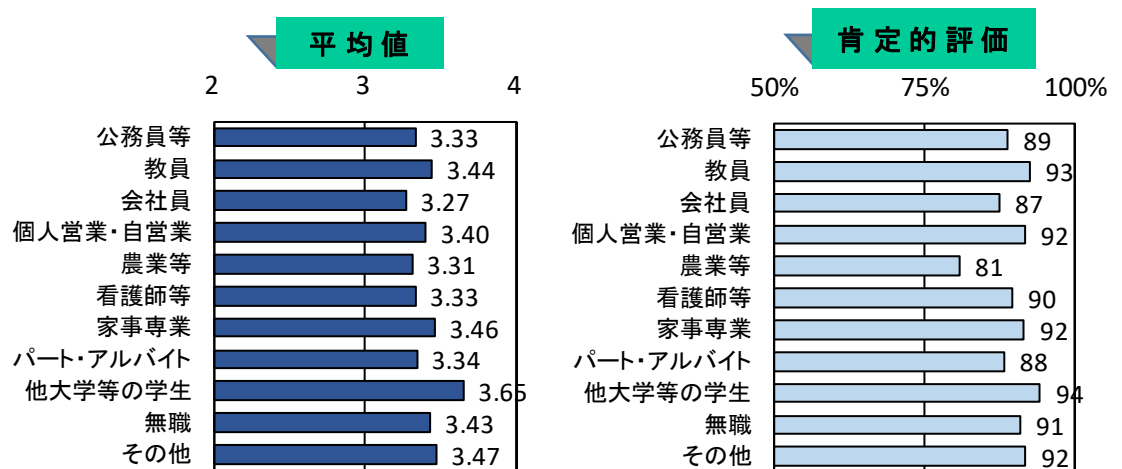
(A-1)全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ(熱心度)



(A-2)放送授業を十分に視聴した



(A-3)印刷教材を熱心に学習した



単位認定のための学習方法（次頁図 2 - 1 5）では、全体は『放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ』が 75%と、大半を占め、『ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ』が 18%、『ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ』は僅か 7%であった。

メディア別では「テレビ科目」と「ラジオ科目」に差はなく、全体の傾向と変わらなかった。

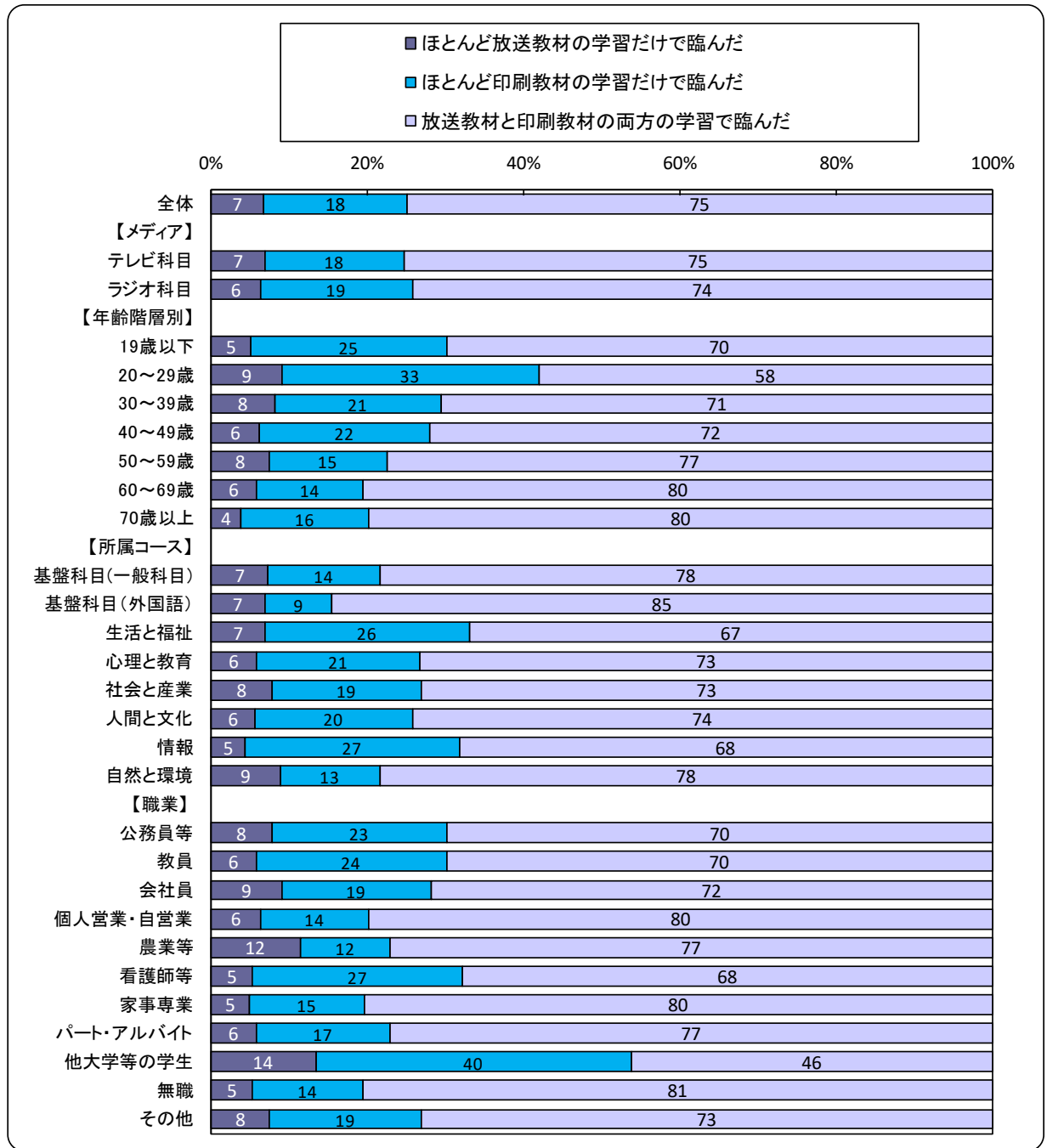
年齢階層別では、20 歳代が『ほとんど印刷教材の学習だけ』が 33%と、どの年代よりも高く、特徴的であった。

それ以上の年代では、60 歳代と 70 歳以上が『放送教材と印刷教材の両方の学習』が高い傾向であった。

所属コース別では、『放送教材と印刷教材の両方の学習』が高かったのは、「基盤科目（一般科目）」「基盤科目（外国語）」「自然と環境」であった。

職業別では、「他大学等の学生」は『ほとんど印刷教材の学習だけ』が 40%と、突出しており、他に「看護師等」も 27%と全体よりも 10 ポイント近く高かった。

図 2 - 1 5 【学部】 単位認定のための学習方法



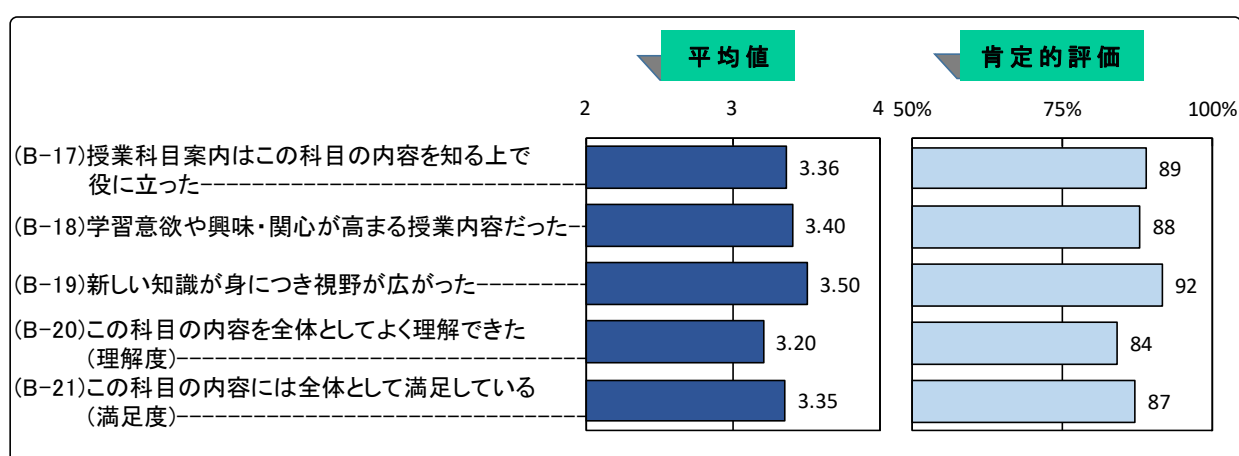
Ⅱ－1－3. 学部の授業評価

(1) 全体評価

次に学部の授業評価について、評価項目ごとに見ていく。

全体評価の各項目（図2－16）については、(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」が84%と最も低く、それ以外は90%前後の評価で、中でも(B-19)「新しい知識が身につき視野が広がった」は92%と高い評価を得ていた。

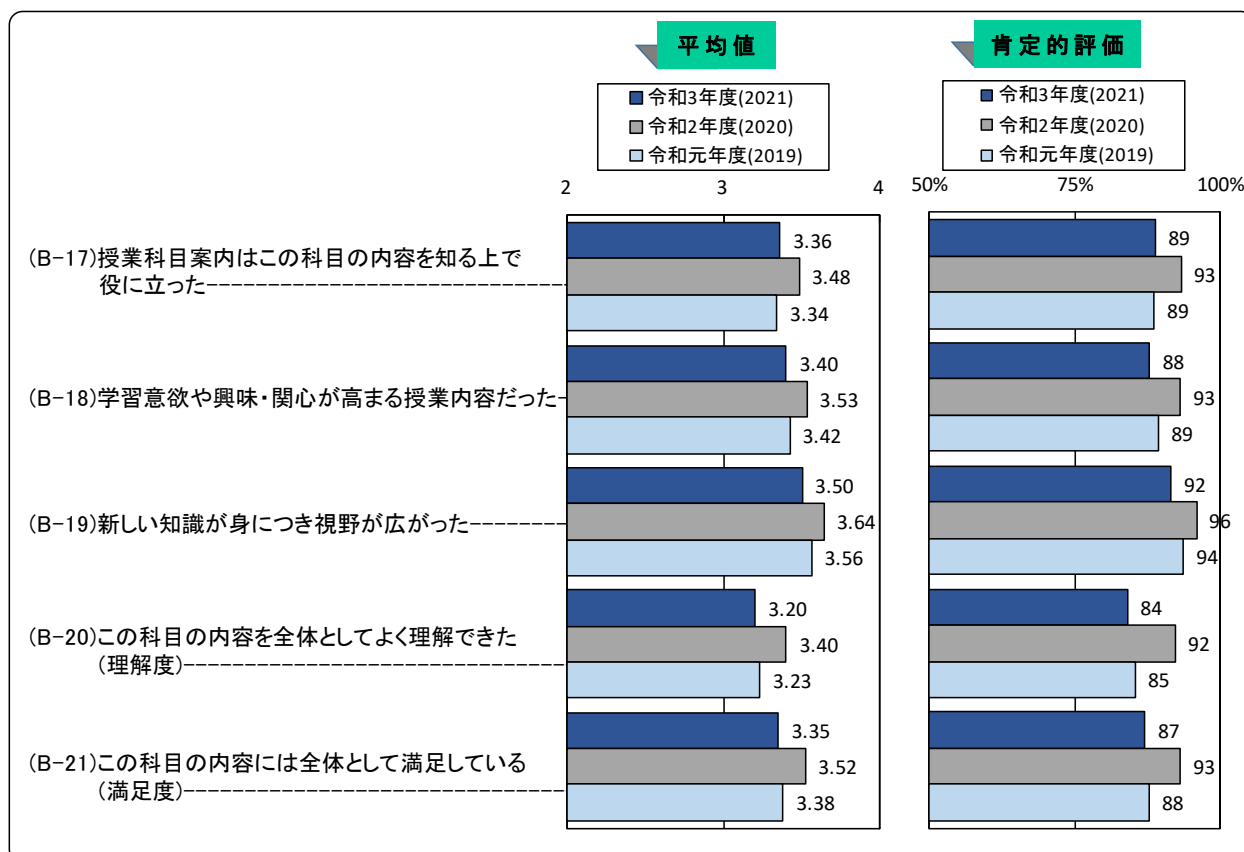
図2－16 【学部】回答者全体の全体評価



全体評価を時系列で見ると（図2-17）、本年度は、昨年度に比べ4～8ポイントの減少で、最も評価を下げたのは(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」で、84%と最も低率であった。

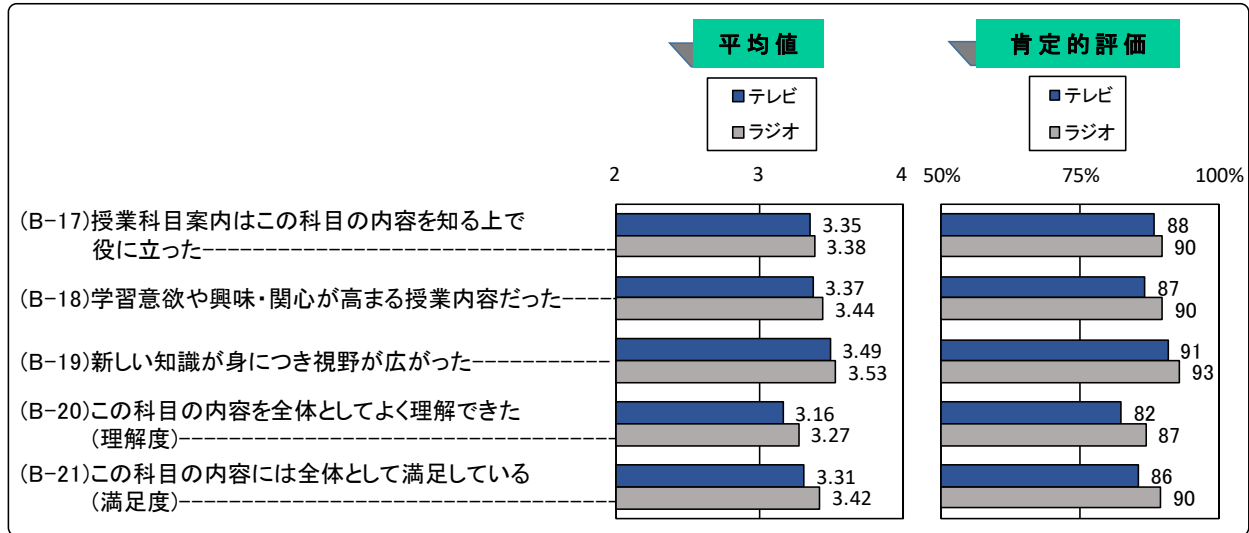
一昨年度との比較では、僅かであるが減少傾向であった。

図2-17 【学部】回答者全体の全体評価（時系列）



メディア別に全体評価を見ると（図2-18）、全項目でラジオの評価の方が高く、特に(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」で、差が5ポイントと大きかった。

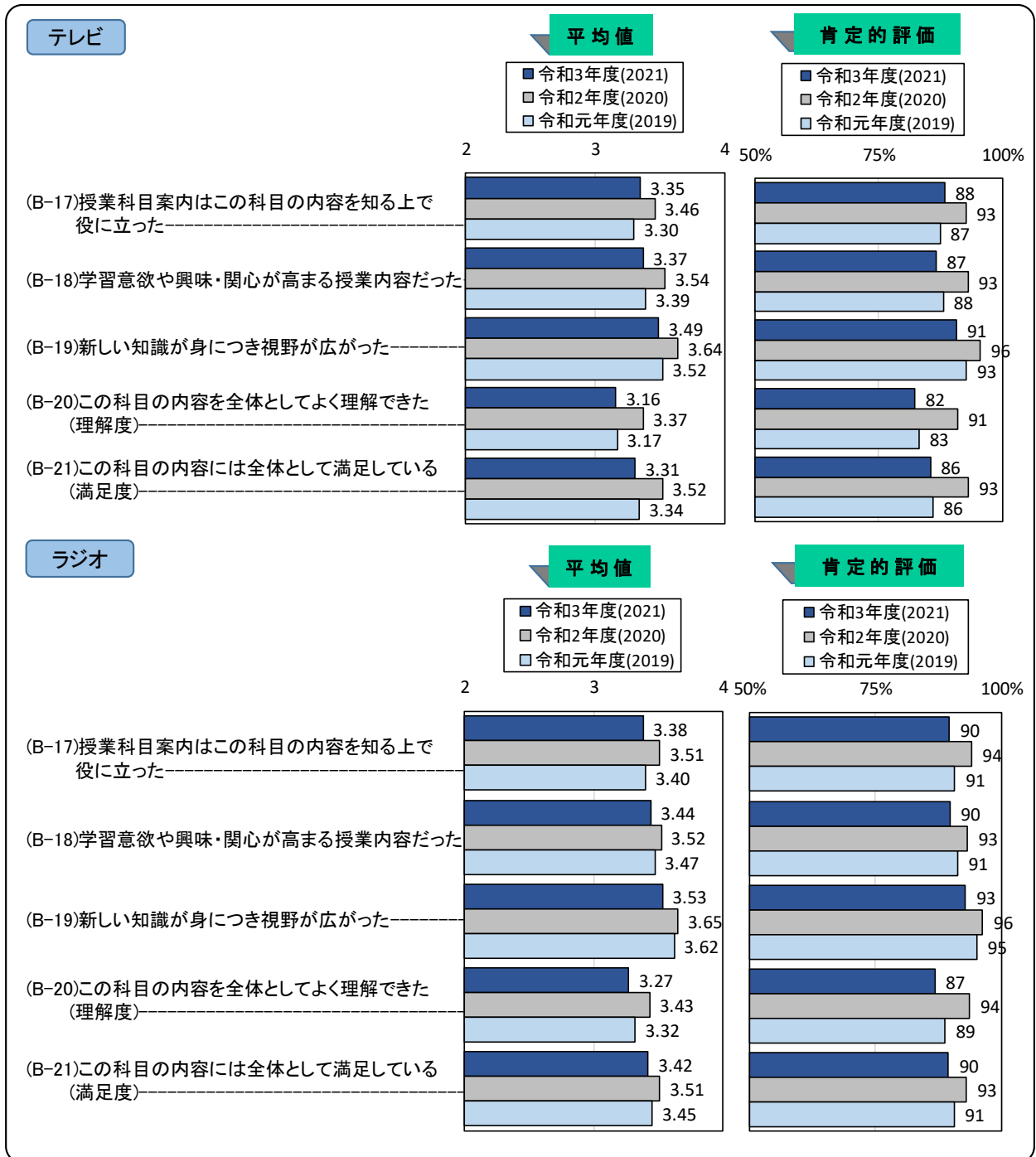
図2-18 【学部】メディア別の全体評価



メディア別の全体評価を時系列で見ると（図2-19）、昨年度と比べテレビ科目は、全ての項目で大きく減少しており、特に(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」は、9ポイントの大幅減であった。

ラジオ科目もテレビ科目に比べると減少幅は小さいが、全項目で評価が下がり、(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」で7ポイントの大幅減であった。

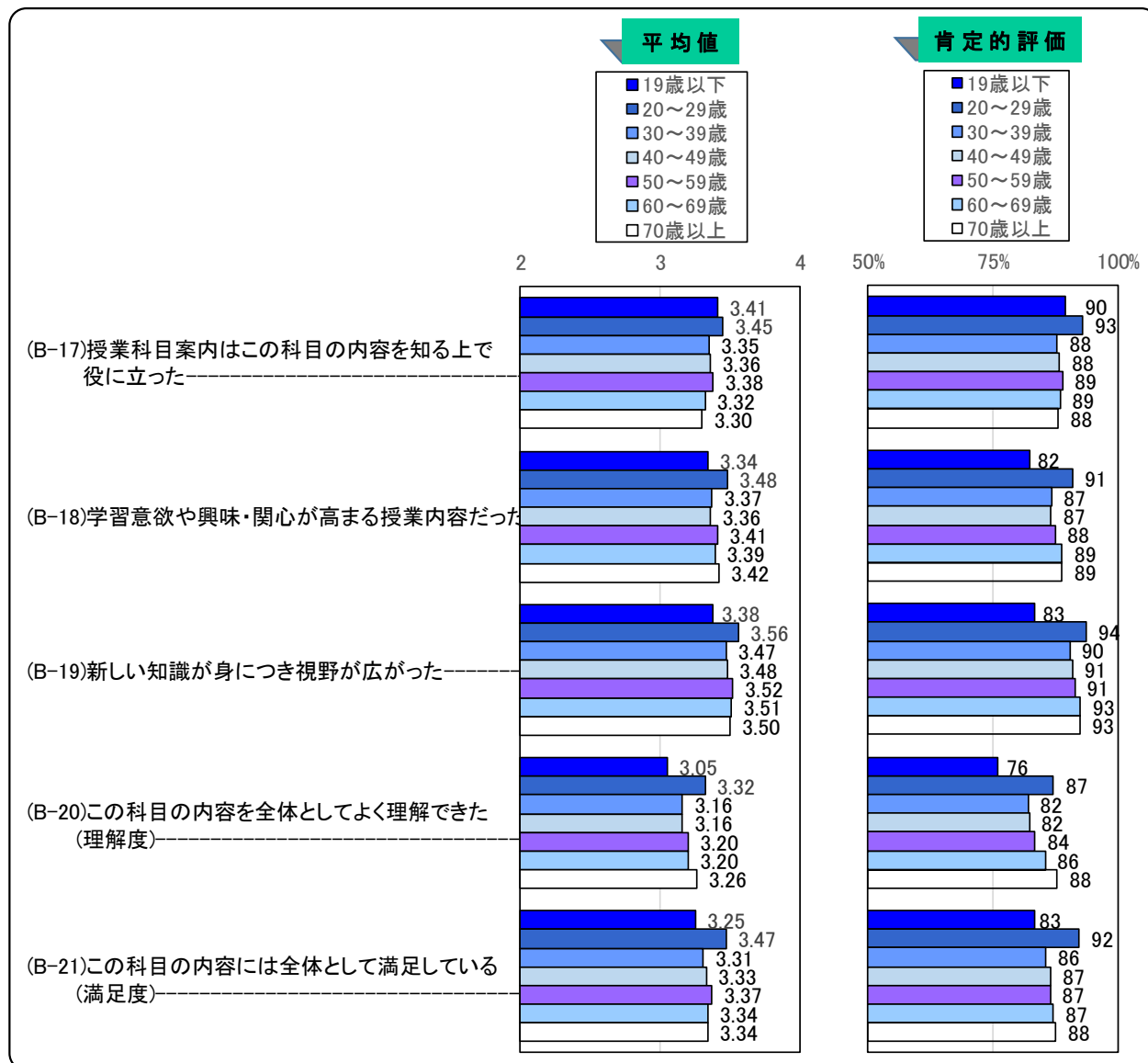
図2-19 【学部】メディア別の全体評価



年齢階層別に全体評価（図2-20）を見ると、20歳代が下記の項目全てにおいて、高い評価で、(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」以外は90%以上となり、その(B-20)「理解度」でも、70歳以上（88%）に次ぐ評価であった。

反対に評価が低かったのは、19歳以下で、(B-17)以外はどの年代より最も低く、(B-20)の「理解度」では、76%と他の年代より極端に低かった。

図2-20【学部】年齢階層別の全体評価

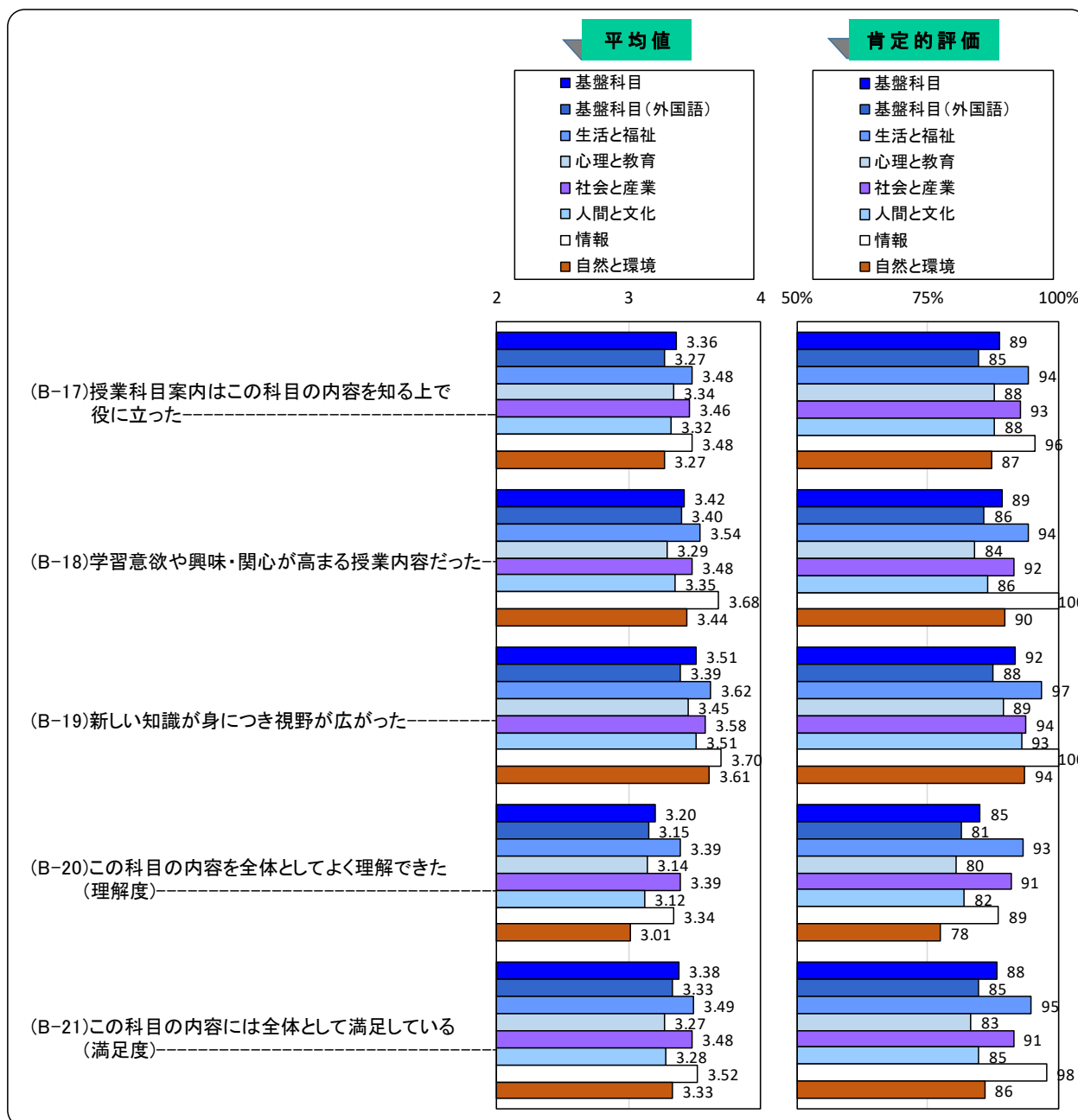


所属コース別の全体評価では（図 2 - 2 1）、「情報」は高い評価が多く、(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」以外で、96～100%の高率であった。その(B-20)「理解度」については、「生活と福祉」が 93%で最も高かった。

反対に低い評価であったのは、「基盤科目(外国語)」と「心理と教育」で、(B-20)「理解度」以外の項目で、下位 1, 2 位を占めていた。

(B-20)「理解度」では、「自然と環境」が 78%と全項目においても最も低くかった。

図 2 - 2 1 【学部】所属コース別の全体評価



職業別の全体評価（次頁図 2 - 2 2）では、(B-17)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」については、どの職業も 90%前後の一樣の評価であった。

(B-18)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」は、「他大学等の学生」が 94%と最も高い評価で、「農業等」が 85%と最も低かった。

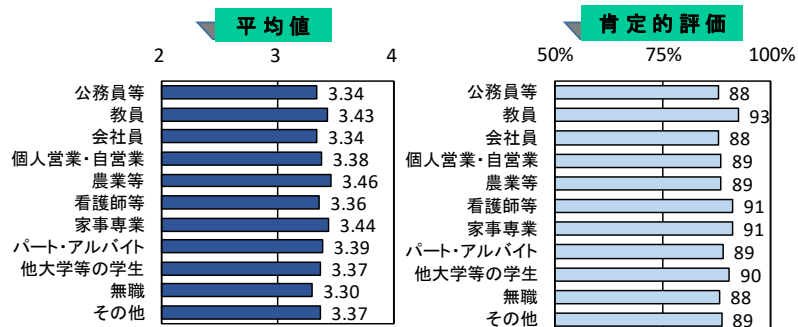
(B-19)「新しい知識が身につく視野が広がった」も評価は一樣で、90%前後であった。

(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」については、「教員」と「他大学等の学生」の評価が共に 87%と高く、それ以外の職業は 84%前後で、他の質問項目と比べ評価は低調であった。

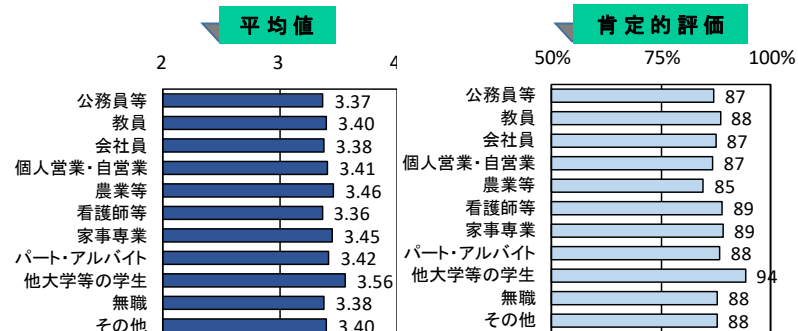
(B-21)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」については評価が分かれ、最も高かったのは「他大学等の学生」で 92%、反対に「農業等」は評価が極端に低く 81%で、他の職業は 86~89%の評価であった。

図 2 - 2 2 【学部】職業別の全体評価

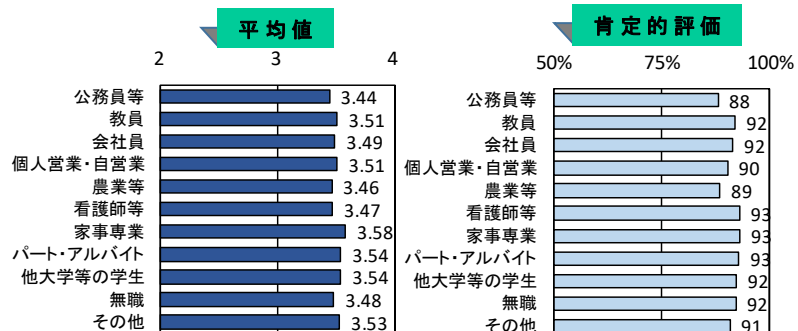
(B-17) 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った



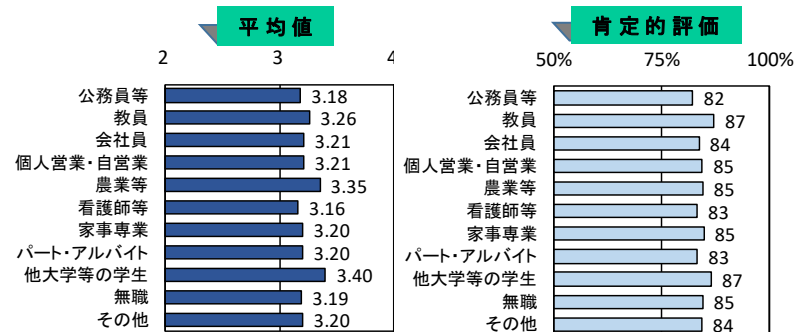
(B-18) 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった



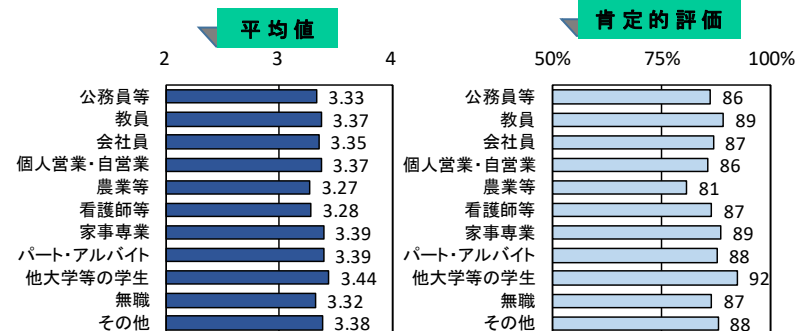
(B-19) 新しい知識が身につく視野が広がった



(B-20) この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)



(B-21) この科目の内容には全体として満足している(満足度)

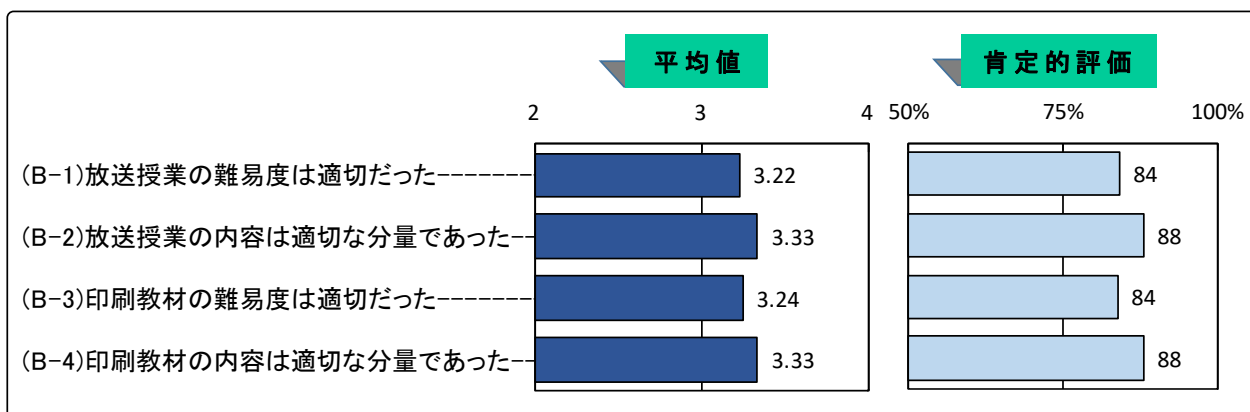


(2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量（図2-23）について、評価項目ごとに見ていくことにする。

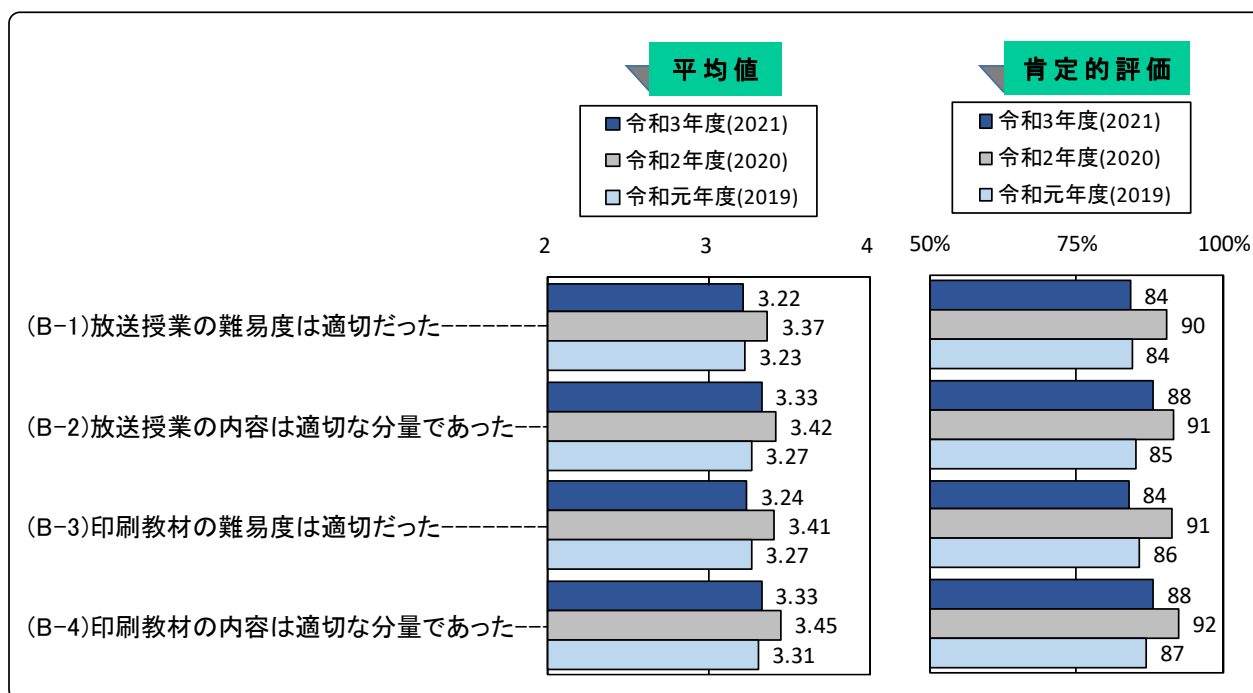
肯定的評価は、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」の難易度については、両項目とも84%、(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」の分量については、共に88%で、それぞれの「分量」についての評価の方が高かった。

図2-23 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価



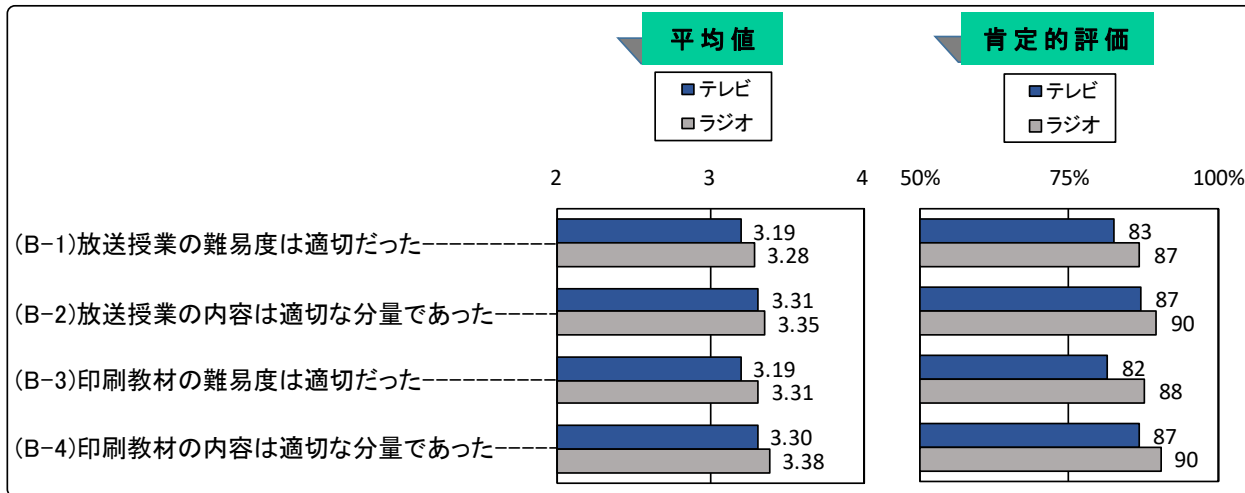
開設年度で比較すると(図2-24)、本年度は、昨年度と比べ各項目で評価が下がり、特に(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」の減少幅が大きく、6~7ポイントの落ち込みであった。

図2-24 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



メディア別に授業の難易度・分量を見ると（図2-25）、メディア間に差があり、いずれもラジオ科目の方が、評価が高く、特に(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では、ラジオ科目がプラス6ポイントと大きな差であった。

図2-25 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価

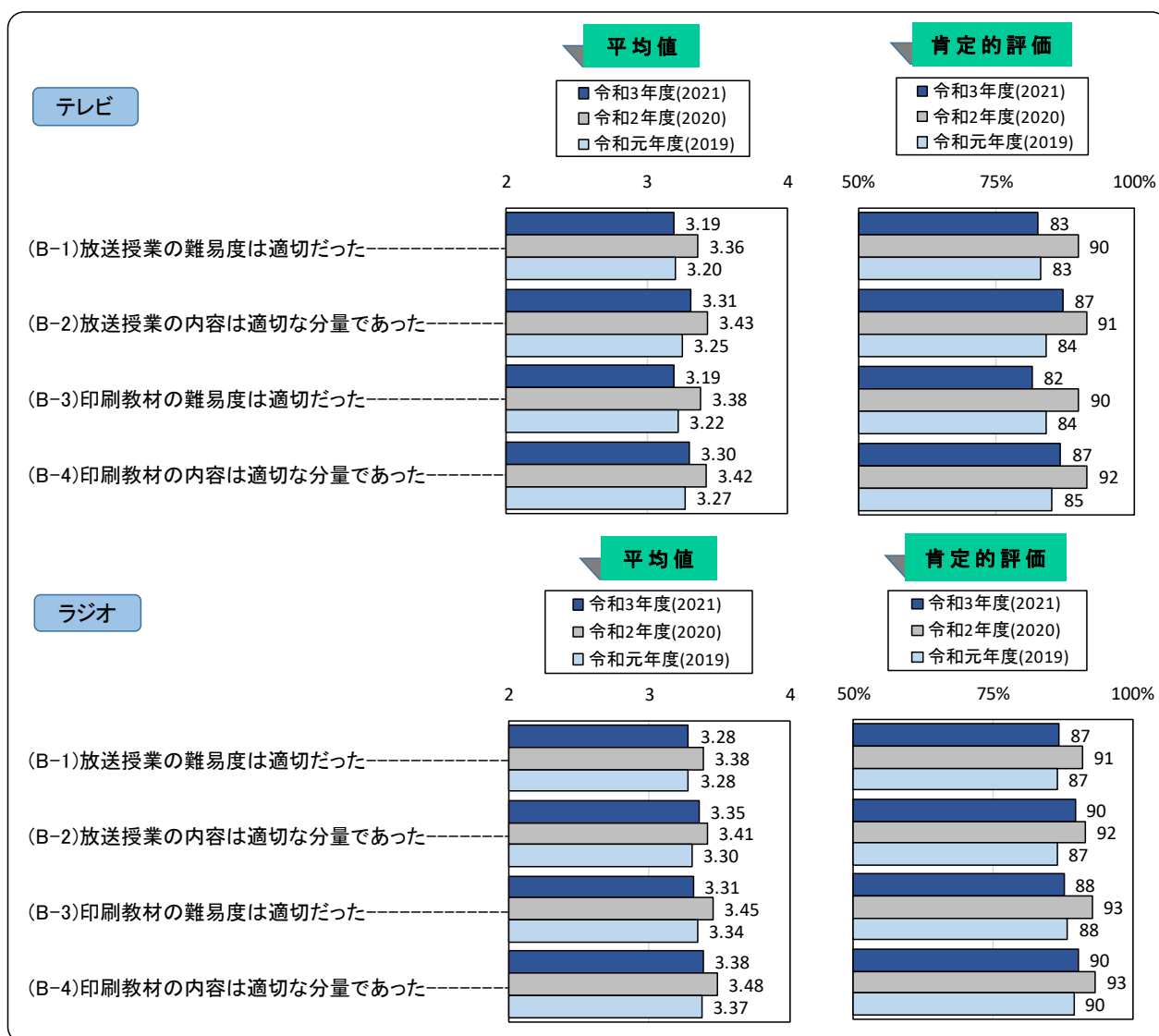


メディア別の授業の難易度・分量を開設年度で比較すると（図2-26）、テレビ科目の評価は、全ての項目で昨年度を4～8ポイント下回っており、下降傾向が見られた。

特に(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」の減少幅は、8ポイント減と大きかった。

ラジオ科目もテレビ科目同様、昨年度に比べ下降傾向で、テレビ科目程ではないが、全ての項目で昨年度を2～5ポイント下回っており、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」の減少が目立っていた。

図2-26 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



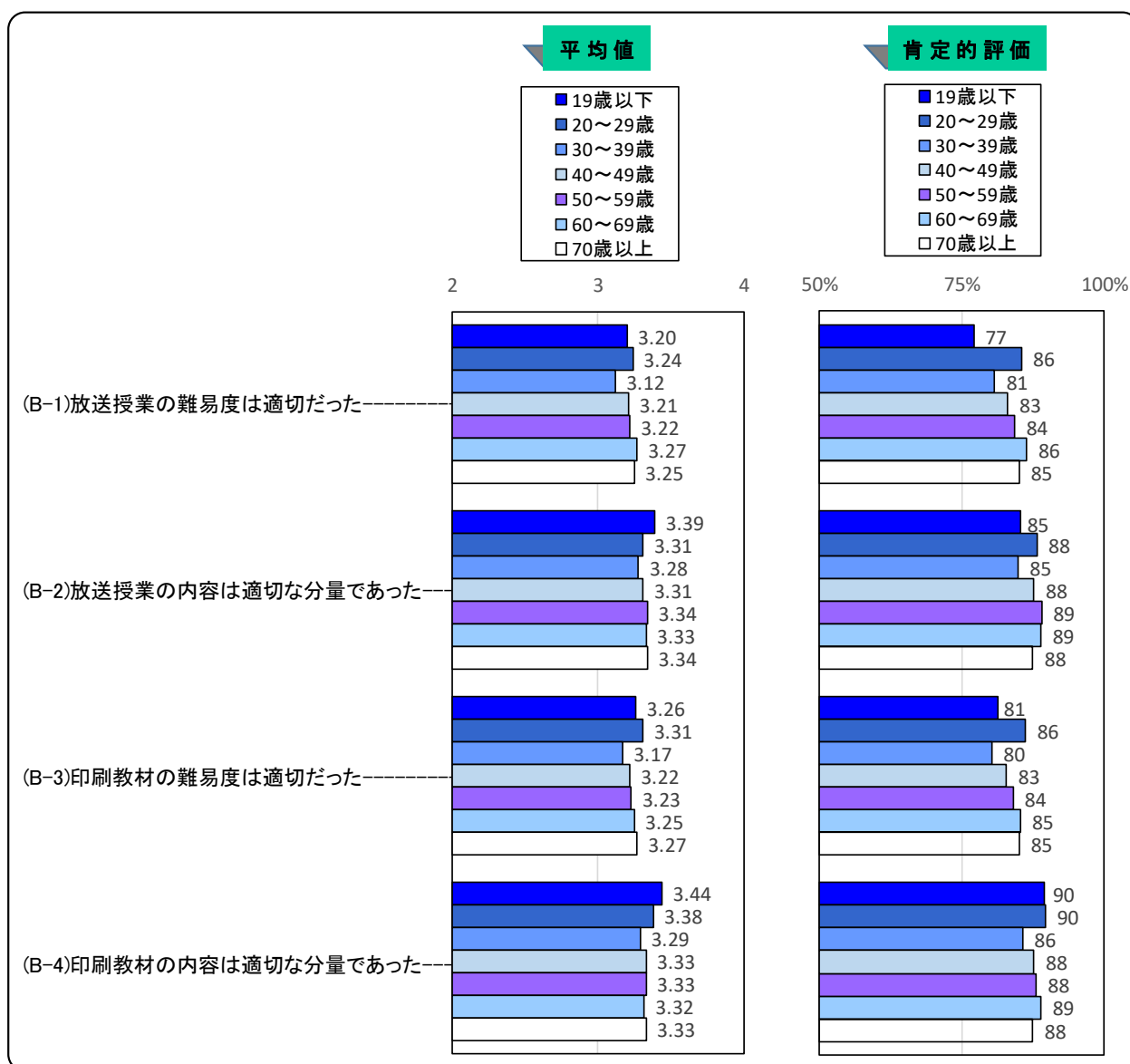
年齢階層別に授業の難易度・分量を見ると（図2-27）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は20歳代と60歳代が最も高く86%、反対に19歳以下は77%と極端に低かった。

(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」には、19歳以下と30歳代の評価が低く、共に85%で、それ以外の年代は88,89%であった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」も19歳以下と30歳代の評価が80%そこそこで、最も低かった。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」では、19歳以下と20歳代の若年層の評価が最も高く、90%に達していた。

図2-27 【学部】年齢階層別の授業難易度・分量の評価

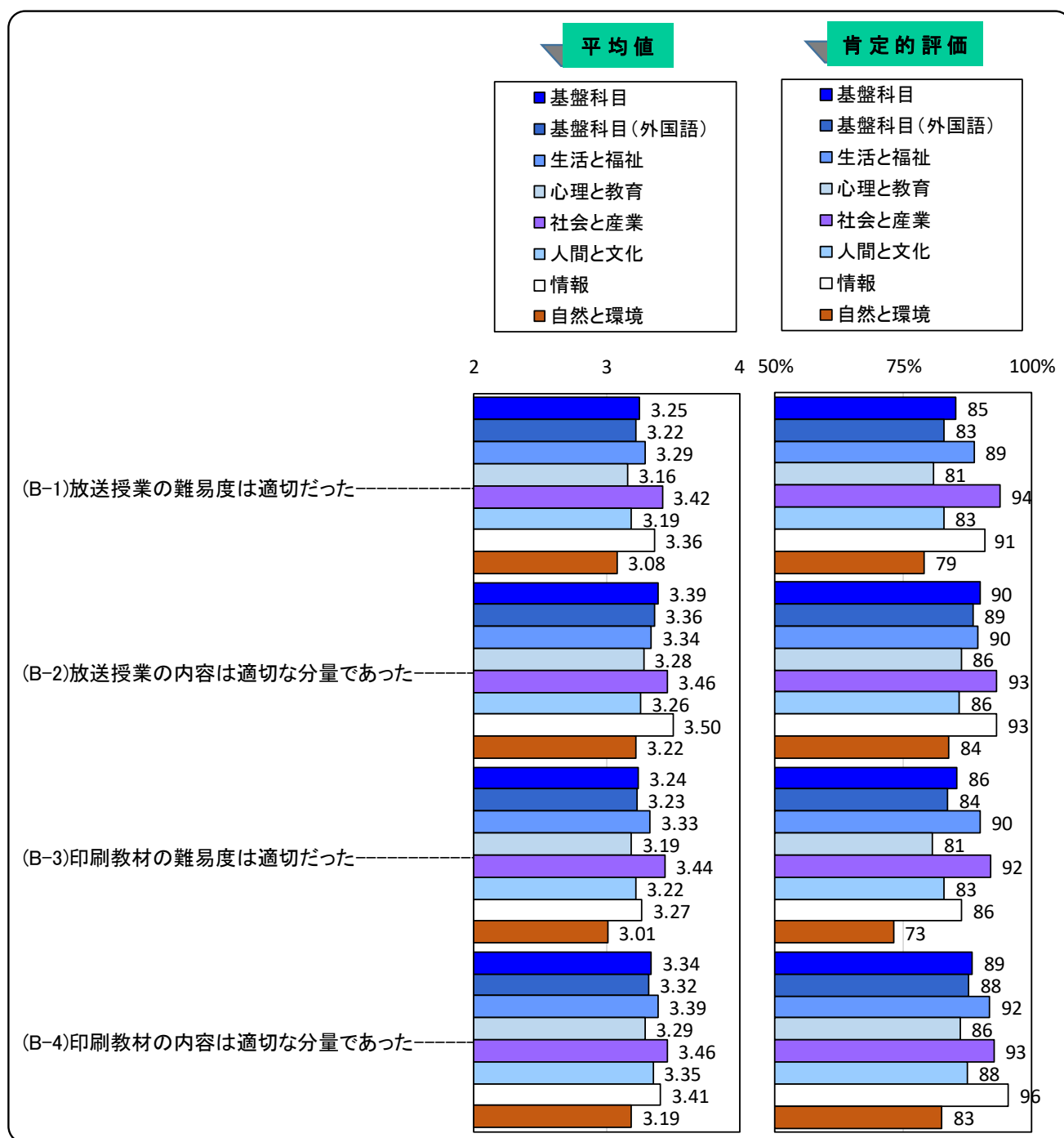


所属コース別に授業の難易度・分量を見ると（図2-28）、下記全ての項目で「社会と産業」が上位1位か2位となり、その評価は92～94%と、高い評価であった。

他に「情報」の評価も高く、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」以外では、上位1位か2位で、特に(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」が96%と目立っていた。

反対に「自然と環境」は全項目で最も低く、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」が73%と、他の所属コースよりも10ポイント近く下回っていた。

図2-28 【学部】所属コース別の授業難易度・分量の評価



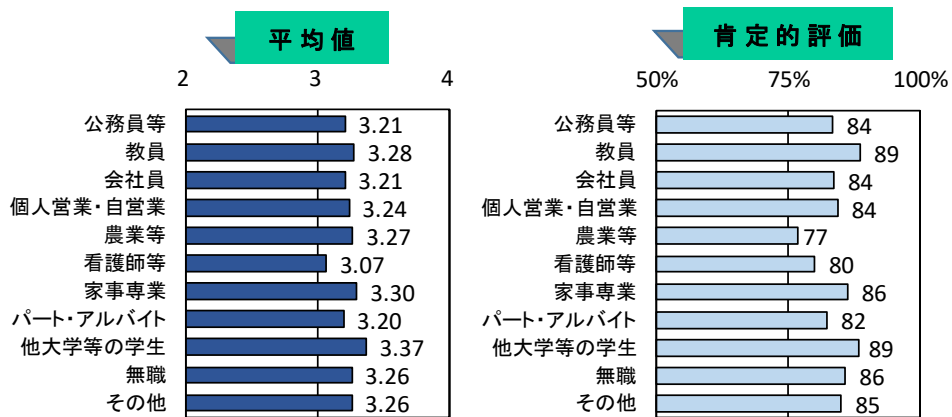
職業別に授業の難易度を見ると（次頁図 2 - 2 9）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」では、「教員」と「他大学等の学生」が 89%と最も高い評価で、反対に「農業等」と「看護師等」は評価が低く、80%以下の評価であった。

それ以外の項目でも、「教員」の評価が最も高く、特に(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」が 92%と、唯一 90% 超えであった。

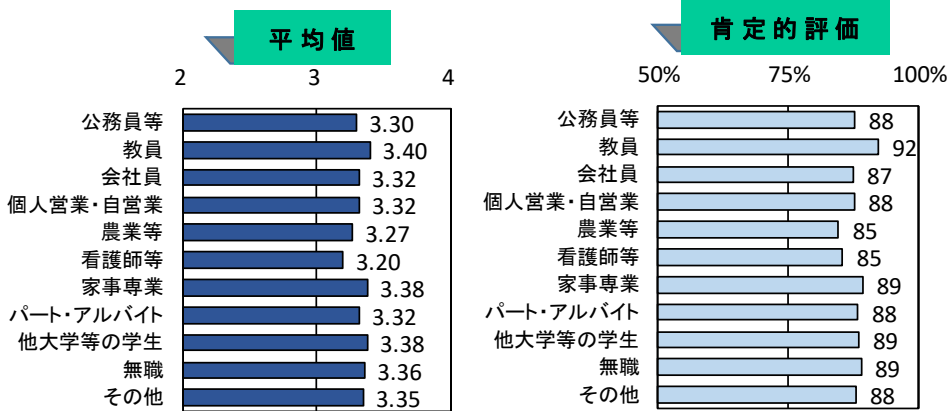
また、B-2～B-4 では、「農業等」と「看護師等」の評価は低く、下位 1 位, 2 位を占めていた。

図 2-29 【学部】職業別の授業難易度の評価

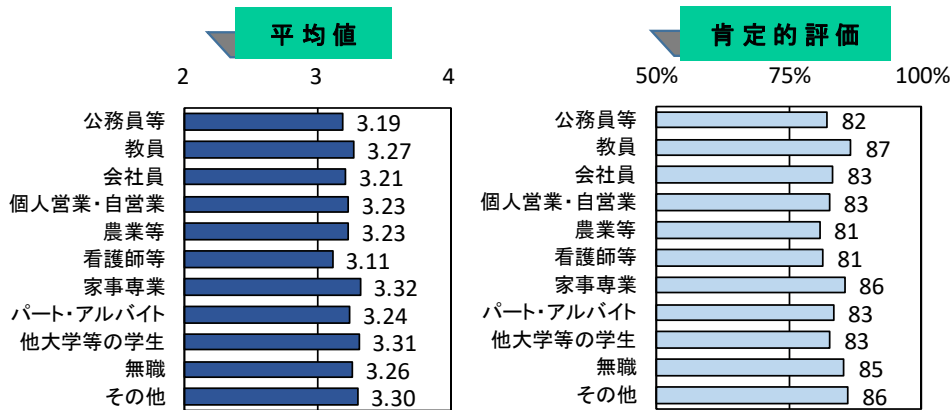
(B-1)放送授業の難易度は適切だった



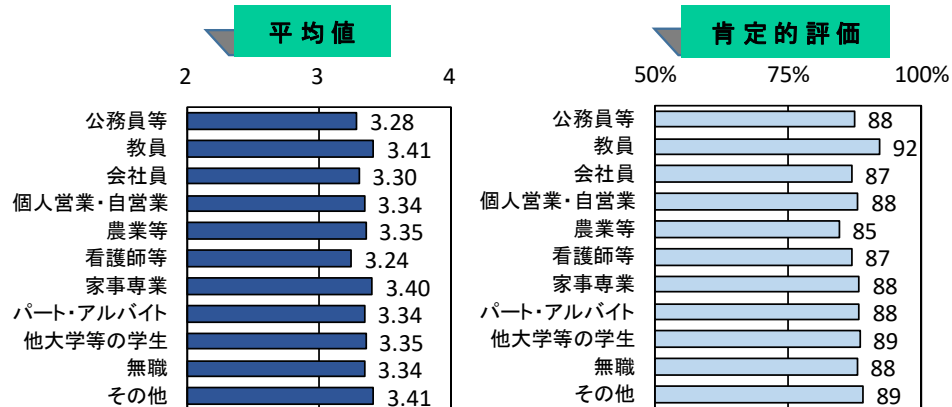
(B-2)放送授業の内容は適切な分量であった



(B-3)印刷教材の難易度は適切だった



(B-4)印刷教材の内容は適切な分量であった

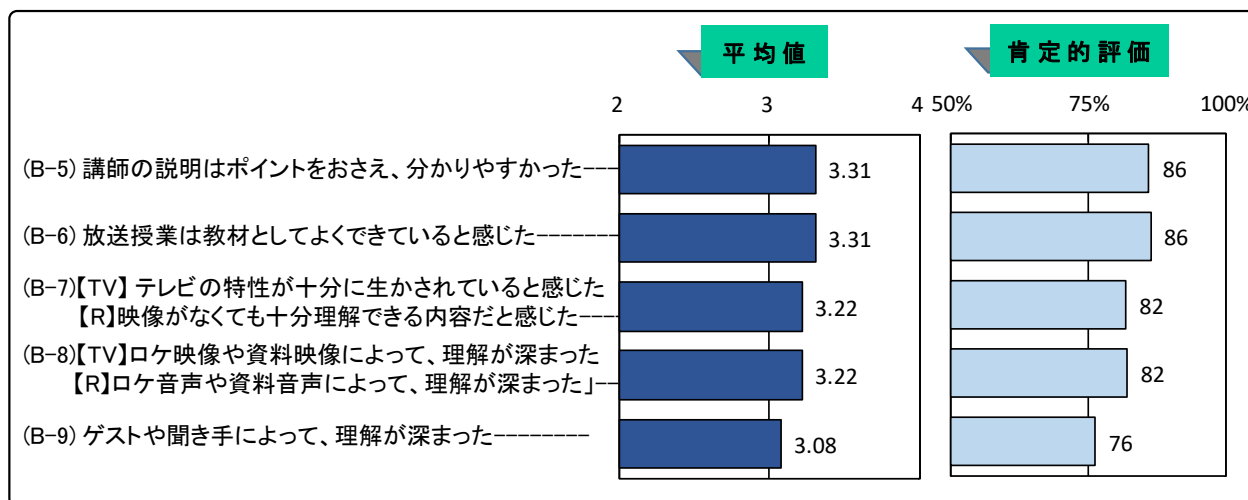


(3) 放送授業

ここからは放送授業について、評価項目ごとに見ていくことにする。

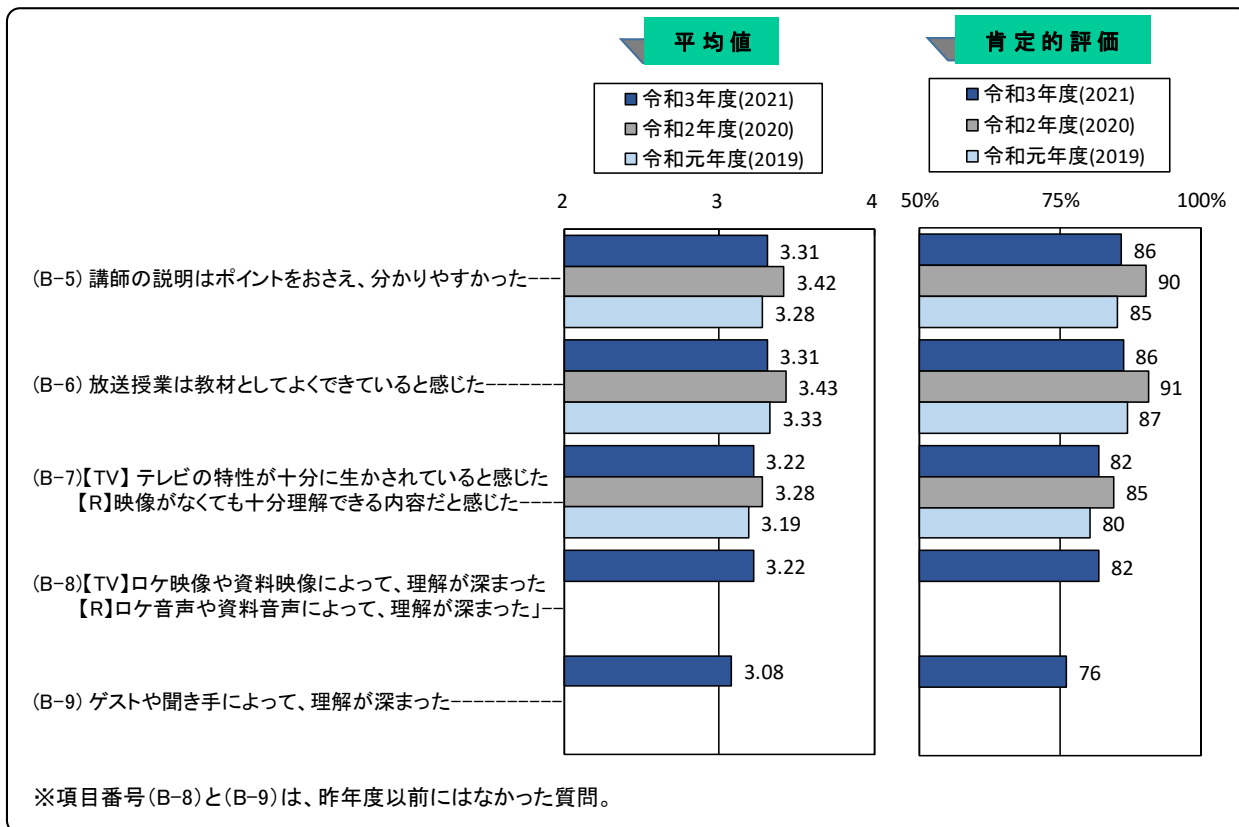
放送授業に関する評価項目（図2-30）では、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-6)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」が86%と高く、(B-9)「ゲストや聞き手によって、理解が深まった」は76%と、他の項目に比べると極めて評価が低かった。

図2-30 【学部】回答者全体の放送授業の評価



放送授業の評価を時系列で見ると（図2-31）本年度は、昨年度と比べると、(B-5)～(B-7)の項目全てで、評価を下げており、特に(B-6)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は、昨年度比マイナス5ポイントと、下げ幅は大きかった。

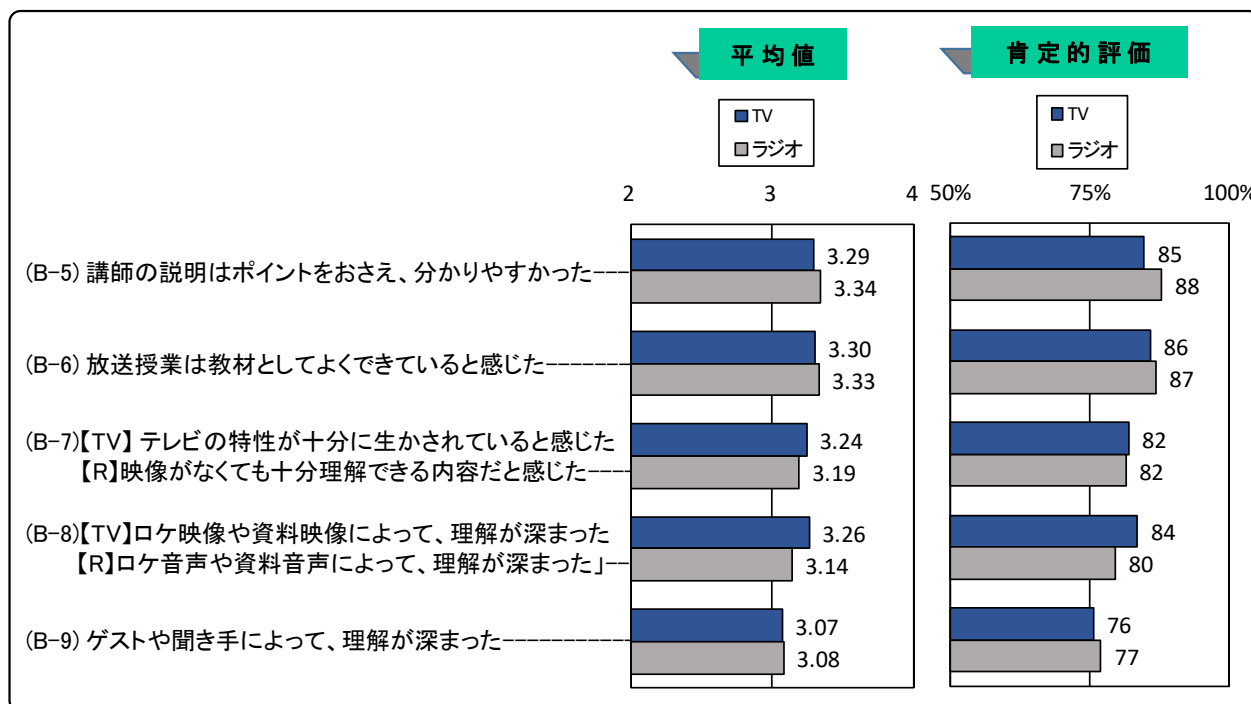
図2-31 【学部】回答者全体の放送授業の評価（時系列）



メディア別に放送授業の肯定的評価を見ると（図 2-3 2）」、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」はラジオ科目が 88%と、テレビ科目より評価が高く、反対に、(B-8)「【TV】ロケ映像や資料映像によって、理解が深まった/【R】ロケ音声や資料音声によって、理解が深まった」では、テレビ科目が 84%と、ラジオ科目より評価が高かった。

他の項目については、両メディアは同じ水準であった。

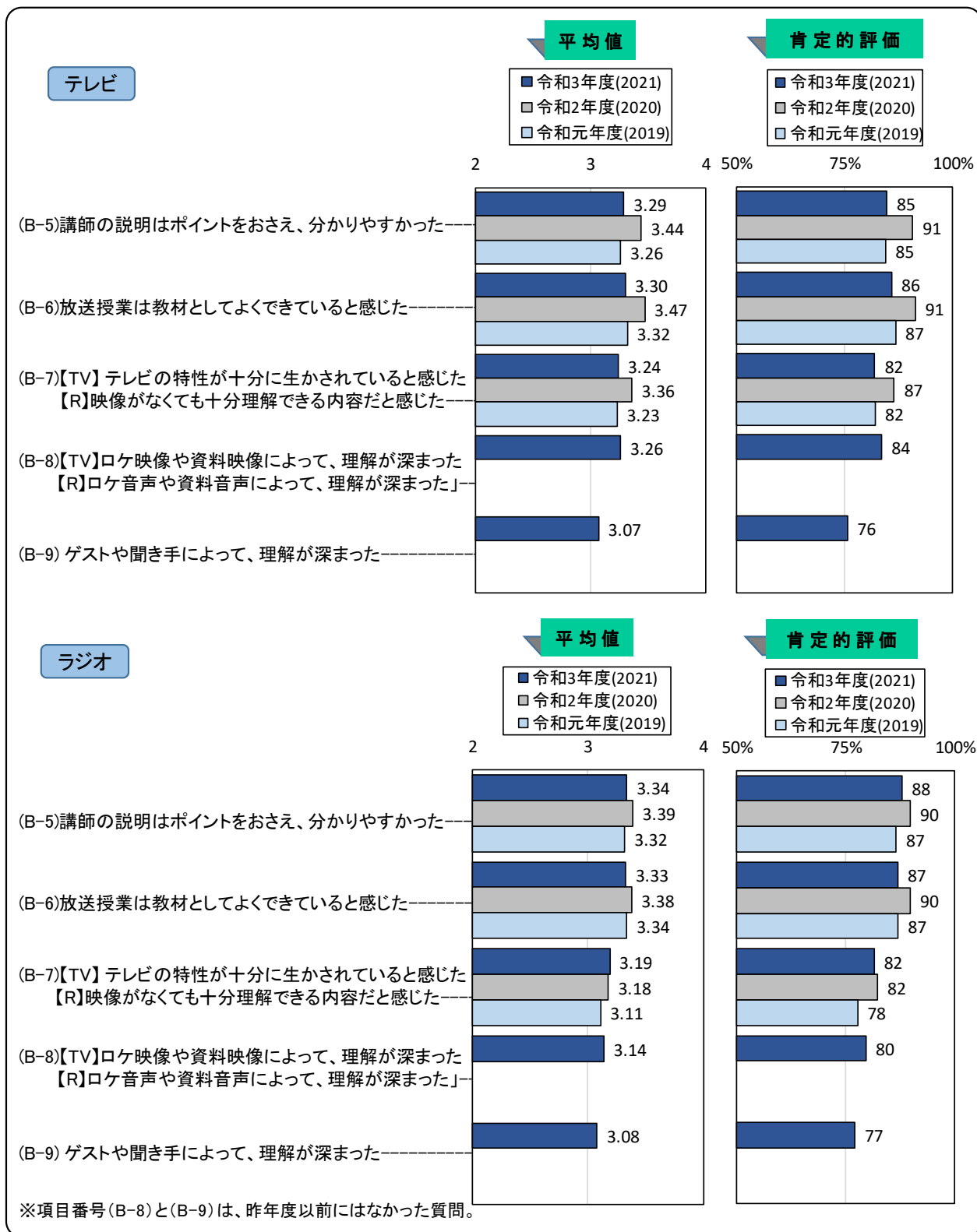
図 2-3 2 【学部】メディア別の放送授業の評価



また、メディア別に放送授業の評価を時系列で見ると（図2-33）、(B-5)～(B-7)の3項目は、テレビ科目は、昨年度との比較で、5,6ポイント評価を下げていた。

同様にラジオ科目でも、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-6)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」については、マイナス2,3ポイントの減少だが、テレビ科目ほどではなかった。

図2-33 【学部】メディア別の放送授業の評価（時系列）

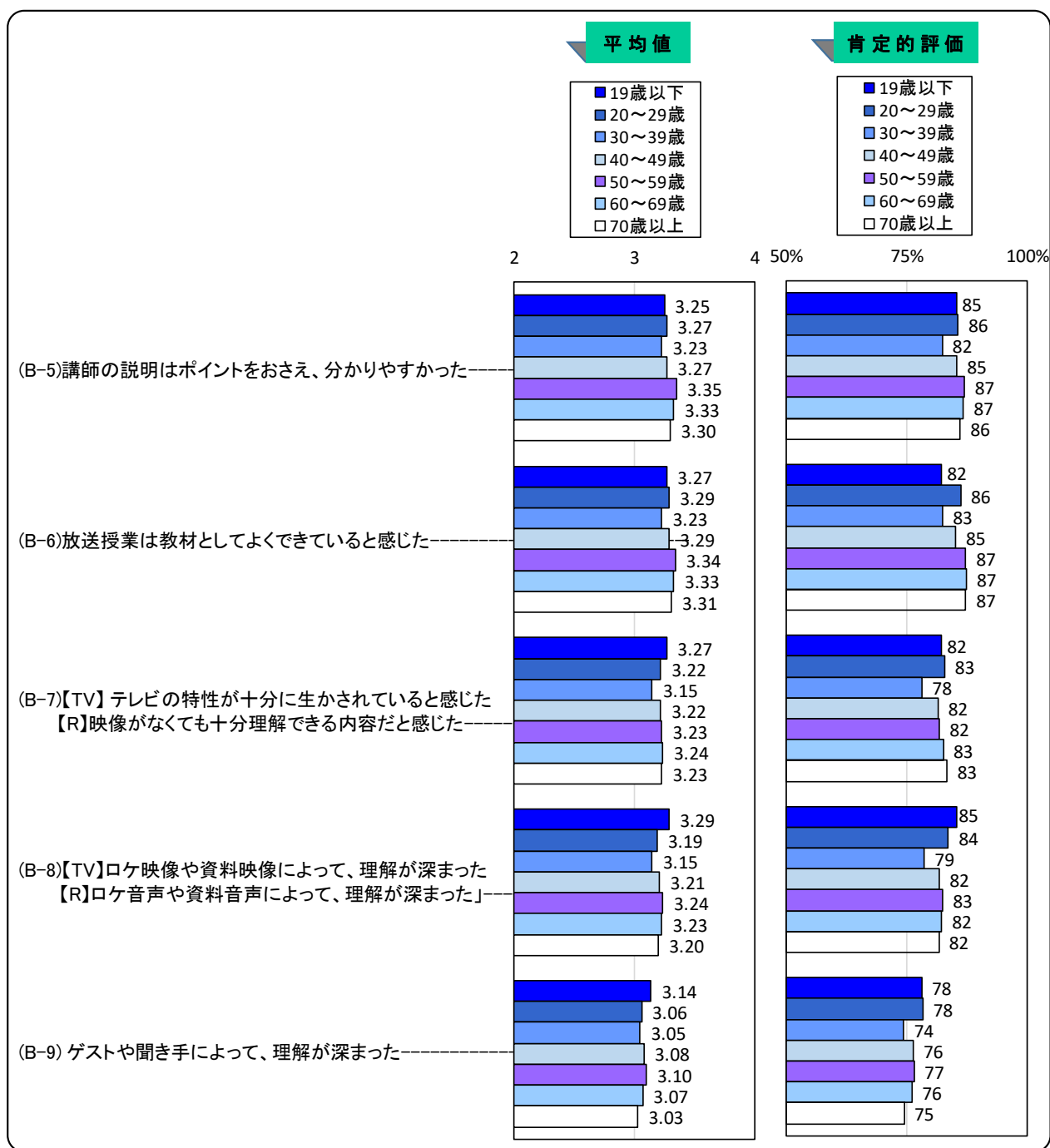


年齢階層別の放送授業の評価で（図2-34）特徴的であったのは、下記の項目で（B-6）「放送授業は教材としてよくできていると感じた」を除けば、30歳代の評価が最も低かった。

その（B-6）では、19歳以下の評価が82%と最も低く、次いで30歳代の83%であった。

全ての項目を見てみると、高評価が目立つ年代はなく、前述の内容以外は、概ね一様の評価であった。

図2-34 【学部】年齢階層別の放送授業の評価

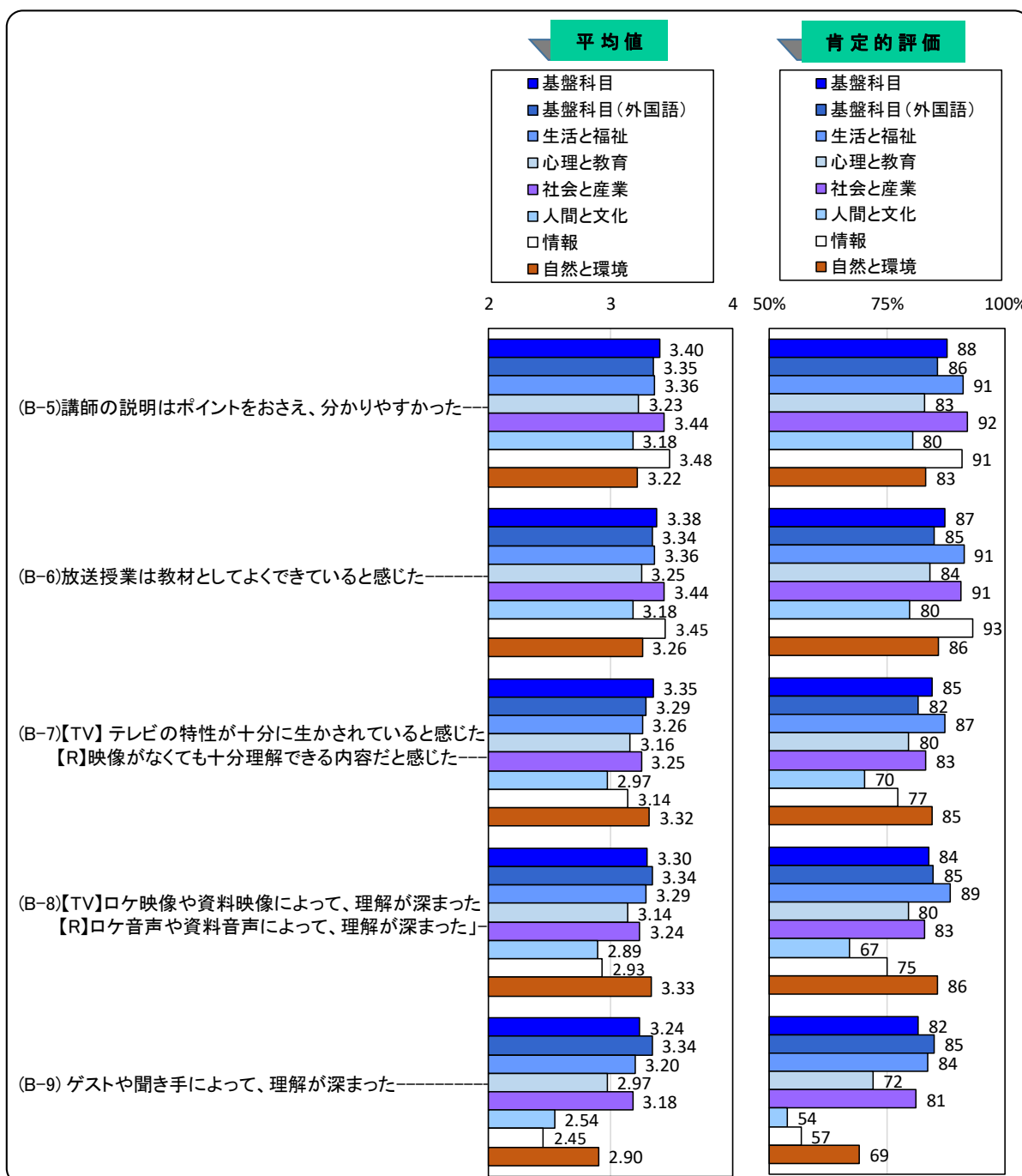


所属コース別に放送授業の評価を見ると（図2-35）、特徴的であったのは、「生活と福祉」が全ての項目で上位1位か2位の高評価であった。

(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は「社会と産業」(92%)が、(B-6)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は、「情報」(93%)、(B-9)は、「基盤科目(外国語)」(85%)が最も評価が高かった。

反対に低い評価であったのは、「人間と文化」で、全ての項目で最も低く、特に(B-9)「ゲストや聞き手によって、理解が深まった」が、54%と顕著であった。また、(B-9)では「情報」の評価も57%に過ぎず、特異な傾向が見られた。

図2-35 【学部】所属コース別の放送授業の評価

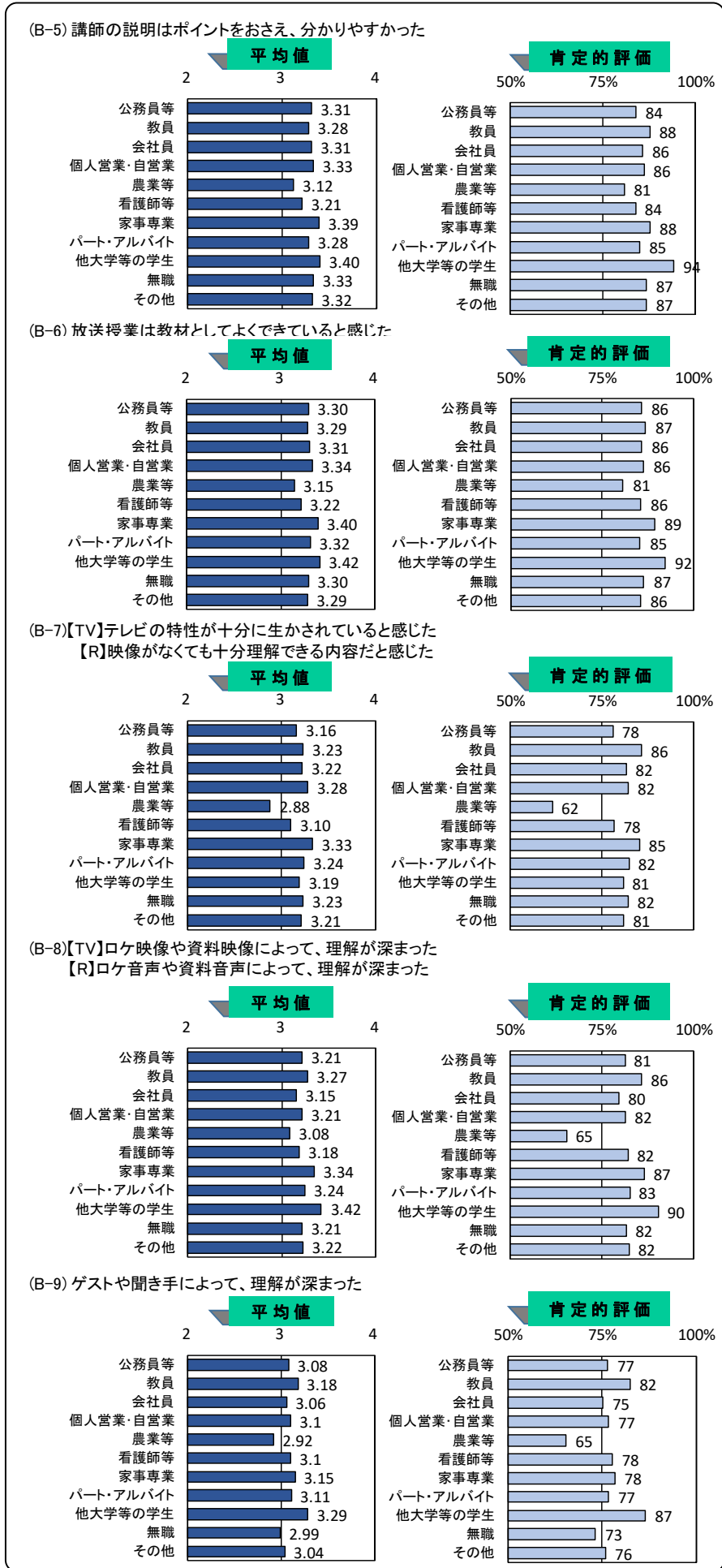


職業別の放送授業の評価（次頁図 2 - 3 6）で特徴的な傾向は、(B-7)を除く全ての項目で「他大学等の学生」が最も高い評価で、特に(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は 94%と突出していた。

(B-7)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた / 【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は、「教員」が 86%と最も高い評価であった。

反対に全ての項目で、最も低い評価をしたのは「農業等」で、特に(B-7)の評価が 62%で、他の職業より 16 ポイント以上下回っていた。

図 2 - 3 6 【学部】職業別の放送授業の評価

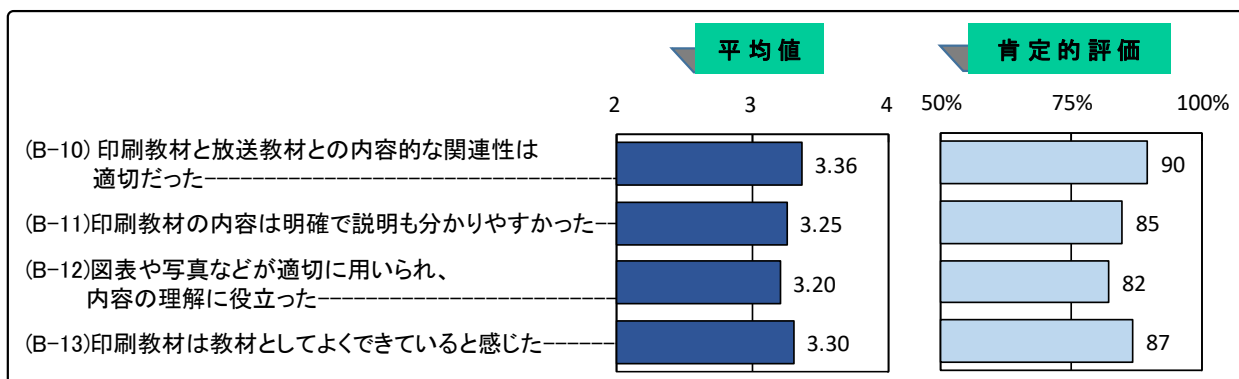


(4) 印刷教材

ここからは印刷教材について、評価項目ごとに見ていくことにする。

印刷教材の評価項目では(図2-37)、(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」が90%と最も高く、(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」が82%と最も低かった。

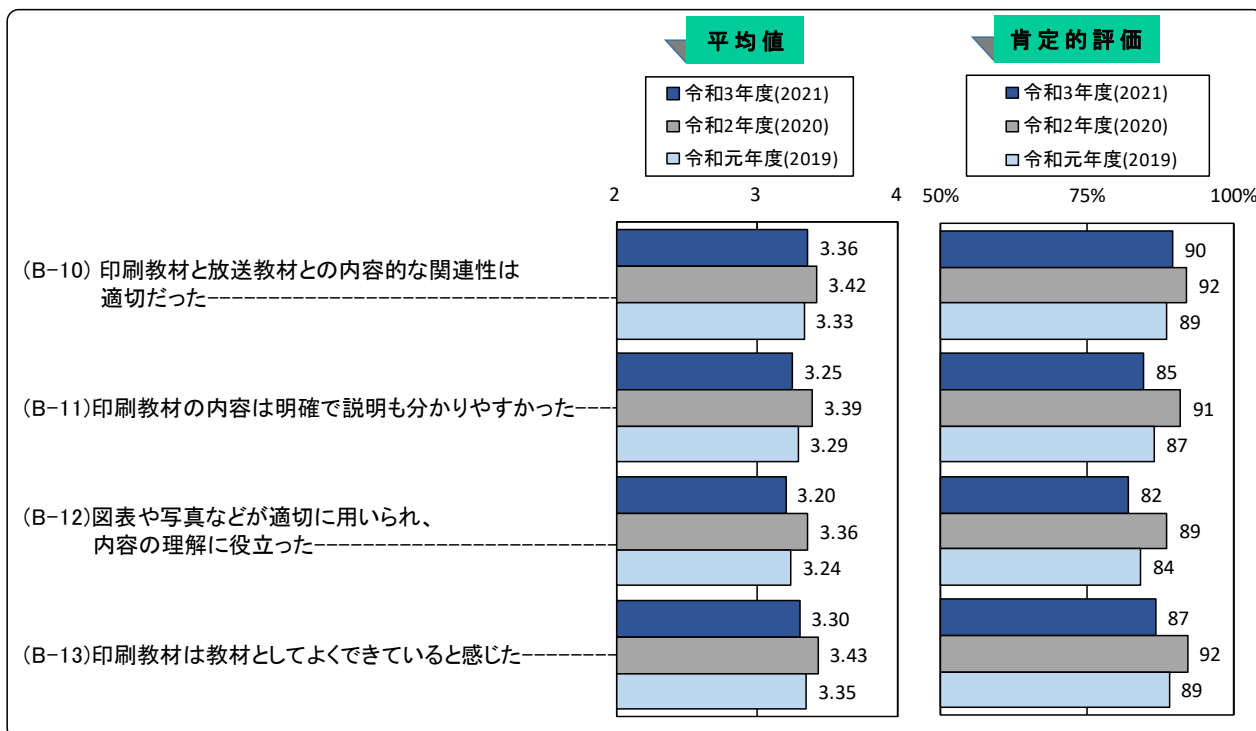
図2-37【学部】回答者全体の印刷教材の評価



印刷教材の評価を時系列で見ると(図2-38)、本年度は全て項目で昨年度から評価を下げ、特に(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では、昨年度より7ポイント減と、大幅な落ち込みが見られた。

他にも(B-11)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」や(B-13)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」も5,6ポイントの減少で、その幅は少なくなかった。

図2-38【学部】回答者全体の印刷教材の評価(時系列)

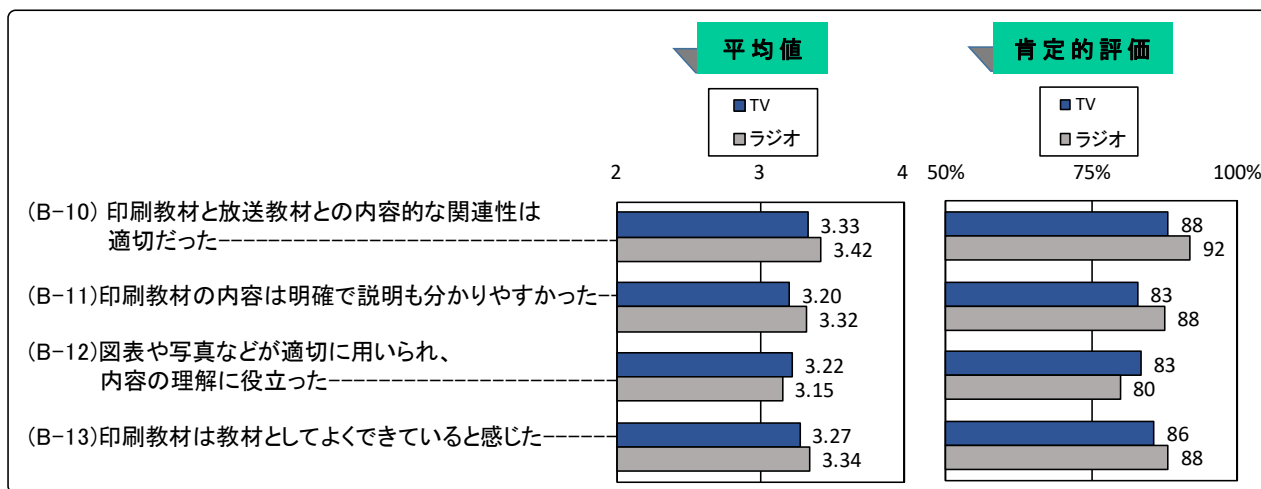


メディア別に印刷教材の評価を見ると（図2-39）、(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」以外は、ラジオ科目の評価が2～5ポイント高かった。

特に(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と(B-11)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」については、4,5ポイント、ラジオ科目の方が高く、その差は小さくなかった。

テレビ科目の評価が高かったのは、(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」で、3ポイントの差であった。

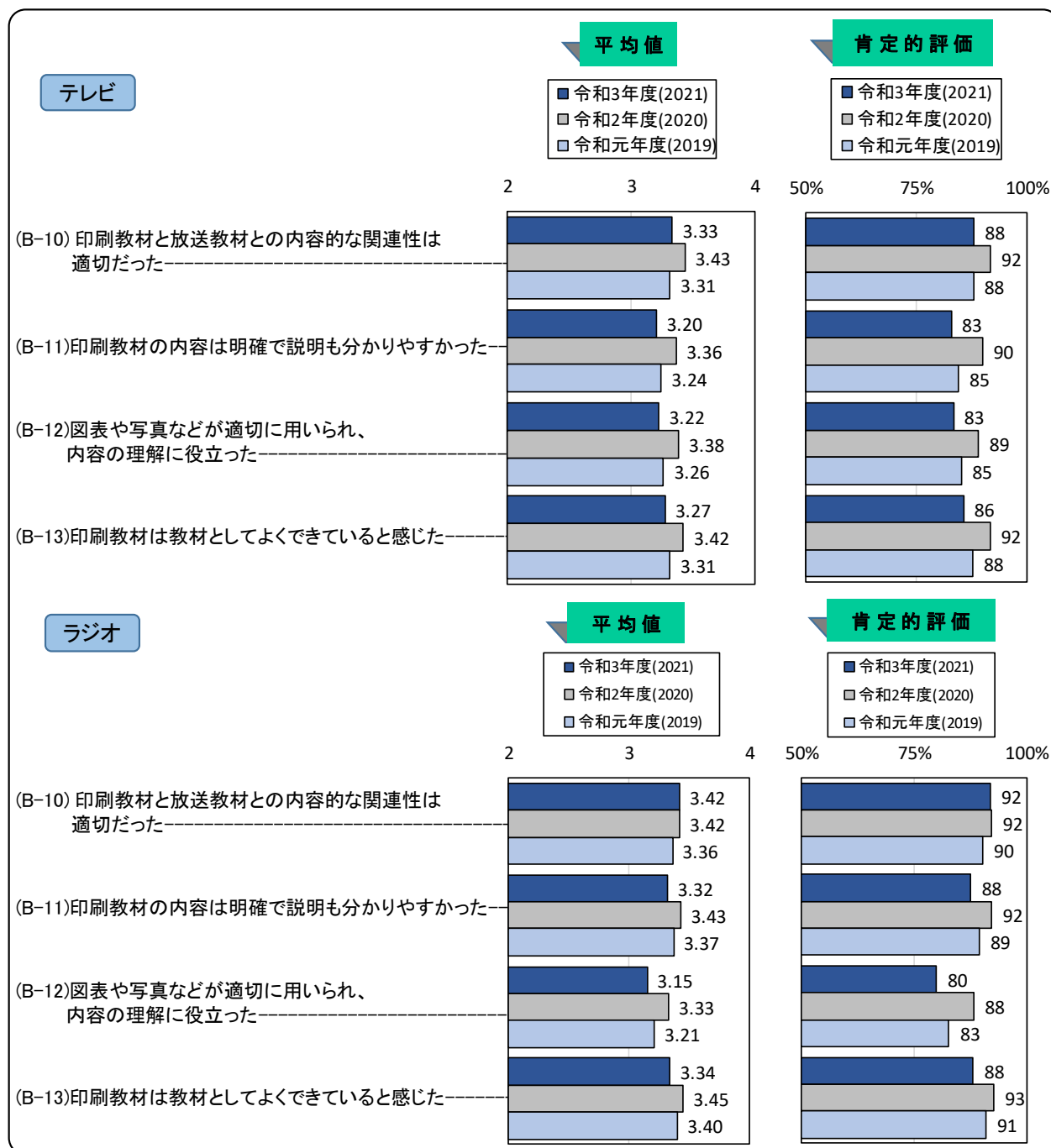
図2-39 【学部】メディア別の印刷教材の評価



メディア別の印刷教材の結果を時系列で見ると（図2-40）、テレビ科目では、本年度は、全ての項目で昨年度から評価を下げており、特に(B-11)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」、(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」、(B-13)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は、マイナス6,7ポイントと、大幅減であった。

同様にラジオ科目では、(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」だけは、昨年度と変わらなかったが、残る3項目は4ポイント以上のマイナスで、特に(B-12)の項目では、8ポイント減と極端な落ち込みであった。

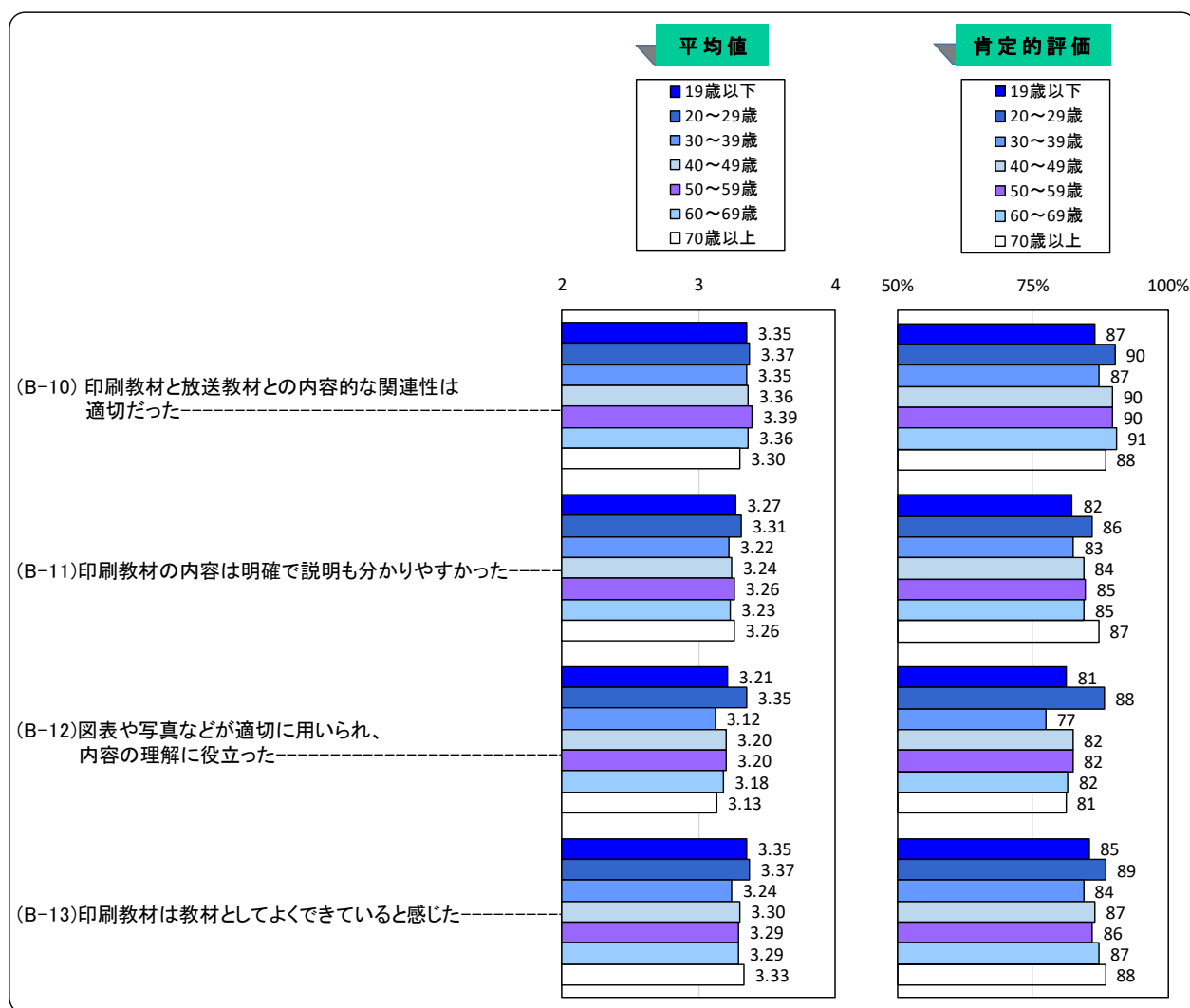
図2-40 【学部】メディア別の印刷教材の評価（時系列）



年齢階層別に印刷教材の評価を見ると（図2-41）、20歳代の評価が高く、上位1位か2位で、(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では88%と、他の年代から群を抜いていた。

反対に評価が低かったのは、19歳以下と30歳代で、全ての項目において、下位1,2位となっていた。

図2-41 【学部】年齢階層別の印刷教材の評価



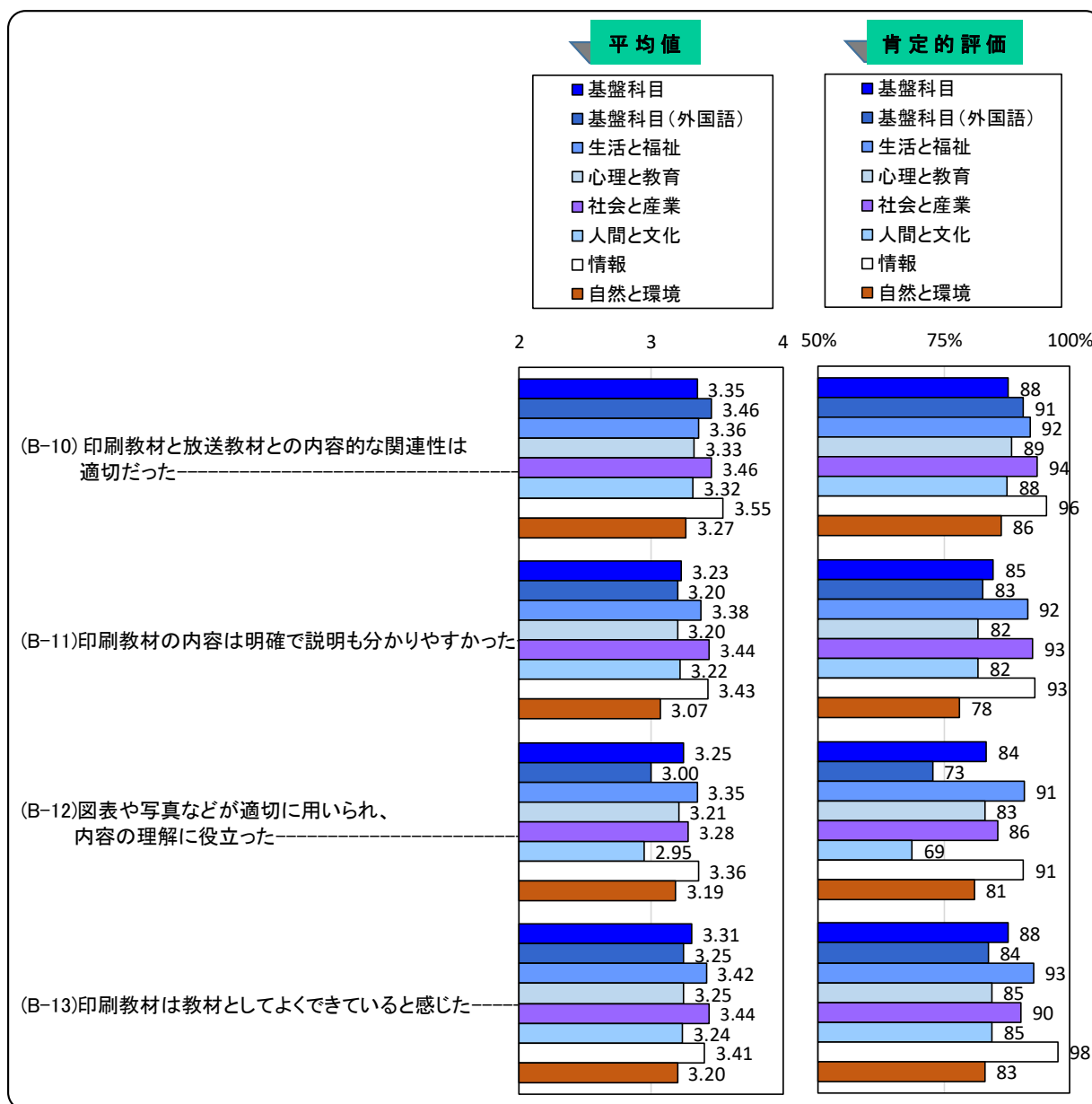
所属コース別に印刷教材の評価を見ると(図2-42)、「情報」が、全ての項目で90%以上の評価で、特に(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」と(B-13)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」では、「生活と福祉」と共に際立っていた。

(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と(B-11)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」については、「社会と産業」の評価も高かった。

反対に評価が低かったのは、「自然と環境」で、(B-12)を除く項目で最も評価が低かった。

(B-12)で最も評価が低かったのは、「人間と文化」(69%)で唯一70%を下回っていた。

図2-42【学部】所属コース別の印刷教材の評価

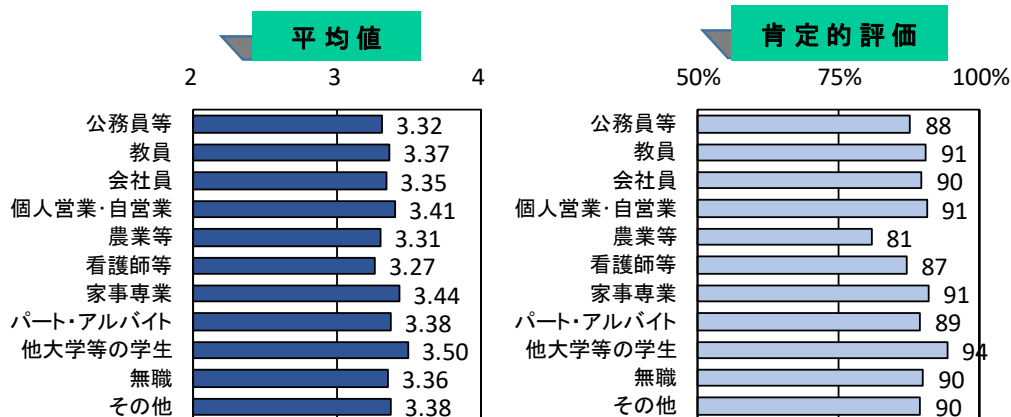


職業別の印刷教材の評価（次頁図 2 - 4 3）で、特徴的であったのは、「家事専業」の評価が高く、(B-10)以外は 1 位の評価で、(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」も、トップの「他大学等の学生」（94%）の次に着けていた。

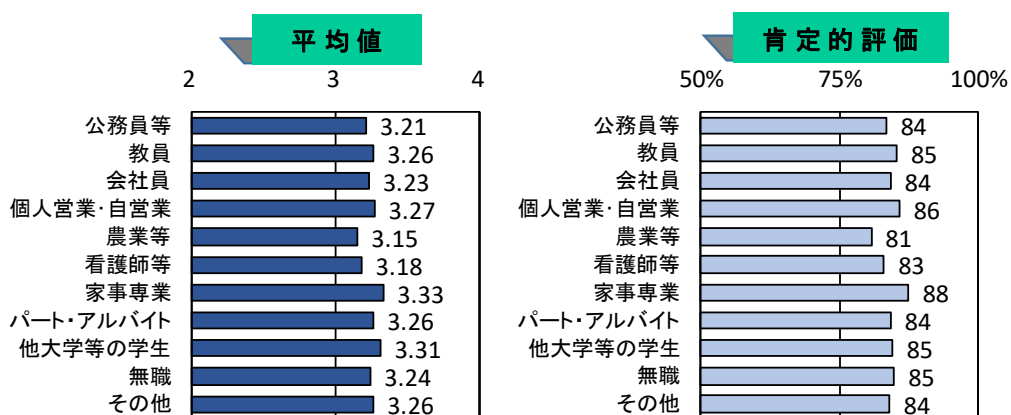
反対に評価が低かったのは「農業等」で、全項目で最も評価が低く、(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」と(B-13)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」では、77%と、唯一の 70%代であった。

図 2 - 4 3 【学部】 職業別の印刷教材の評価

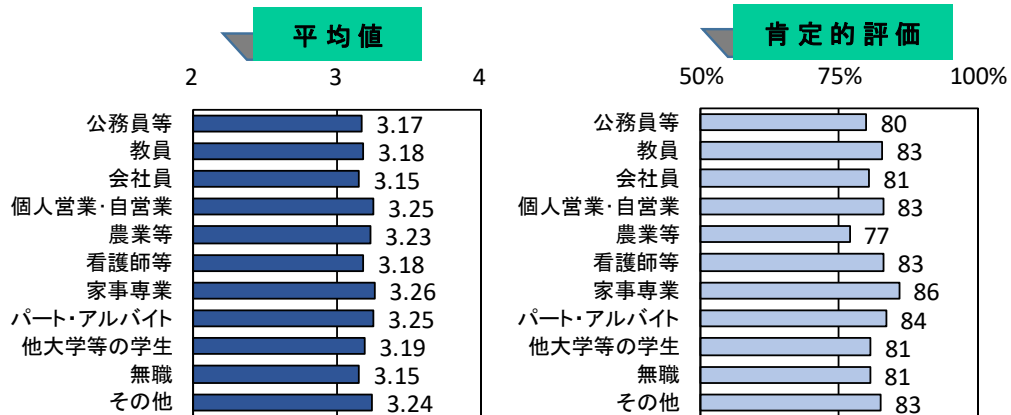
(B-10) 印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった



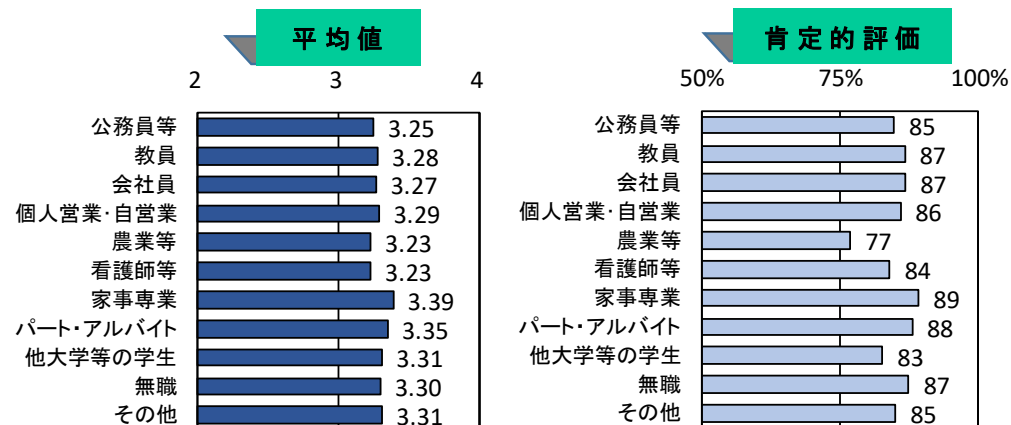
(B-11) 印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった



(B-12) 図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った



(B-13) 印刷教材は教材としてよくできていると感じた

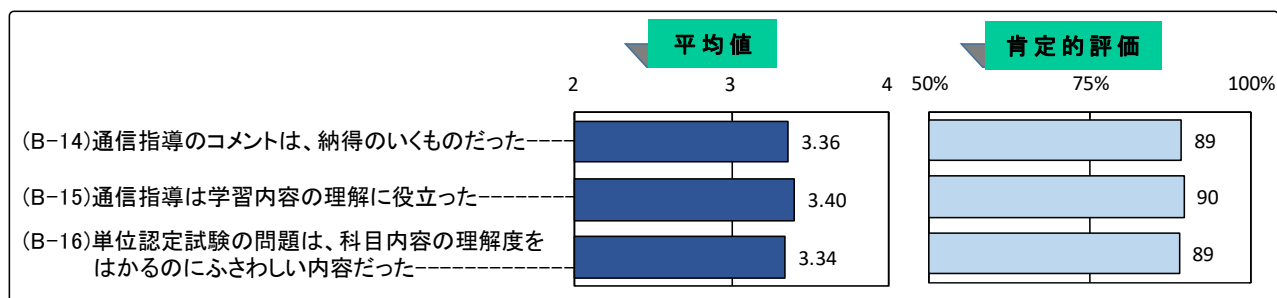


(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとに見ていくことにする。

通信指導・単位認定試験については（図2-44）、全ての項目で89～90%で、同水準であった。

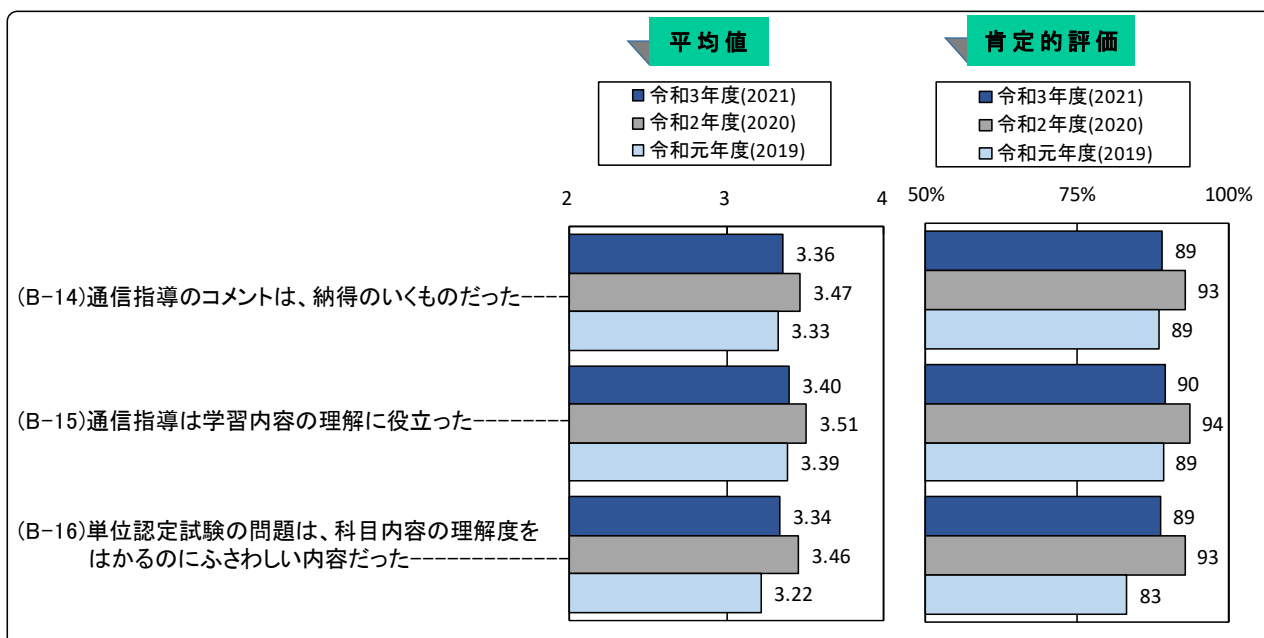
図2-44 【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



通信指導・単位認定試験の評価を時系列で見ると（図2-45）、本年度は、全ての項目で、昨年度から4ポイントの減少であった。

一昨年度と比べると、(B-16)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」は、6ポイントのプラスであった。

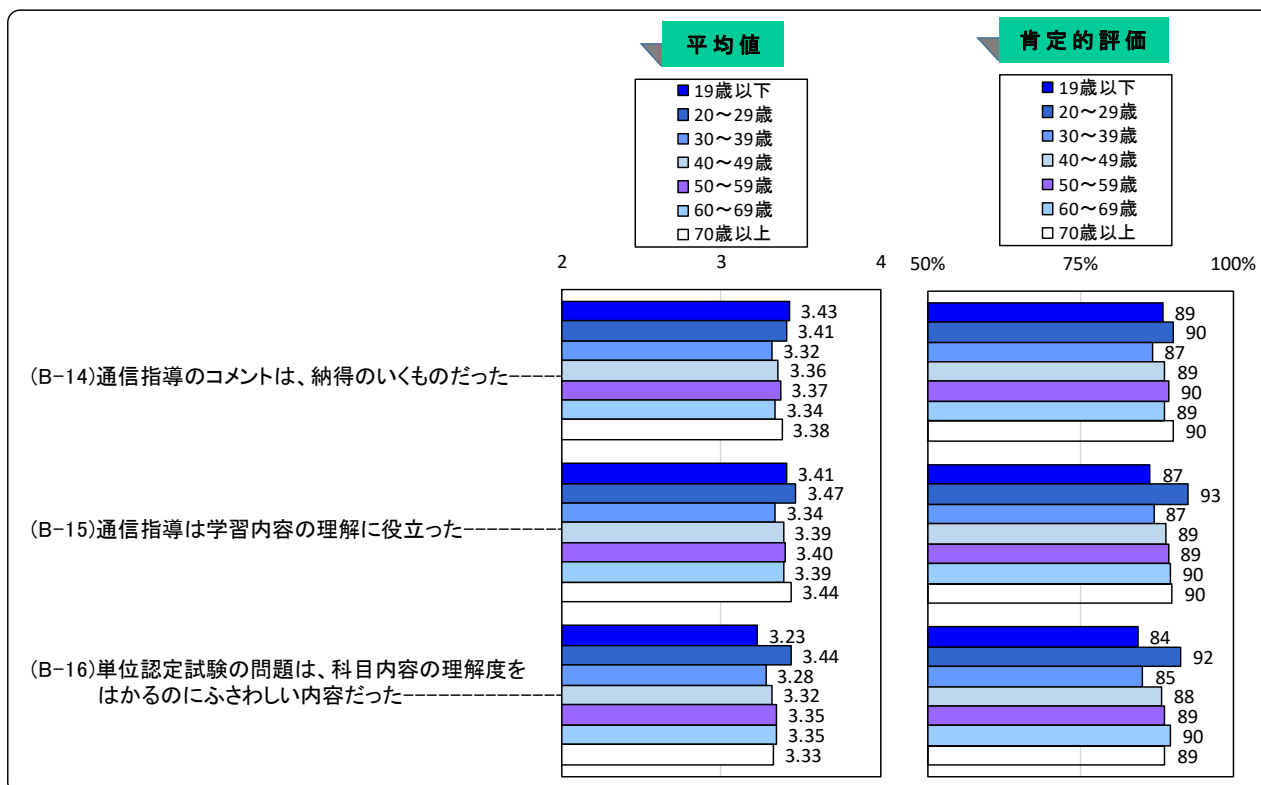
図2-45 【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価（時系列）



年齢階層別に通信指導・単位認定試験の評価を見ると（図2-46）、(B-14)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は、30歳代が87%とやや低く、それ以外は89～90%で、一様の評価であった。

(B-15)「通信指導は学習内容の理解に役立った」と(B-16)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」については、20歳代が92～93%で、最も高く、19歳以下と30歳代は評価が低かった。

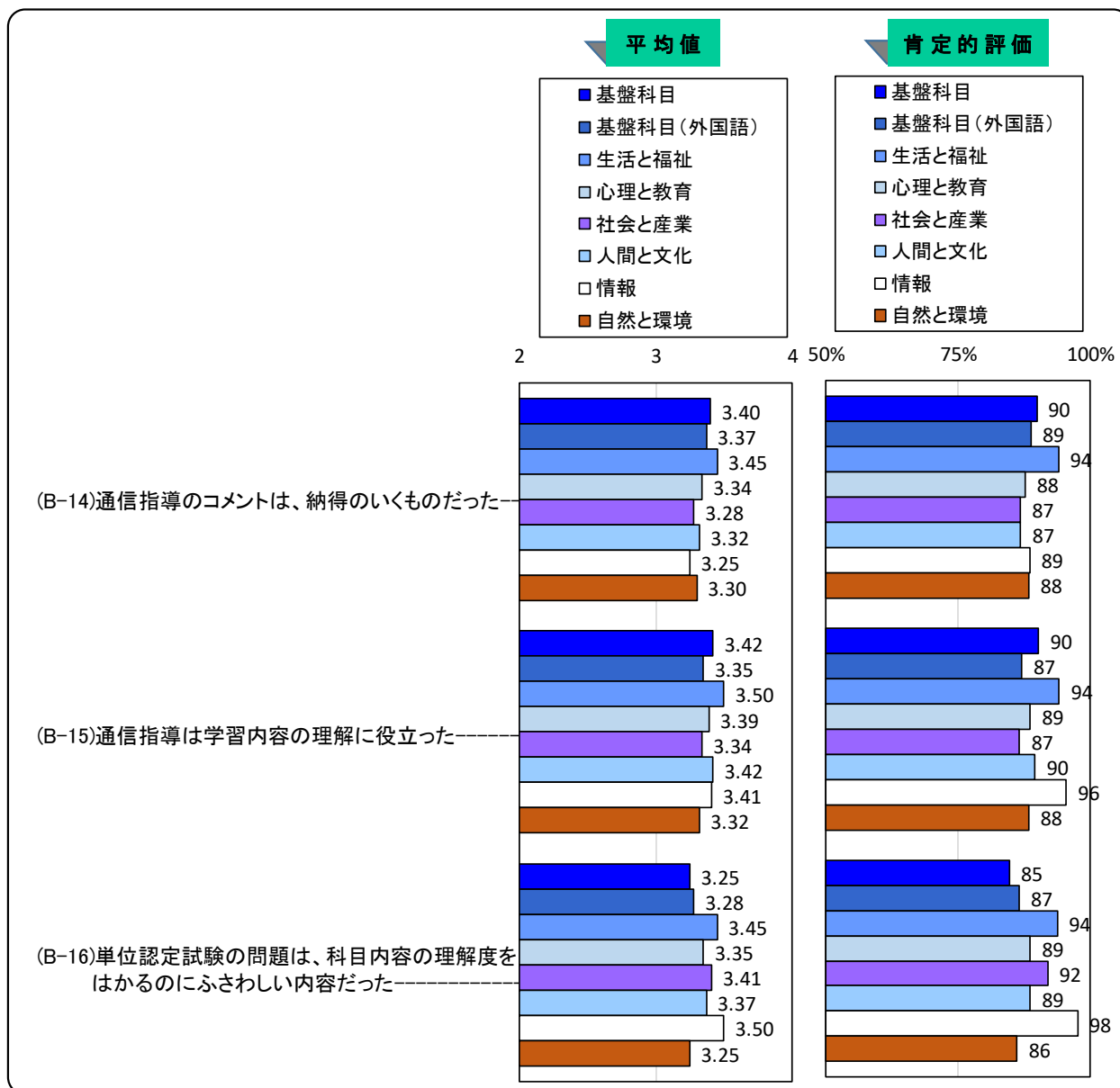
図2-46 【学部】年齢階層別の通信指導・単位認定試験の評価



所属コース別に通信指導・単位認定試験の評価を見ると（図2-47）、(B-14)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は、「生活と福祉」が94%と最も高く、それ以外の所属コースは、87～90%で、大差は無かった。

(B-15)「通信指導は学習内容の理解に役立った」と(B-16)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」は、「生活と福祉」と「情報」の評価が高く、それ以外の所属コースと比べ目立っていた。

図2-47 【学部】所属コース別の通信指導・単位認定試験の評価



職業別に通信指導・単位認定試験の評価を見ると（図2-48）、(B-14)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は、「家事専業」（93%）と「教員」（91%）が90%超えで評価が高く、反対に「他大学等の学生」が83%と低かった。

(B-15)「通信指導は学習内容の理解に役立った」では、やはり「家事専業」の評価が93%と最も高く、次いで「看護師等」「パート・アルバイト」が91%で続いた。

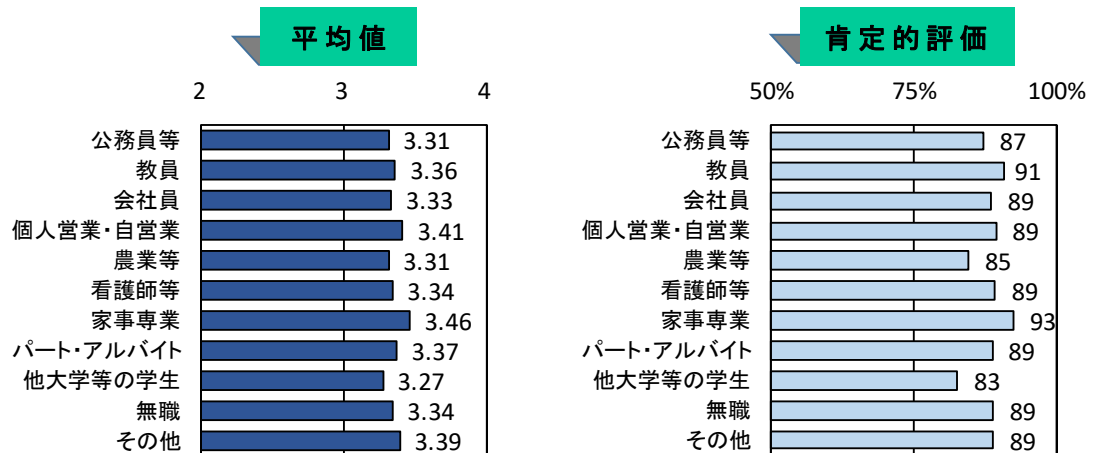
最も評価が低かったのは、前項目と同じく「他大学等の学生」で、79%と極端な評価であった。

(B-16)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」は前2項目と同様、「家事専業」が92%と最も高く、他に「教員」（91%）が90%を超えていた。

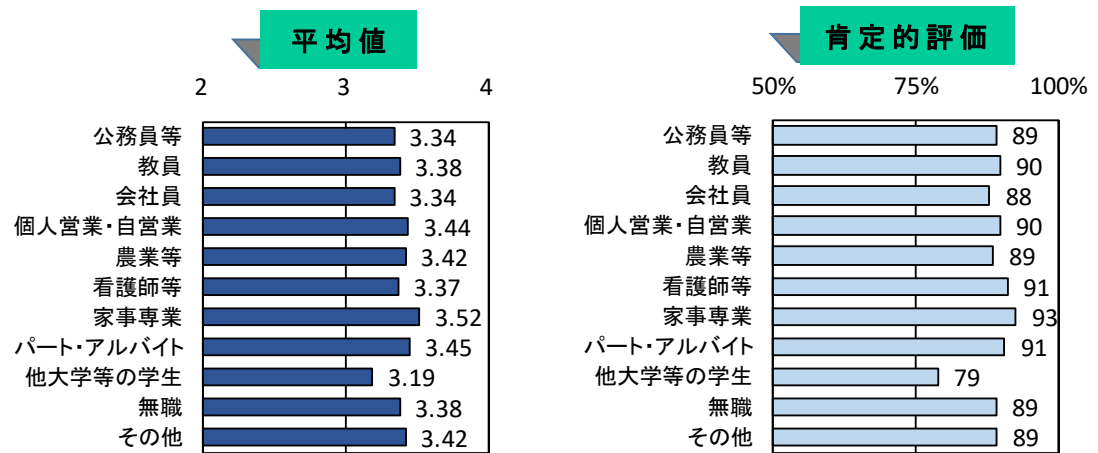
反対に評価が低かったのは「農業等」（77%）で、他の所属コースより10ポイント以上の差が見られた。

図 2 - 4 8 【学部】職業別の通信指導・単位認定試験の評価

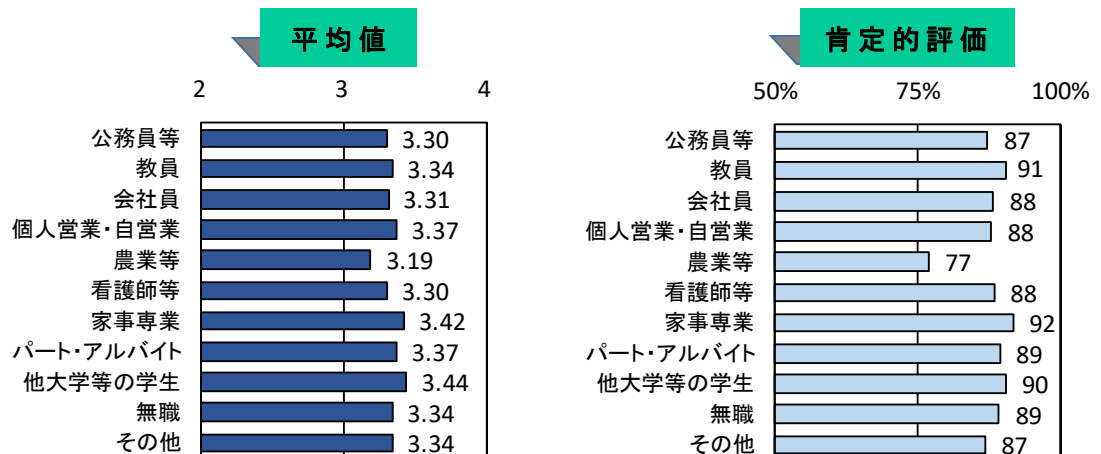
(B-14) 通信指導のコメントは、納得のいくものだった



(B-15) 通信指導は学習内容の理解に役立った



(B-16) 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった



Ⅱ-1-4. 学部の重回帰分析

重回帰分析とは、数量データである目的変数と説明変数の関係を調べ、重回帰式（モデル式）を導き出す解析手法である。

今回も、全体の満足度（B-21）「この科目の内容には全体として満足している」を目的変数とし、調査票 I.A「授業への取り組み姿勢」を除く B-1～B-20 の各項目を説明変数として分析を試みる。

本調査の選択肢はカテゴリーデータであるが、平均値の算出と同様『あてはまる→4』のように数値をポイント化する事で数量として扱い、重回帰分析を適用する。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを知る事を目的としている。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度：B-21
説明変数	x_1, x_2, \dots	各項目 B-1～B-20：全 20 問（項目）
係数	a_1, a_2, \dots	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式 $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{20}x_{20}$ （説明変数が全 20 問の場合）

サンプルサイズが十分でない場合や説明変数が多すぎると、全体の満足度を表すのに適した重回帰式を得られない事が経験的に分かっていたが、本年度は重回帰分析で得られた、相関行列（目的変数と説明変数間の単相関係数）と標準偏回帰係数の間に、分析の最終目的に影響するような矛盾が見られなかった為、説明変数の増減法は用いずに、全項目で分析を行った。

使用したデータは質問項目 I.B の全設問を全て回答した、全有効回答者、7783 人のローデータを使用した。

その結果は以下の通りとなった。

■分析精度

自由度修正済み決定係数とは、得られた重回帰式が目的変数に対してどれだけ説明力（寄与度）があるかを示す指標で、「1」に近いほど良い結果で、この分析では 0.763 となった。

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関（自己相関）を示す指標で 0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差（誤差）に規則性があり、解析自体あるいは、データ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされるもので、その値は 1.991 であった。

以上の結果から、本分析は問題のない事が示されている。

◆分析精度

決定係数	0.764
自由度修正済み決定係数	0.763
ダーヴィンワトソン比	1.991
残差の標準偏差	0.389

今回の重回帰分析は、分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1% である事を表している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p値	判定
全体変動	4969.502	7782				
回帰による変動	3796.874	20	189.844	1256.636	0.000	[**]
回帰からの残差変動	1172.628	7762	0.151			

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05

下表にある標準偏回帰係数とは説明変数の相互比較を可能にするためのもので、各説明変数の目的変数に対する影響力の度合いがこれで分かる。

その結果から「全体の満足度(B-21)」に寄与する項目で、その寄与度が最も高かったのは B-18(0.271)、次いで B-20(0.238)、他に B-19 (0.127)、B-13 (0.081) と続いた。

説明変数の影響力の度合いを比較するために、表中の標準偏回帰係数の中で最も小さい B-14 (0.020) を基準に、他の項目がその何倍となるか算出してみた。(表中の右端の数値) その結果、高い順に B-18:13.8 倍、B-20:12.2 倍、B-19:6.5 倍、B-13:4.2 倍となった。

この結果を踏まえ、今後、「全体の満足度」(本年度の肯定的評価 87%) を上げるためには、上位 2 項目「B-18 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」、「B-20 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」が突出しており、この 2 項目の肯定的評価を上げる事が、効果的であると考えられる。

この 2 項目の肯定的評価について見てみると、B-18:88%、B-20:84% で、それぞれの肯定的評価を上げる余地は残っていると思われる。

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定	B-14との対比
B-21.全体の満足度	0.271	B-18 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	[**]	13.8
	0.238	B-20 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)	[**]	12.2
	0.127	B-19 新しい知識が身につく視野が広がった	[**]	6.5
	0.081	B-13 印刷教材は教材としてよくできていると感じた	[**]	4.2
	0.070	B-6 放送授業は教材としてよくできていると感じた	[**]	3.6
	0.063	B-5 講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	[**]	3.2
	0.045	B-17 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	[**]	2.3
	0.044	B-11 印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった	[**]	2.3
	0.043	B-3 印刷教材の難易度は適切だった	[**]	2.2
	0.036	B-16 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった	[**]	1.8
	0.020	B-14 通信指導のコメントは、納得のいくものだった	[*]	1.0
	定数項		[**]	

Ⅱ－２．大学院の分析結果

Ⅱ－２－１．項目平均から見た全体的傾向

評価項目の内容ごとに回答者全体の平均値と肯定的評価を A-1～A-3 等の複数の項目の平均を算出しグラフ化（図 2－49）した。

学部同様、肯定的な評価（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）の方が（例えば回答者の 80%と）イメージしやすく、下図、平均値と肯定的評価に齟齬が生じた場合、どちらを採用するか合理的に判断出来ないため、コメントについては肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていきたい。

また、新規開設科目の年度比較は、比率の差の検定結果から、大学院は、学部ほど回答者数が多くないため（2021 年度：412 人、2020 年度：223 人、2019 年度：350 人）、本年度と昨年度の比較では概ね 6 ポイントの差で有意となったため、6 ポイント以上で差があることとした。

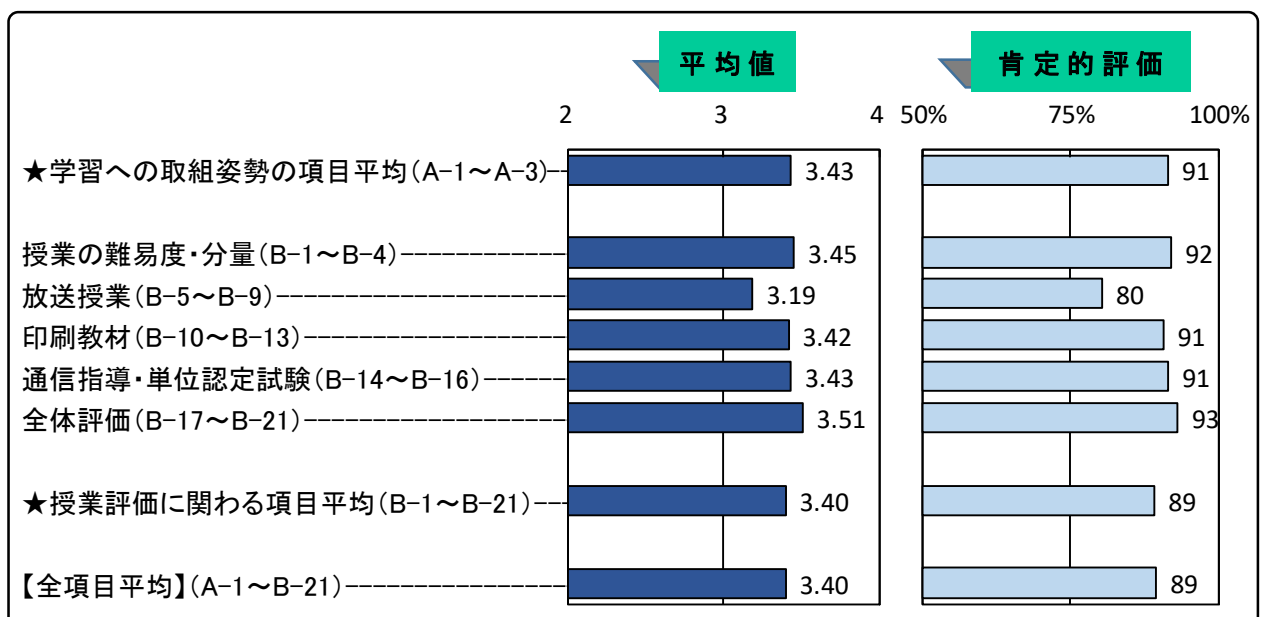
更に、回答者数が小サンプルの場合、%表記にすると、誤差が大きくなるため、いずれも参考値としてグラフに記載しているが、コメントを割愛する事にする。

年齢階層別の「20～29 歳」（6 人）、所属プログラム別の「自然環境科学」（7 人）、職業別の「看護師等」（17 人）、「家事専業」（13 人）が挙げられる。（「農業等」と「他大学等の学生」は一人もいなかった。）

項目平均による全体的傾向をみると（図 2－49）、『放送授業』が 80%と他の項目と比べ極めて低かった。

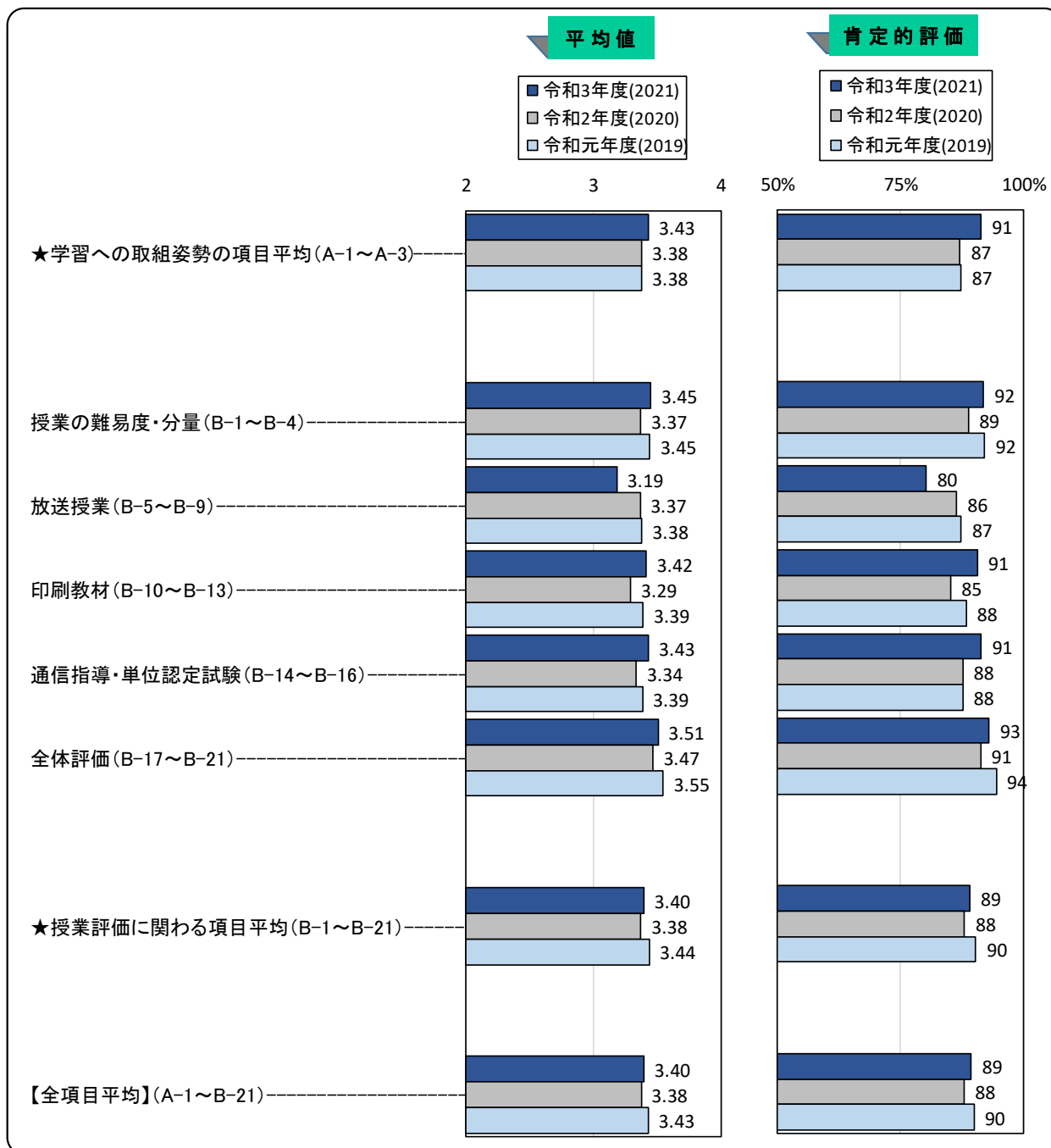
それ以外の項目は 90%前後で、中でも『全体評価』が 93%と最も高かった。

図 2－49 【大学院】 項目平均による全体的傾向



項目平均を科目の開設年度で比較して見ると(図2-48)、本年度は昨年度と比べ『放送授業』がマイナス6ポイントと大きく減少していたが、それ以外の項目については増加が見られ、中でも『印刷教材』が6ポイント増の91%となっていた。

図2-48【大学院】項目平均による全体的傾向(開設年度比較)



※放送授業(B-5~B-9)の質問項目については、入れ替えが行われた。

追加された項目: B-8【TV】ロケ映像や資料映像によって、理解が深まった/【R】ロケ音声や資料音声によって、理解が深まった
B-9ゲストや聞き手によって、理解が深まった

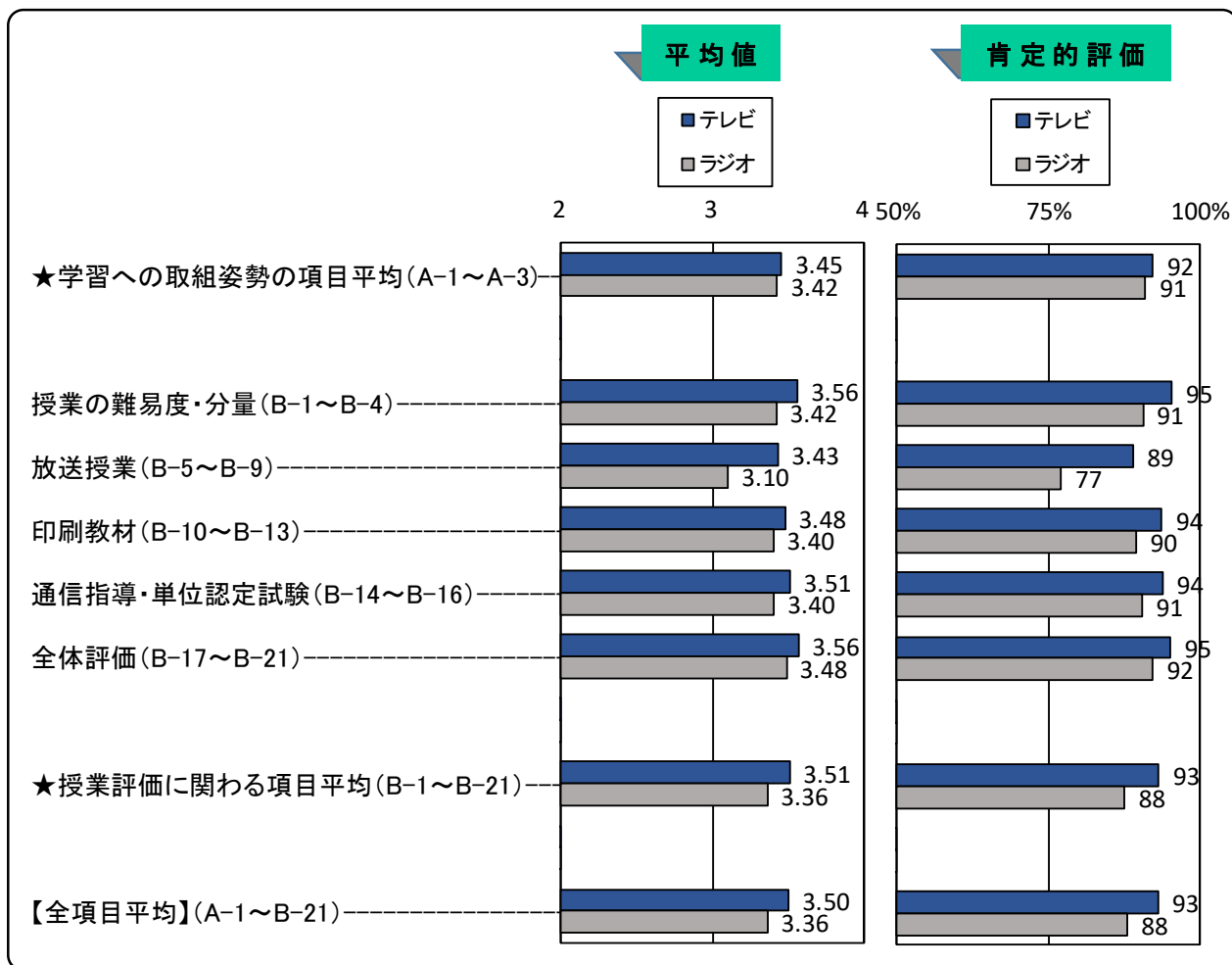
削除された項目: 講師の熱意が十分に伝わった

従って、放送授業(B-5~B-9)の質問項目の年度比較については、留意されたい。

メディア別では（図2-49）、『学習への取り組み姿勢』については、両メディアが91、92%で同じレベルであったが、『授業の難易度・分量』から『全体評価』を見てみると、いずれもテレビ科目の方が高い評価で、特に『放送授業』のテレビ科目（89%）とラジオ科目（77%）の差は12ポイントと、大きかった。

これに伴いテレビ科目の『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』が93%に対して、ラジオ科目が両項目とも88%と、その差を広げる結果となった。

図2-49 【大学院】項目平均によるメディア別全体的傾向



年齢階層別では（図2-52）、『学習への取組み姿勢』は、30歳代が85%と、他の年代より6ポイント以上のマイナスで、それ以外は92%前後で、同レベルであった。

『授業の難易度・分量』については、60歳代と70歳以上が94%で評価が高く、他の年代は90,91%の評価であった。

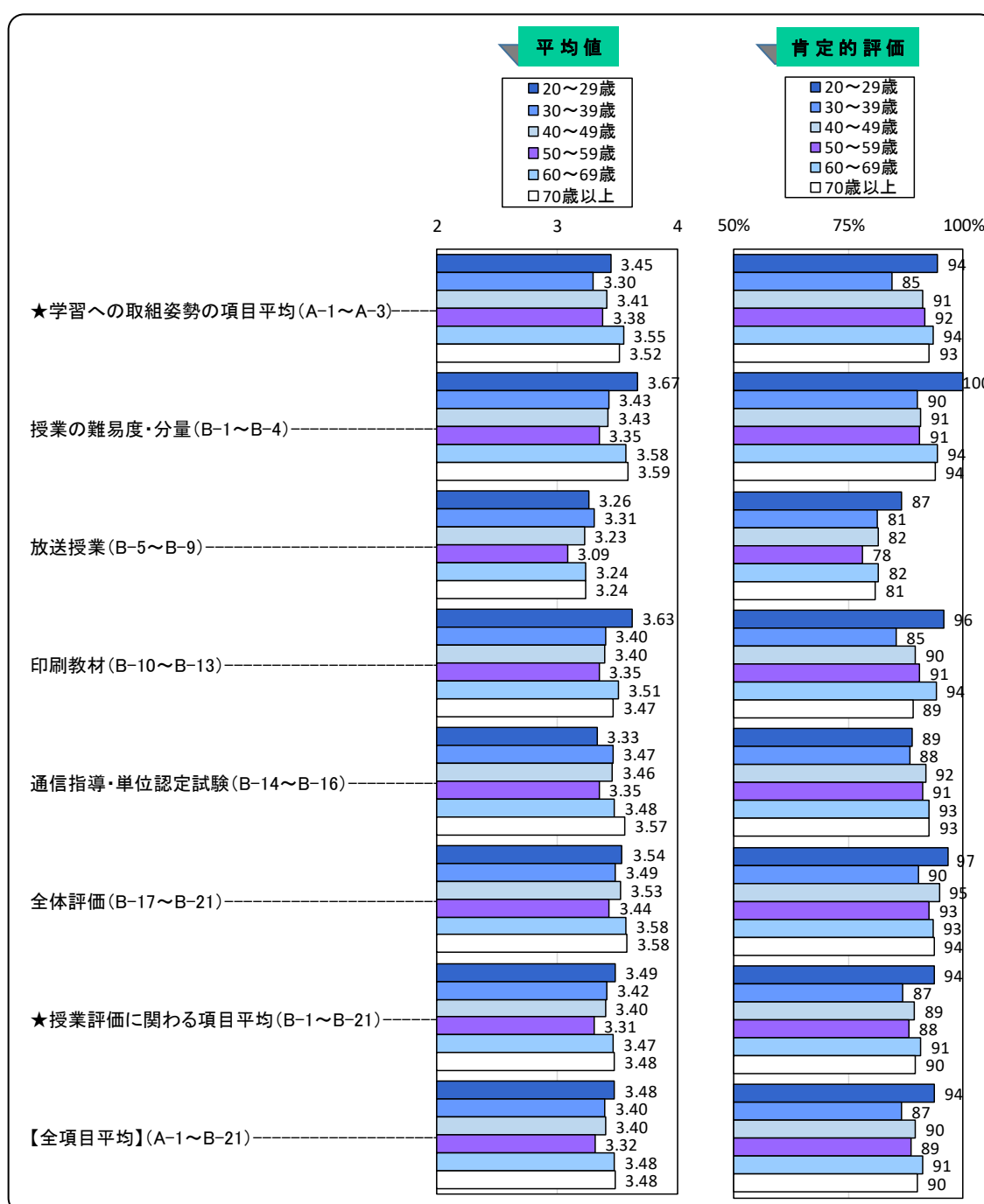
『放送授業』は50歳代が78%と最も低く、80%代に届かなかった。

『印刷教材』は60歳代が94%と最も高く、30歳代が85%と最も低かった。

『通信指導・単位認定試験』から『全項目平均』までは、30歳代が87~90%で、最も低く、それ以外は、年代間にほとんど差は無かった。

※「20~29歳」は回答者が6人と少人数で、誤差が大きく極端な値を取る場合がある為、コメントを割愛した。また、これ以降のページも同様とする。

図2-52 【大学院】項目平均による年齢階層別全体的傾向



所属プログラム別に項目平均を見ると（次頁図2-53）、『学習への取り組み姿勢』は「人間発達科学」が97%と最も高く、他の所属プログラムより、プラス6ポイント以上であった。

次の『授業の難易度・分量』は、「生活健康科学」と「人文学」の評価が高く、反対に「臨床心理学」が9割に届かず、評価が低かった。

『放送授業』は80%前後、『通信指導・単位認定試験』は92%前後で、どの所属プログラムも同じレベルであった。

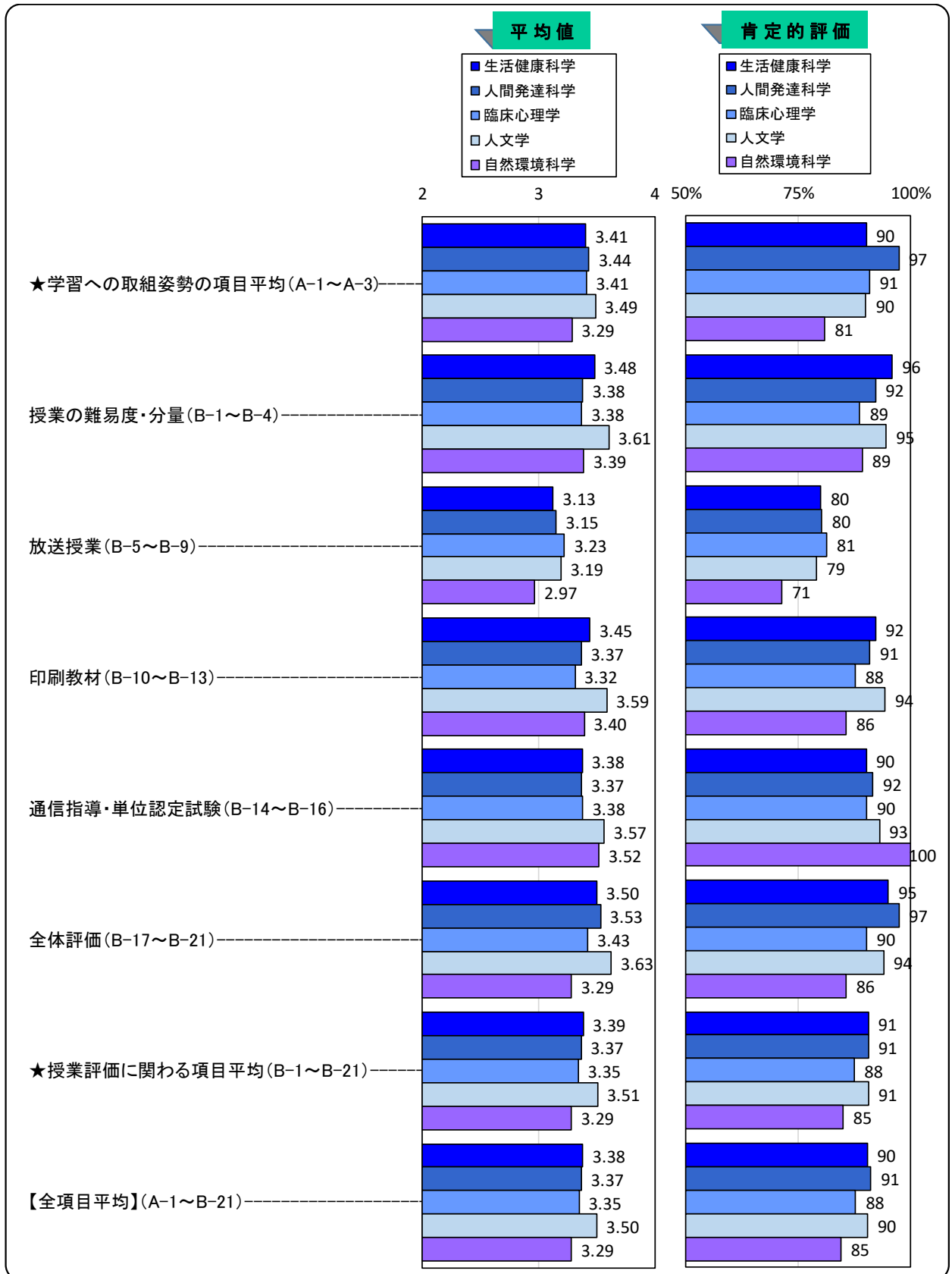
『印刷教材』については、「人文学」が94%と高い評価で、「臨床心理学」が88%と評価が低かった。

『全体評価』では、「人間発達科学」（97%）が高く、「臨床心理学」（90%）が低かった。

『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』は、「臨床心理学」の評価が共に88%と最も低く、それ以外の所属コースはいずれも90%前後で、同レベルであった。

※「自然環境科学」は回答者が7人と少人数で、誤差が大きく極端な値を取る場合がある為、コメントを割愛した。また、これ以降のページも同様とする。

図 2 - 5 3 【大学院】 項目平均による所属プログラム別全体の傾向

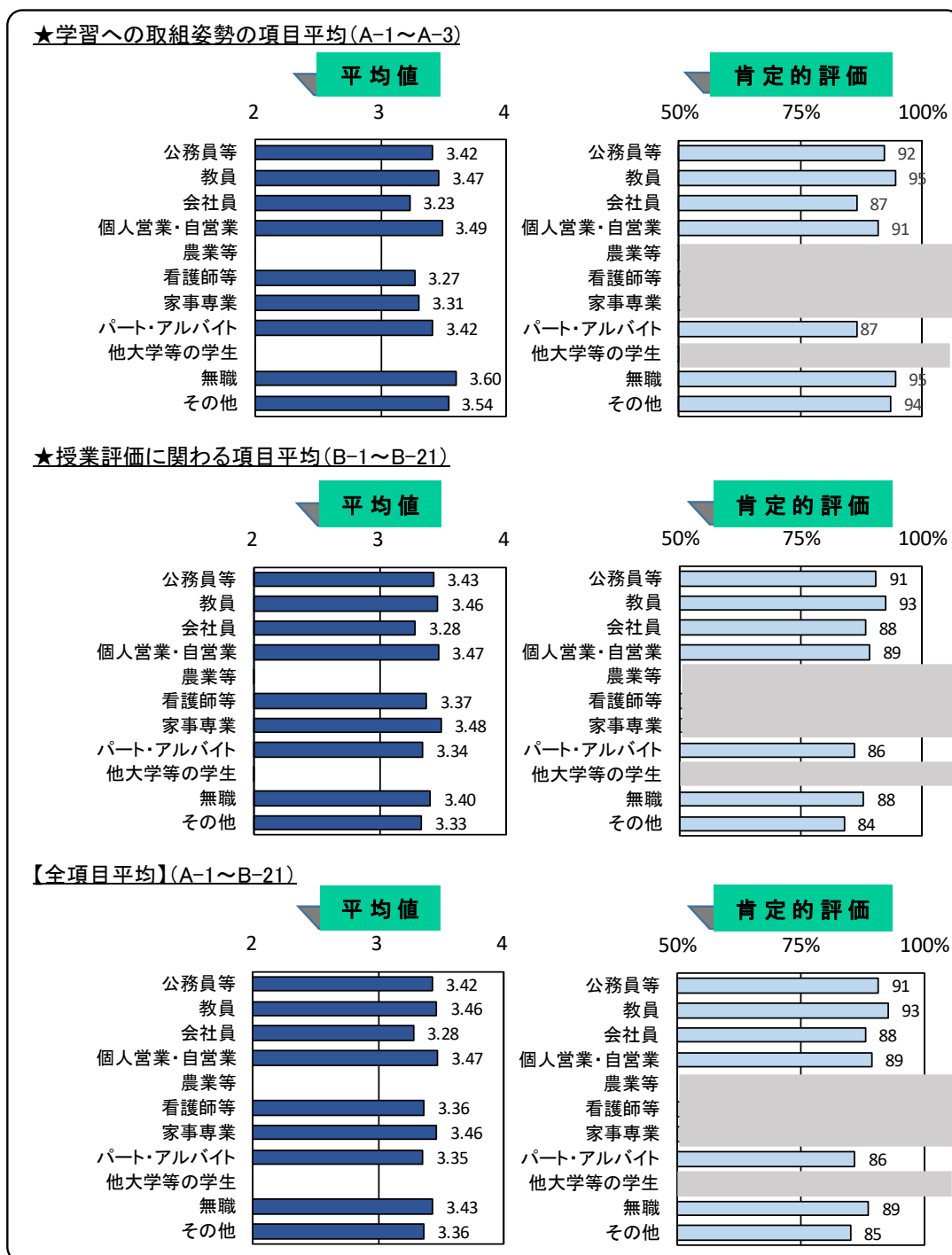


職業別では（図2-54）、『学習への取り組み姿勢』は「教員」「無職」「その他」が94、95%で評価が高く、「会社員」「パート・アルバイト」が87%と評価が低かった。

『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』では、「教員」が両項目とも93%と、評価が高く、「パート・アルバイト」「その他」が、85%前後と、評価が低かった。

※「農業等」と「他大学等の学生」は一人もおらず、「看護師等」（17人）と「家事専業」（13人）は回答者が少人数だった為、誤差が大きく極端な値を取る場合がある為、コメントを割愛した。また、これ以降のページも同様とする。

図2-54 【大学院】項目平均による職業別全体的傾向

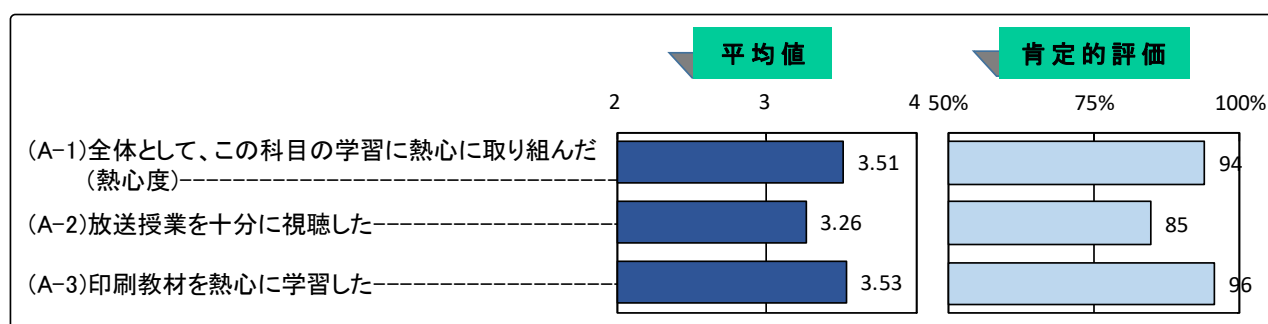


Ⅱ-2-2. 学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれの評価項目ごとに調査結果を見ていく。

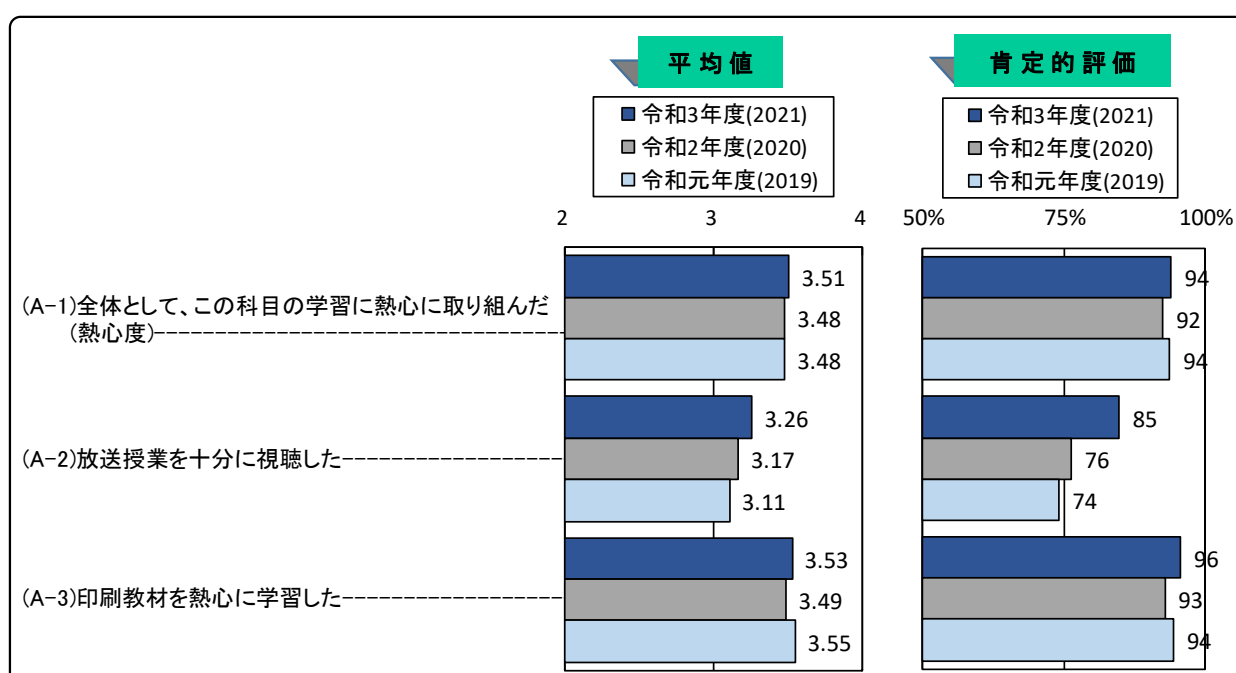
『学習への取組み姿勢』（図2-55）では、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は95%前後に達していたが、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は85%と、前述の2項目に比べると約10ポイント下回っていた。

図2-55 【大学院】回答者全体の取組姿勢



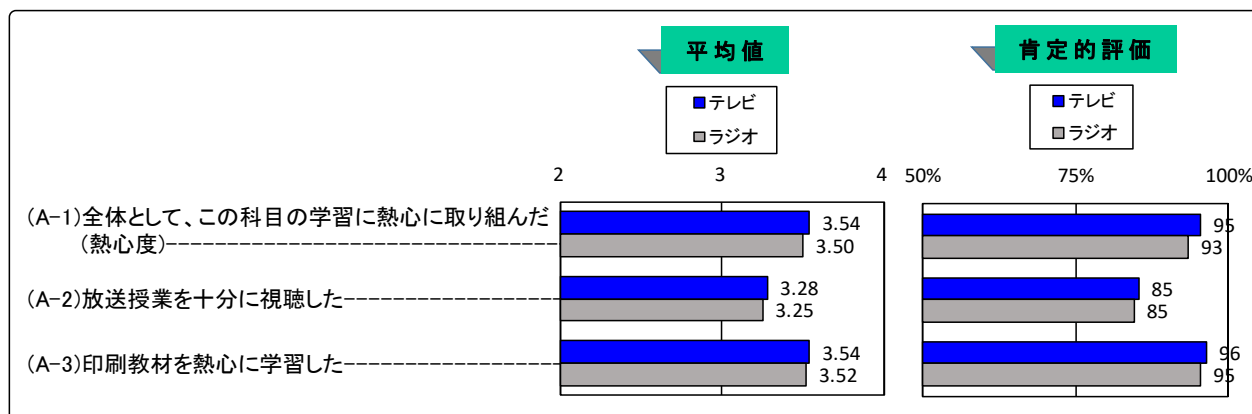
『学習への取組み姿勢』を時系列で見ると（図2-56）、本年度の評価は昨年度と比べ、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は、わずかな上昇であったが、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」については、9ポイントの大幅な上昇が見られた。

図2-56 【大学院】回答者全体の取組姿勢（時系列）



次にメディア別の取組姿勢では（図2-57）、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は、テレビ科目がわずかに比率は高いが同じ水準で、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」も変わりはない。

図2-57 【大学院】メディア別の取組姿勢



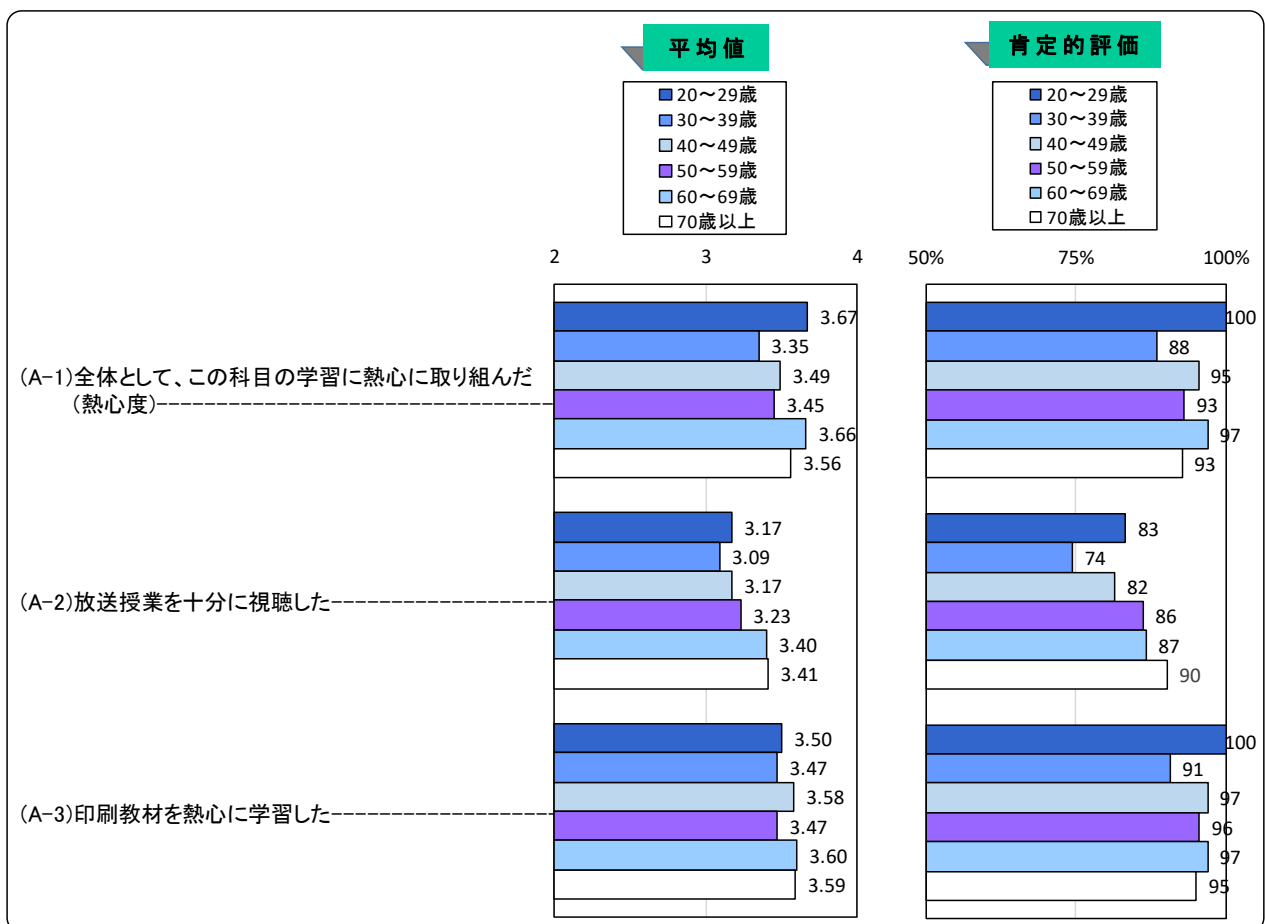
年齢階層別では（図 2 - 5 8）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」は、60 歳代が 97%と熱心度が高く、次いで 40 歳代が 95%で続いていた。

反対に熱心度が低かったのは、30 歳代で、88%と 9 割に達していなかった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は、70 歳以上が 90%と高く、反対に 30 歳代は 74%と極めて低く、他の年代より 8 ポイント以上上下回っていた。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」については、前の 2 項目同様、30 歳代（91%）の評価が低く、それ以外の年代は、96%前後で同レベルであった。

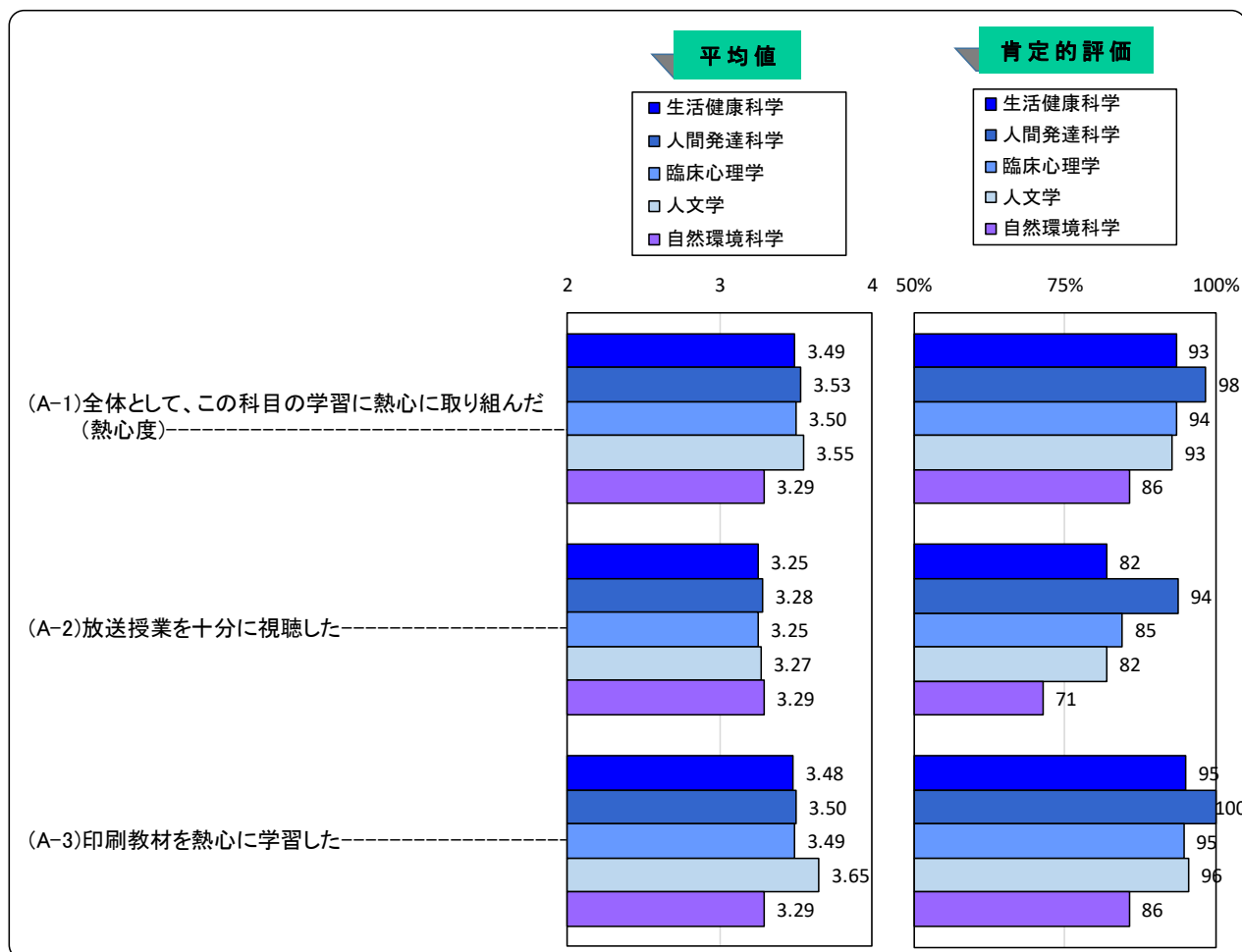
図 2 - 5 8 【大学院】年齢階層別の取組姿勢



所属プログラム別の取り組み姿勢（図2-59）では、全ての項目で「人間発達科学」の積極性が高く、特に(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では、100%と非常に高かった。

プログラム間の差では、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」の「人間発達科学」(94%)が、他のプログラムを9ポイント以上上回り、際立っていた。

図2-59 【大学院】所属プログラム別の取組姿勢



職業別の取組姿勢は（図2-60）、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」では、「その他」が98%と最も高く、「無職」（87%）がこれに続いていた。

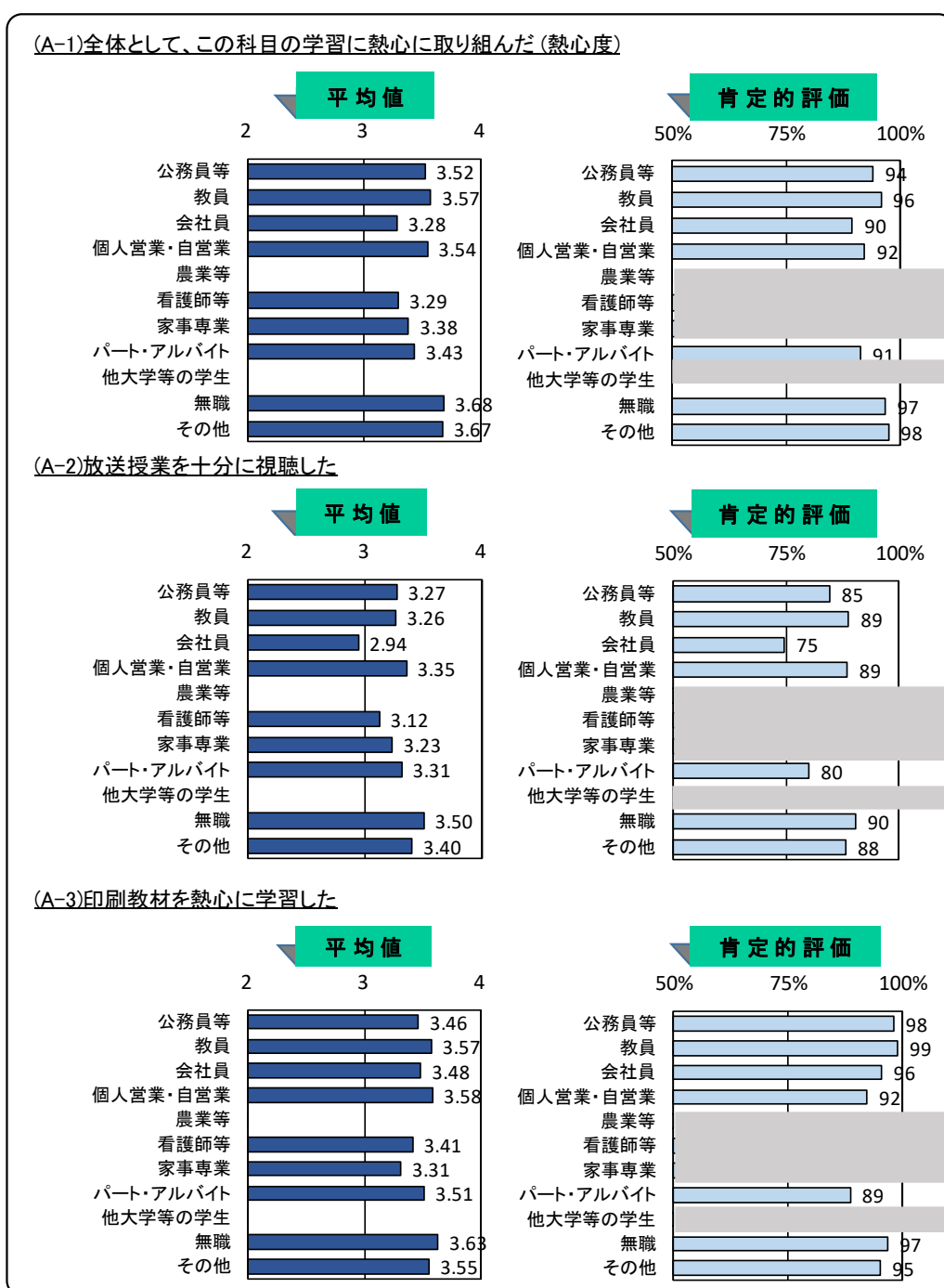
反対に「会社員」「個人営業・自営業」「パート・アルバイト」が91%前後で低かった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は、「無職」が90%と最も高く、次いで「教員」「個人営業・自営業」が89%で続いていた。

反対に「会社員」が75%と非常に低く、唯一70%代であった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」については、「公務員等」と「教員」が98、99%と極めて高く、反対に「パート・アルバイト」は、他の職業に比べ89%と低く、9割を割り込んでいた。

図2-60【大学院】職業別の取組姿勢



単位認定のための学習方法(図2-61)では、属性別で回答者が17人以下と少ない、「20～29歳」「農業等」「看護師等」「家事専業」「他大学等の学生」「自然環境科学」の6属性については、グラフから除外した。

全体は、比率の高い順に「放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ」が77%と、大半を占め、「ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ」が19%で、「ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ」は、5%とごくわずかであった。

年齢階層別では、全体と比べ「放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ」が、60歳代は、85%と高く、70歳以上は66%で、他の年代よりも低かった。

また、70歳以上は「ほとんど放送教材の学習だけ」が17%と、全属性の中で最も高かった。

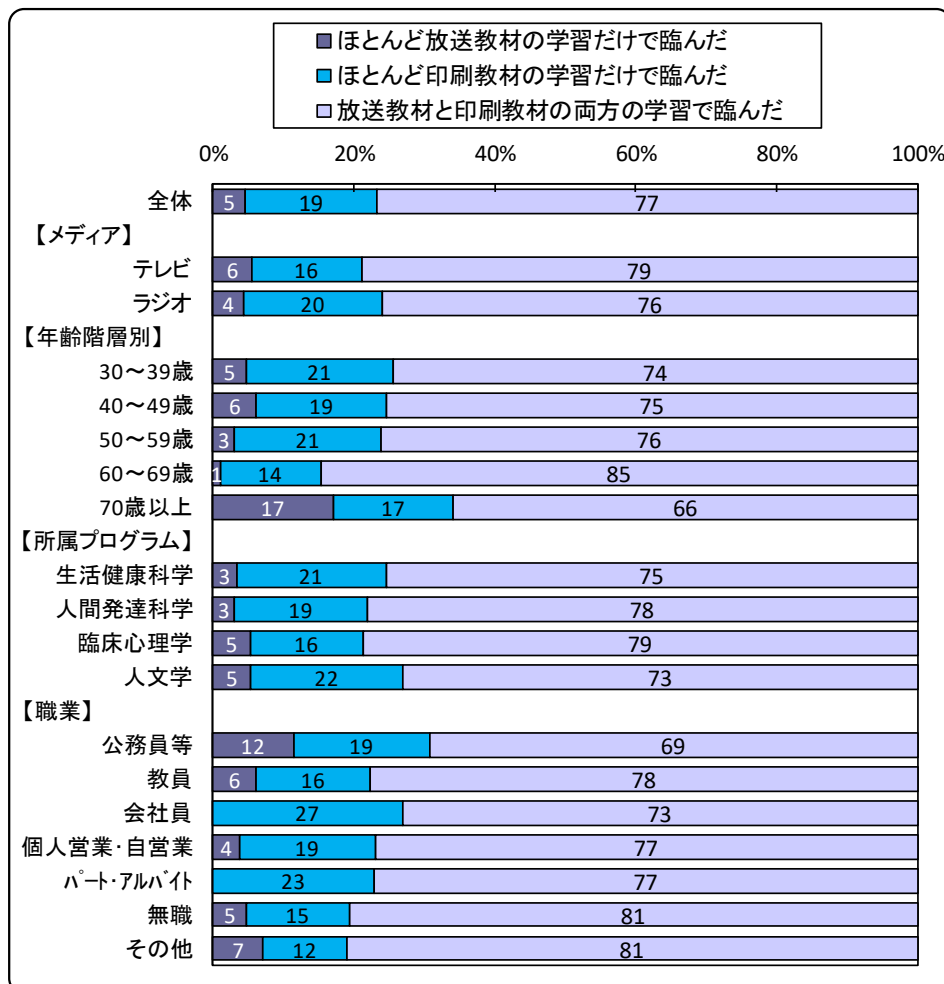
所属プログラム別は、全体の傾向とあまり変わらなかった。

職業別では、「公務員等」の「放送教材と印刷教材の両方」が69%と低く、「ほとんど放送教材の学習だけ」が12%で、全体と比べると高かった。

「会社員」は「ほとんど放送教材の学習だけ」が一人もなく、「ほとんど印刷教材の学習だけ」が27%と、どの属性よりも高く、特異な傾向が見られた。

「無職」と「その他」は、「放送教材と印刷教材の両方」が81%と、全体と比べ高かった。

図2-61【大学院】単位認定のための学習方法



Ⅱ－２－３．大学院の授業評価

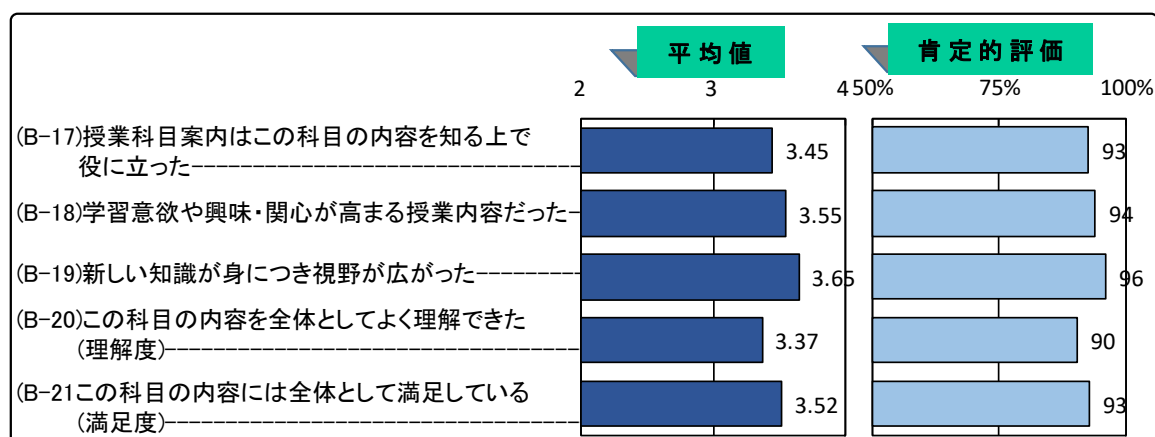
(1) 全体評価

ここからは大学院の授業評価について、評価項目ごとに見ていくことにする。

全体評価の項目では（図 2－6 2）、(B-19)「新しい知識が身につく視野が広がった」(96%) が最も高く評価されていた。

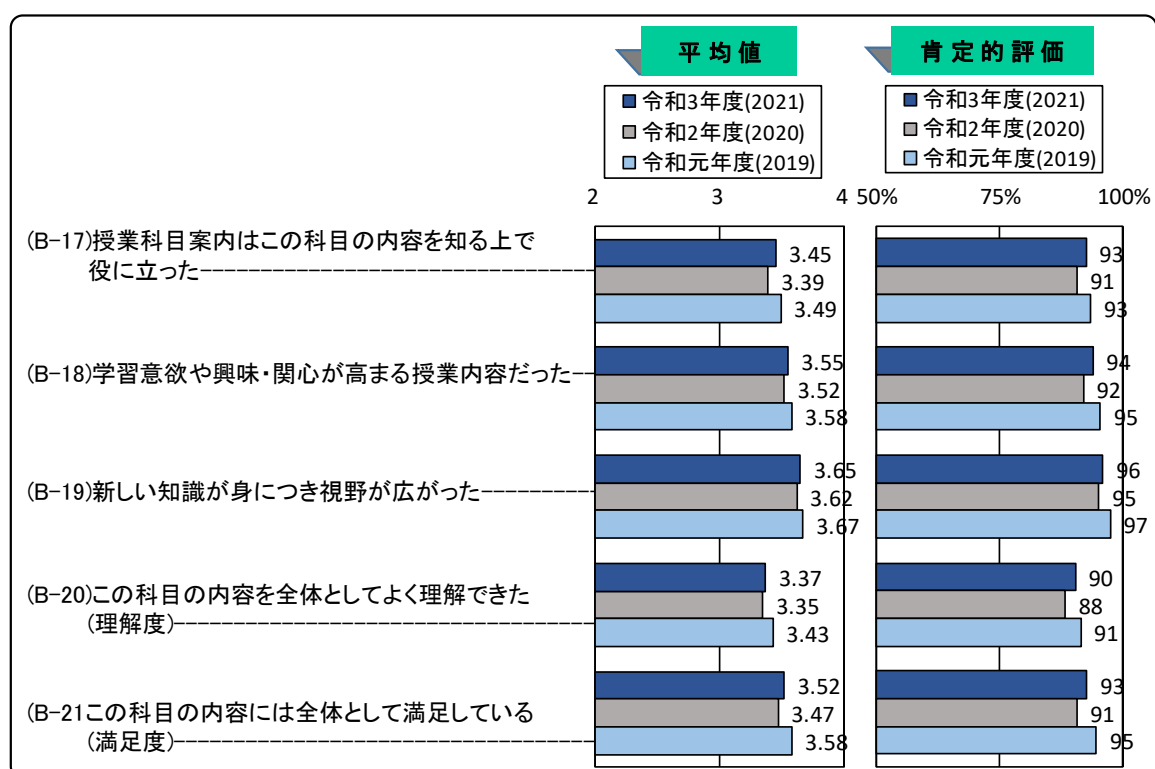
反対に (B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」は 90%と、最も低く、それ以外の項目は、93, 94%であった。

図 2－6 2 【大学院】回答者全体の全体評価



全体評価を時系列で見ると（図 2－6 3）、昨年度と比べ全ての項目で 1, 2 ポイントの上昇傾向が見られたが、一昨年度と比べると、(B-17)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」以外は、わずかに下回っていた。

図 2－6 3 【大学院】回答者全体の全体評価（時系列）

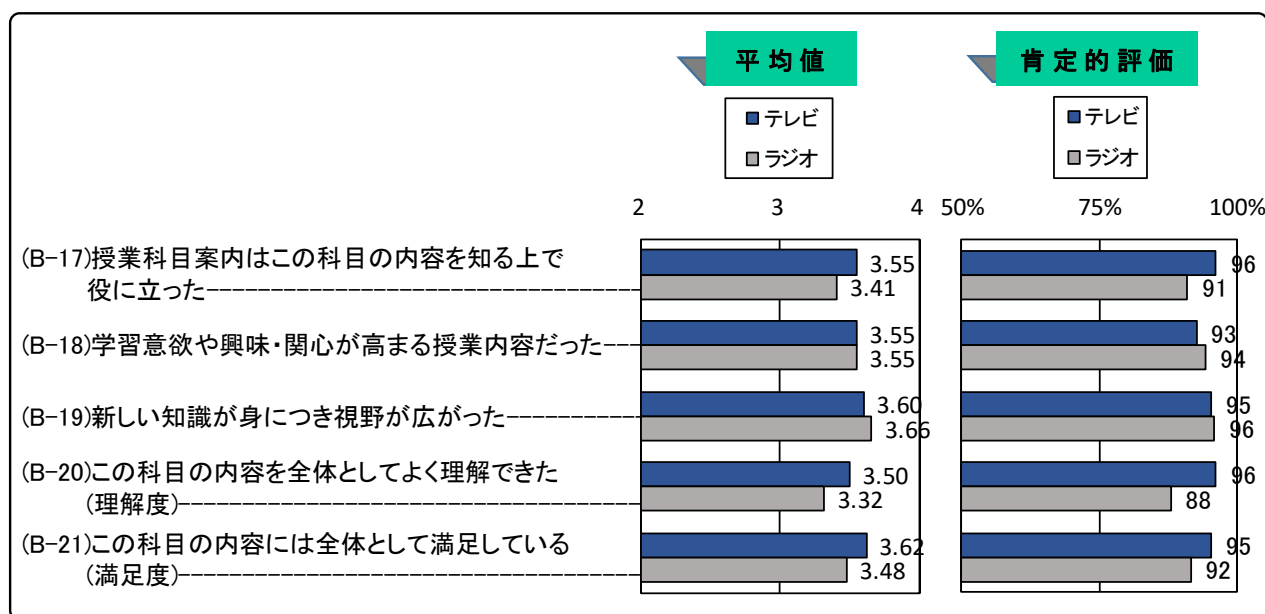


メディア別に全体評価を見ると（図2-64）、(B-17)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」、(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」、(B-21)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」は、テレビ科目の方が高い評価で、特に(B-20)はプラス8ポイントとラジオ科目との差が大きかった。

また、テレビ科目は、(B-18)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」と(B-19)「新しい知識が身につく視野が広がった」はわずかに低いですが、両メディアは同水準であった。

テレビ科目の中では、(B-17)と(B-20)が96%と評価が高く、(B-18)が93%で低かった。ラジオ科目では、(B-19)が96%で最も高く、(B-20)が88%で最も低かった。

図2-64 【大学院】メディア別の全体評価



年齢階層別では（図2-65）、(B-17)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」は40歳代が97%と最も高く、30歳代が86%と目立って低かった。

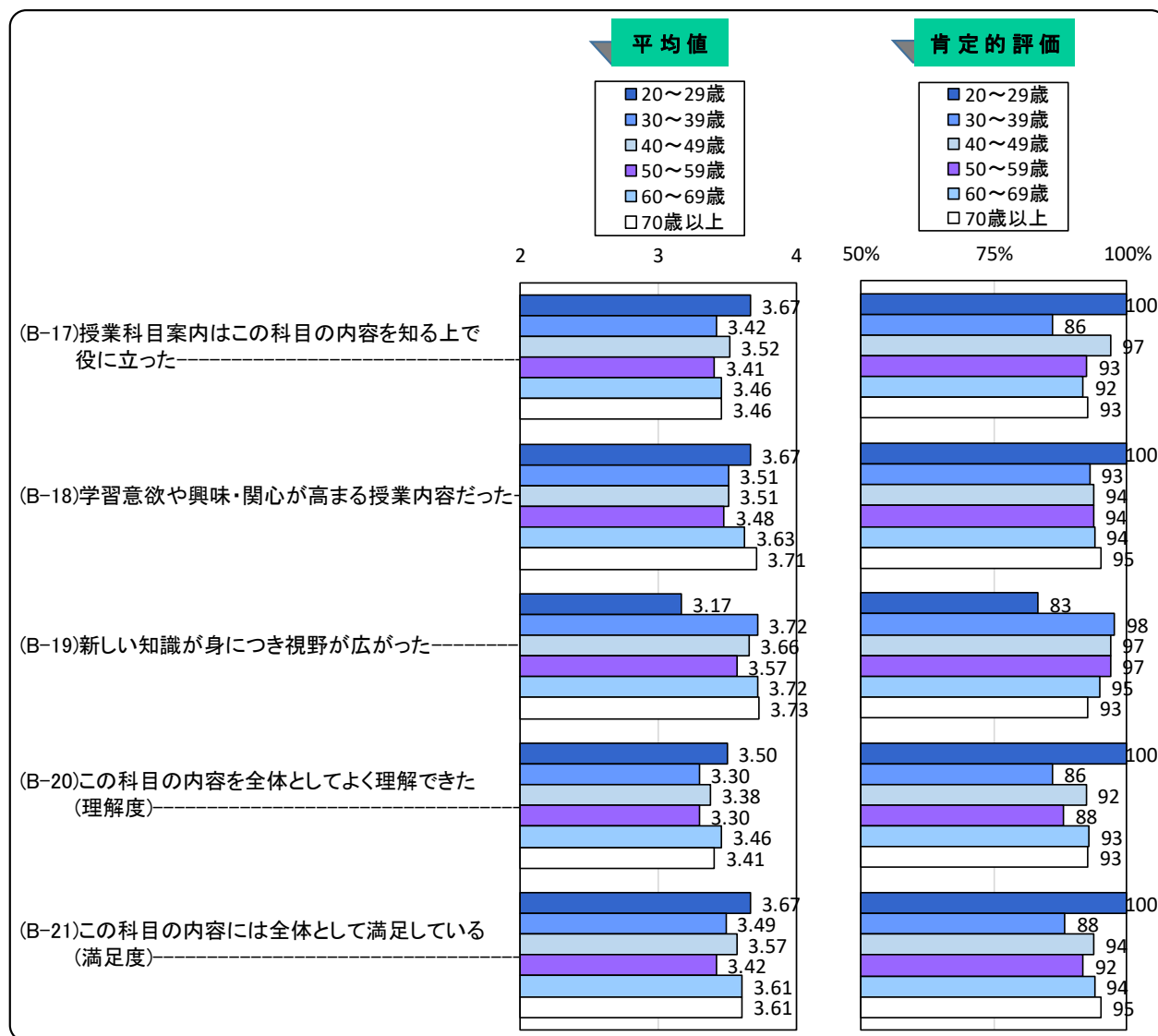
(B-18)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」は、全ての年代が94%前後で、同等の高い評価であった。

(B-19)「新しい知識が身につく視野が広がった」は、30歳代が98%と最も評価が高く、後は年代の上昇と共に、減少傾向であった。

(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」では、60歳代と70歳以上が最も高く、93%、反対に30歳代が86%で最も低かった。

(B-21)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」は、30歳代(88%)の評価が低く、40歳代以上は92%~95%の評価であった。

図2-65 【大学院】年齢階層別の全体評価



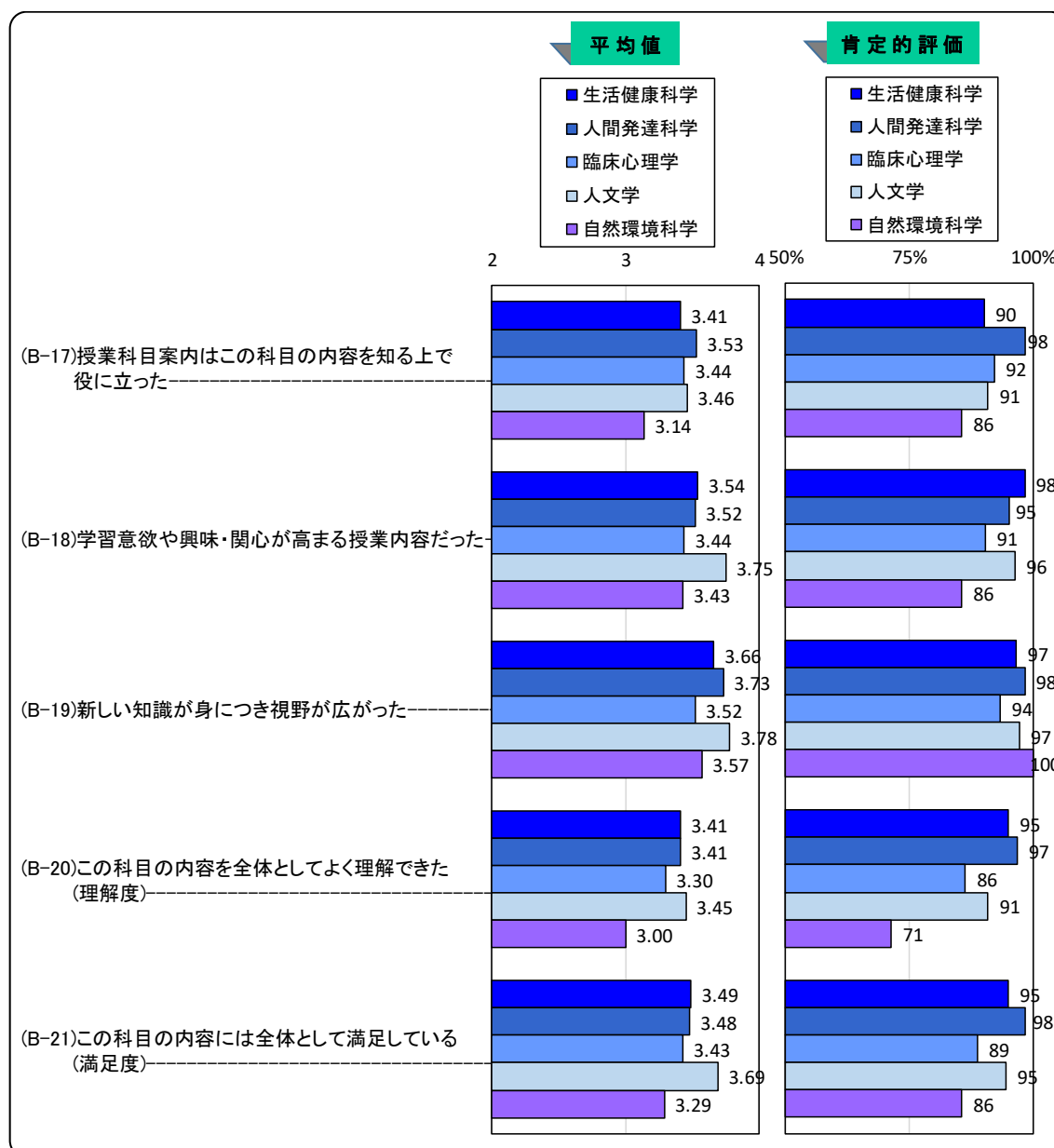
所属プログラム別に全体評価を見ると（図2-66）、(B-17)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」は、「人間発達科学」が98%と最も高く、他のプログラムは91%前後であった。

(B-18)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」は、「生活健康科学」が98%と評価が高く、「臨床心理学」が91%と、他のプログラムと比べると評価が低かった。

(B-19)「新しい知識が身につく視野が広がった」は、「生活健康科学」「人間発達科学」「人文学」が97, 98%と評価が高く、「臨床心理学」は94%と、他のプログラムと比べると評価が低かった。

(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」と(B-21)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」は、同じ傾向で「人間発達科学」が、97, 98%で最も評価が高く、「臨床心理学」が90%を下回り、評価が低かった。

図2-66【大学院】所属プログラム別の全体評価



職業別（次頁図 2 - 6 7）では、(B-17)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」は、「公務員等」の評価が 98%と最も高く、「無職」(87%)、「その他」(83%)の評価は 9 割に届かなかった。

(B-18)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」は、「会社員」「その他」が 91%と評価が低く、その他の職業は、95%前後と一様の評価であった。

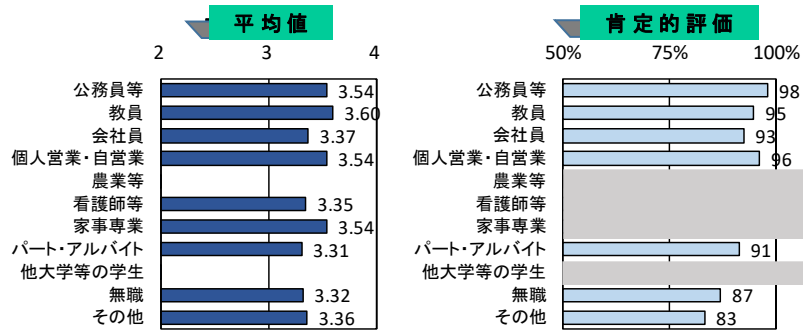
(B-19)「新しい知識が身につく視野が広がった」は、「個人営業・自営業」が 100%と非常に評価が高く、「パート・アルバイト」「無職」は 91, 92%で評価が低かった。

(B-20)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」については、「公務員等」と「教員」が 96%と最も高く、反対に「パート・アルバイト」と「その他」が 83%で、低い評価であった。

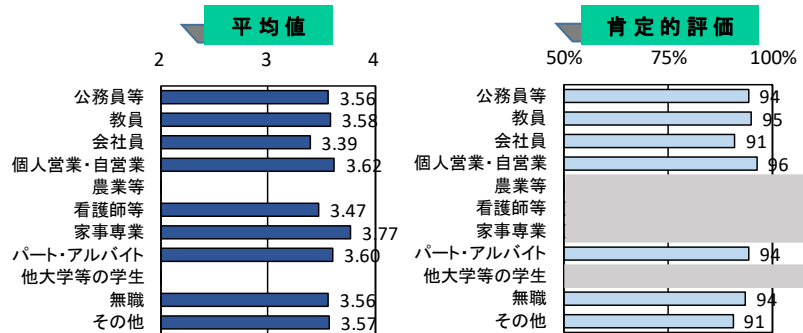
(B-21)では「教員」が 96%と、最も高く、「パート・アルバイト」と「その他」が 88, 89%で、9 割に達していなかった。

図 2 - 6 7 【大学院】職業別の全体評価

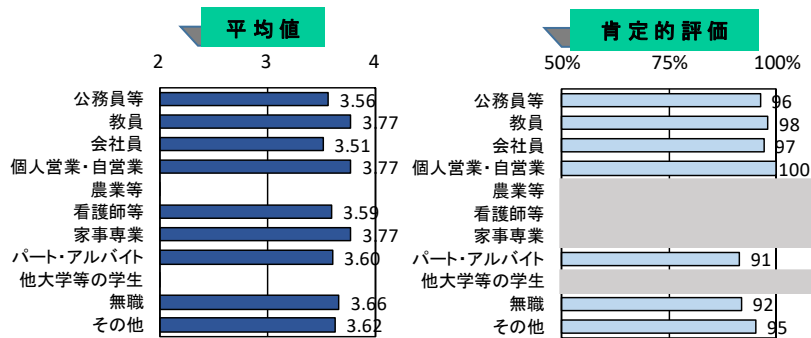
(B-17) 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った



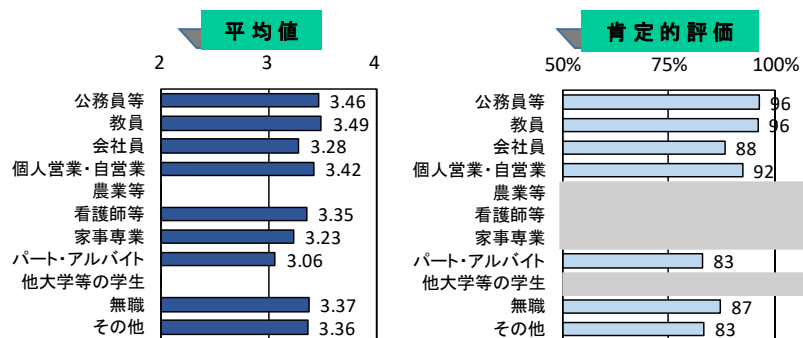
(B-18) 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった



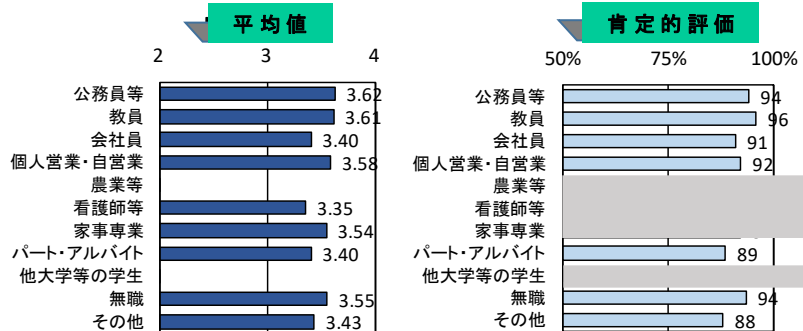
(B-19) 新しい知識が身につく視野が広がった



(B-20) この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)



(B-21) この科目の内容には全体として満足している(満足度)

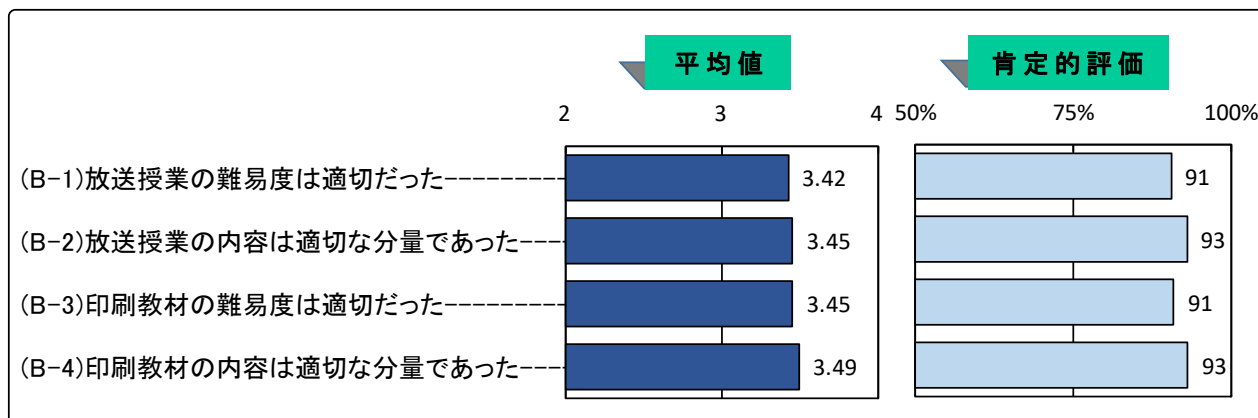


(2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量について評価項目ごとに見ていく。

授業の難易度・分量の評価は(図2-68)は、全ての項目で90%を超え、特に(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」は93%であった。

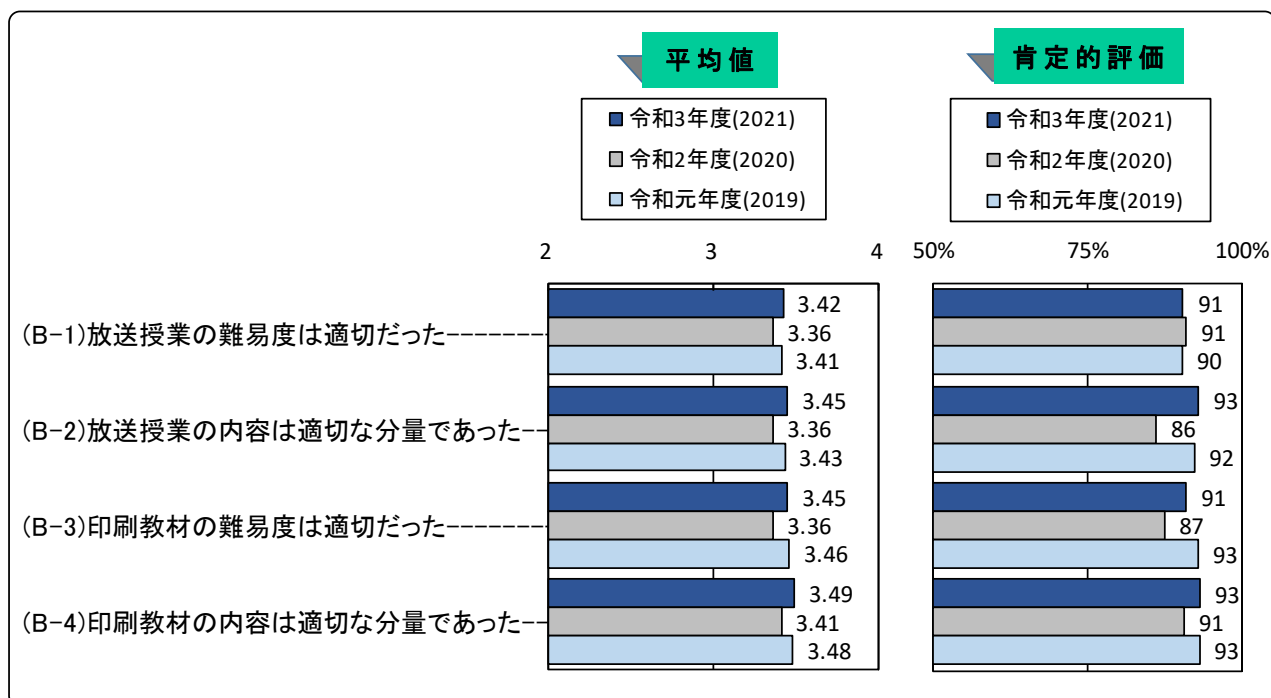
図2-68【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価



開設年度別では(図2-69)、本年度と昨年度を比較すると、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は共に91%と変わらなかったが、(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」(93%)は、本年度が7ポイントの大幅上昇であった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」もそれぞれ、4ポイントと2ポイントの上昇が見られた。

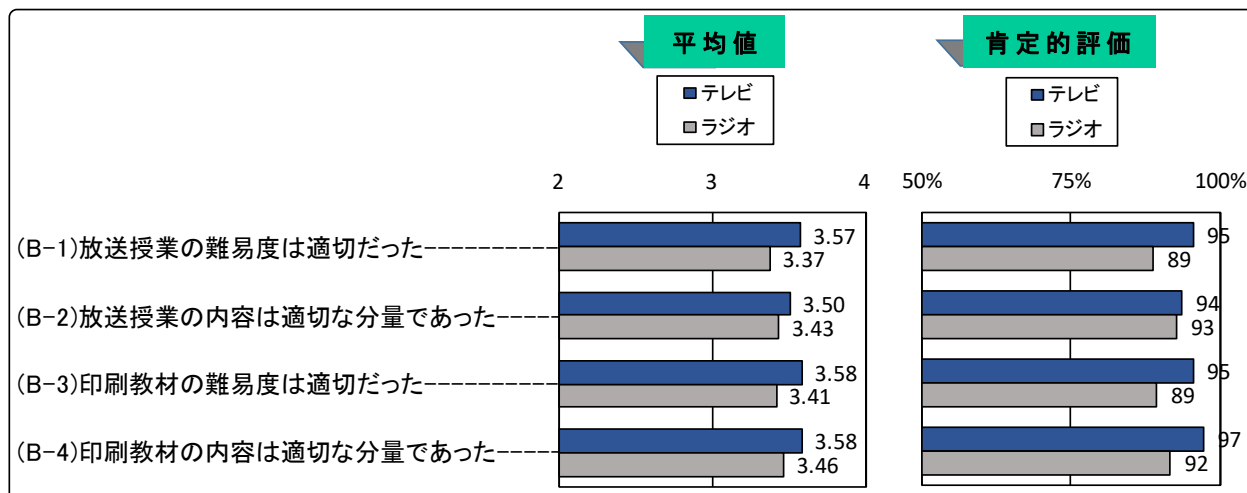
図2-69【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価(開設年度比較)



メディア別に授業の難易度・分量を見ると（図2-70）、全ての項目でテレビ科目が高評価で、(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」以外の項目では、5,6ポイント高かった。

特にテレビ科目の(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」の評価は、97%と最も高かった。

図2-70【大学院】メディア別の授業難易度・分量の評価



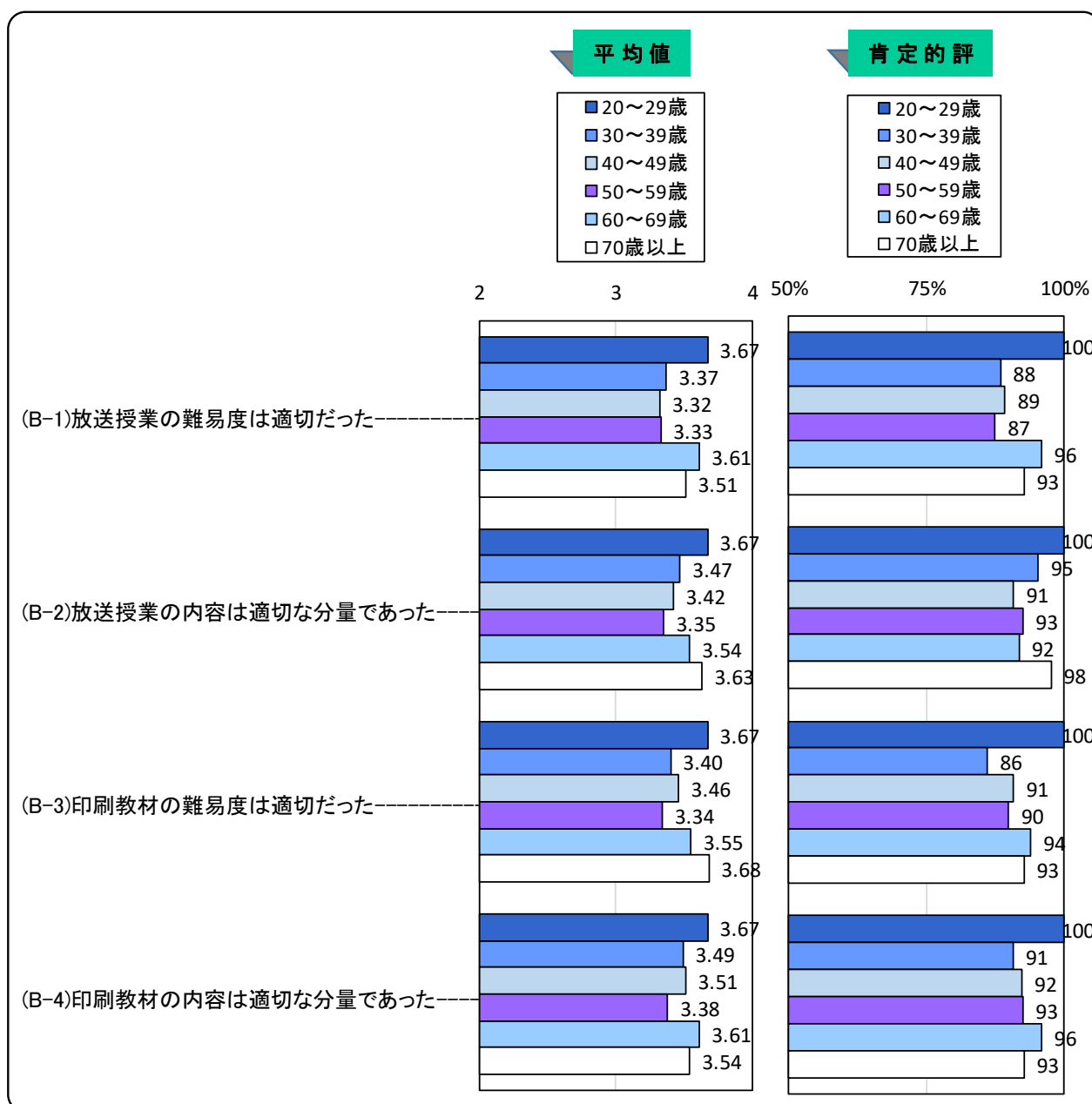
年齢階層別に授業の難易度・分量を見ると（図2-71）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は、60歳代が96%と最も高く、次いで70歳以上が93%と続いていた。それ以外の年代は9割に達していなかった。

(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」は、70歳以上が98%と最も高く、その他は93%前後で同じレベルであった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」は、30歳代が86%と9割に届かず、最も低かった。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」は、60歳代が96%と最も高く、他の年代は92%前後で並んでいた。

図2-71 【大学院】年齢階層別の授業難易度・分量の評価



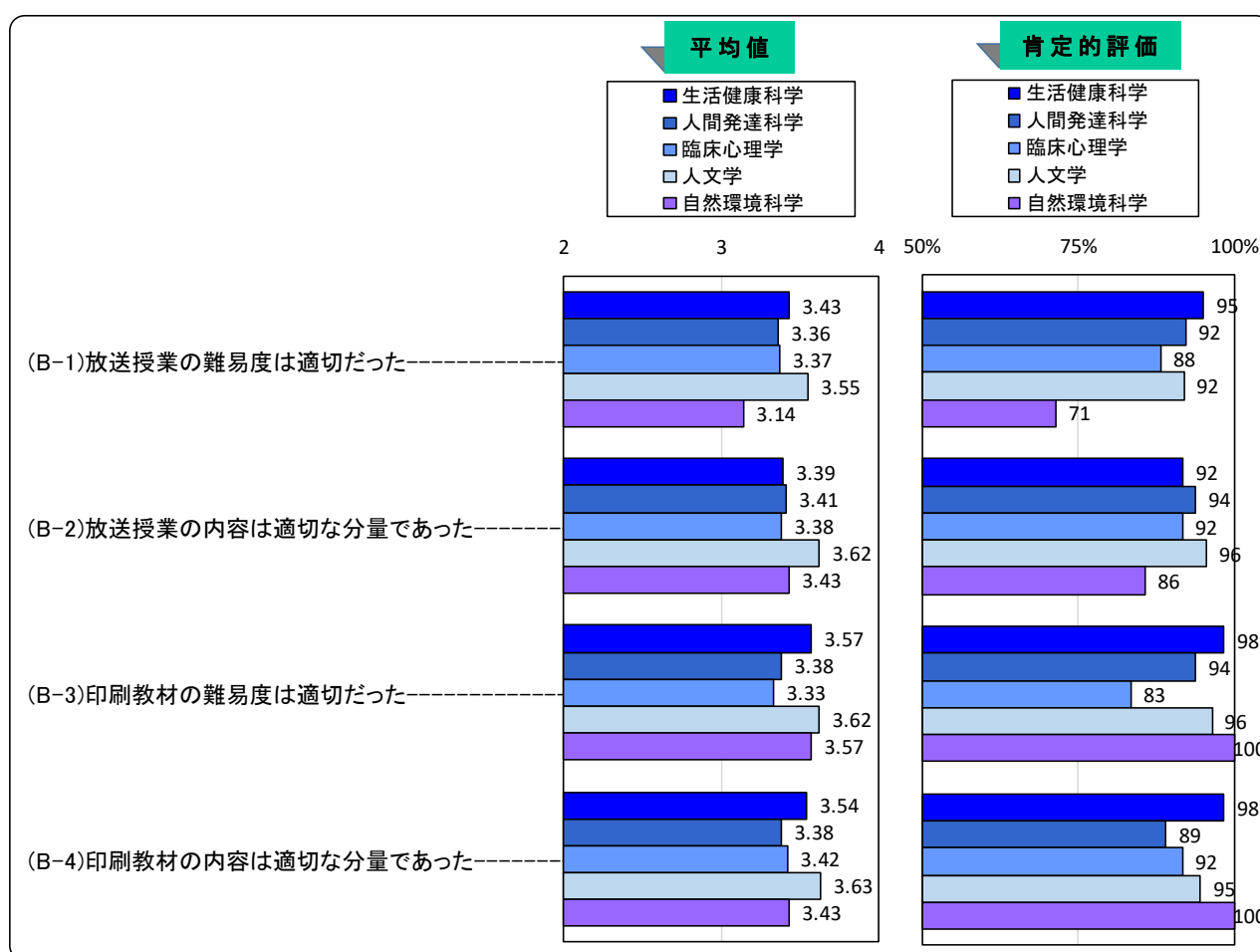
所属プログラム別に授業の難易度・分量を見ると（図2-72）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は、「生活健康科学」が95%と最も高く、反対に「臨床心理学」が88%で最も低かった。

(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」は、「人文学」が96%で評価が高く、その後も90%前半の評価であった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」は、「生活健康科学」が98%と高い評価で、「臨床心理学」が83%と極端に低かった。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」も「生活健康科学」が、98%と高く、反対に「人間発達科学」が89%と低い評価であった。

図2-72【大学院】所属プログラム別の授業難易度・分量の評価



職業別に授業の難易度を見ると（次頁図 2 - 7 3）、全ての項目で「その他」の評価は低い傾向で、特に(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では、他の職業と比べ 81%と 8 ポイント以上下回っていた。

反対に高い評価は、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」では、「教員」(94%)と「無職」(92%)であった。

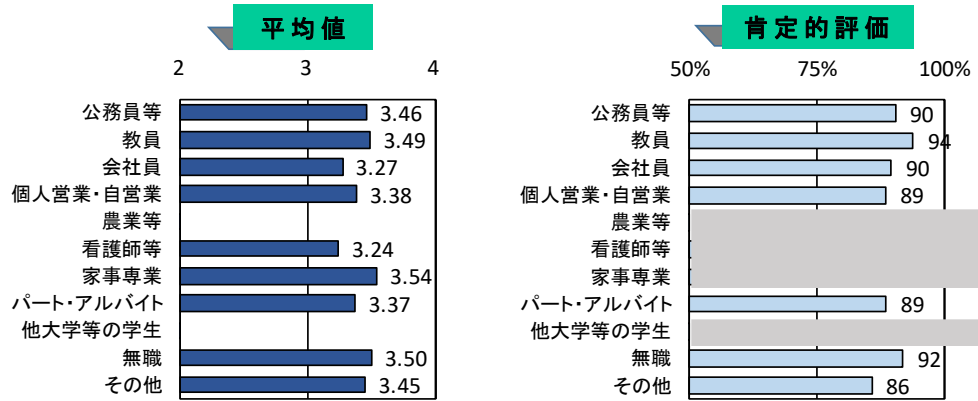
同様に(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」では、「パート・アルバイト」が 100%と極めて高く、「教員」が 95%で続いていた。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では、「教員」(95%)と「会社員」(94%)が高い評価であった。

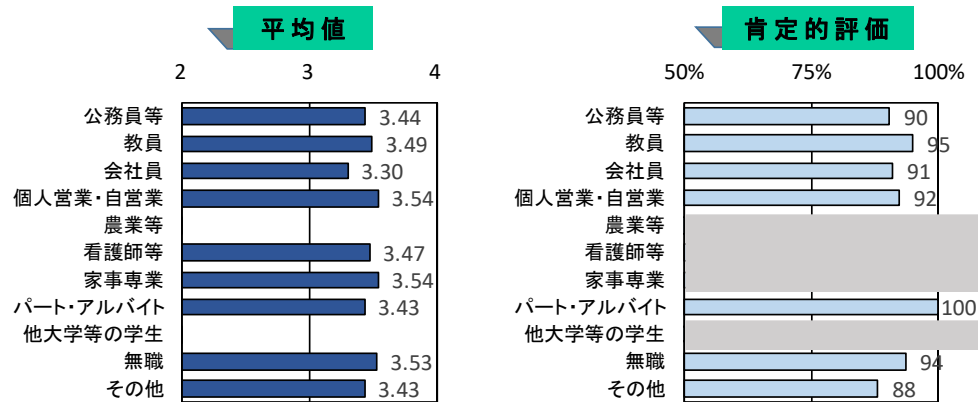
(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」は「公務員」が 96%と高く、反対に評価が低かったのは、前述の通り「その他」(91%)と、他に「パート・アルバイト」(89%)であった。

図 2 - 7 3 【大学院】職業別の授業難易度の評価

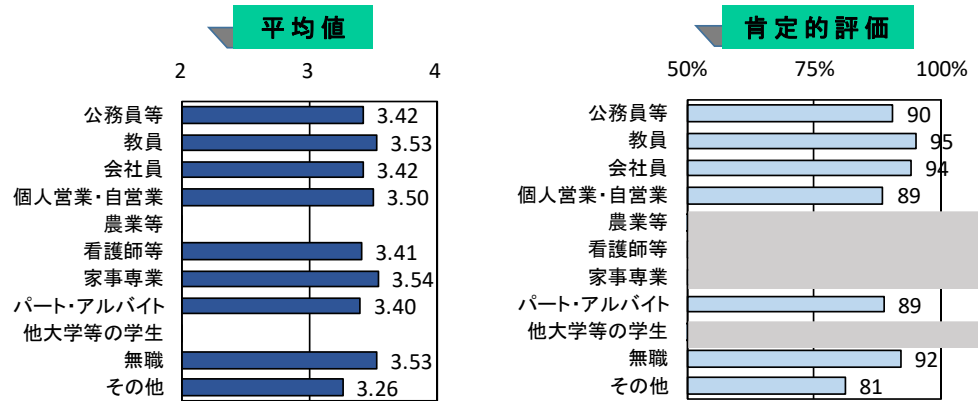
(B-1)放送授業の難易度は適切だった



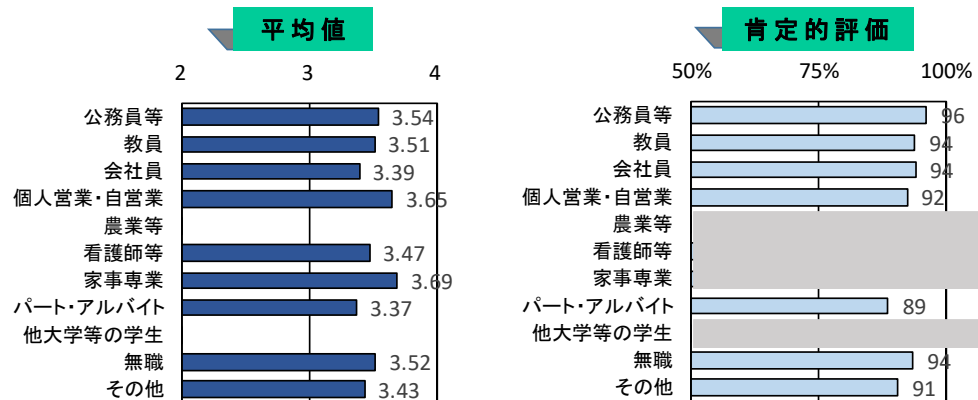
(B-2) 放送授業の内容は適切な分量であった



(B-3)印刷教材の難易度は適切だった



(B-4) 印刷教材の内容は適切な分量であった



(3) 放送授業

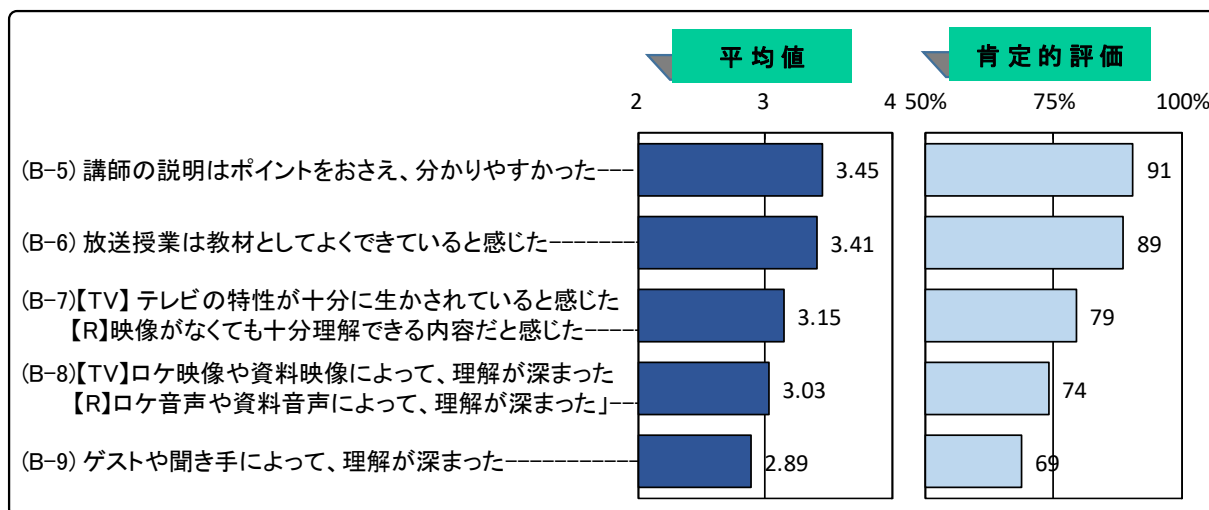
ここからは放送授業について評価項目ごとに見ていく。

放送授業に関する評価項目を見ると（図2-74）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は91%、(B-6)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は89%で、他の項目より10ポイント以上高かった。

(B-7)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた/【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は、79%と前2項目と比べかなり評価が低かった。

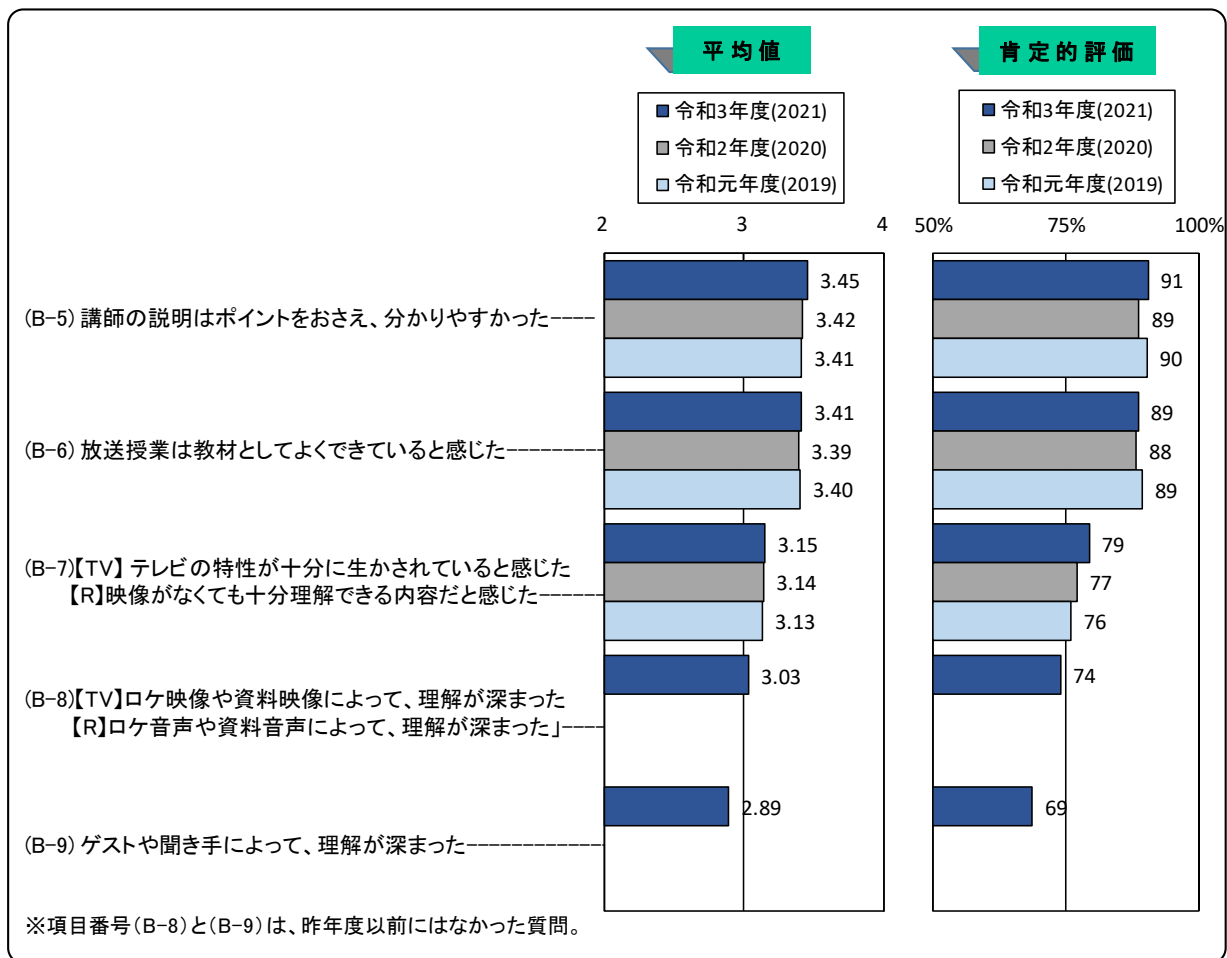
本年度、新たに加わった(B-8)と(B-9)の評価は、他の項目と比べ極端に低く、(B-9)「ゲストや聞き手によって、理解が深まった」は、69%と7割を下回っていた。

図2-74 【大学院】回答者全体の放送授業の評価



放送授業の評価を時系列で見ると（図2-75）、本年度は昨年度と比べ、前半3項目で1,2ポイント上昇していたが、一昨年度を含め大きな変化はなく、同水準であった。

図2-75【大学院】回答者全体の放送授業の評価（時系列）



メディア別に放送授業の肯定的評価を見ると（図2-76）」、全ての項目でテレビ科目の評価が高く、特に(B-7)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた/【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は、テレビ科目が90%、ラジオ科目が76%で、その差が14ポイントと大きな開きが見られた。

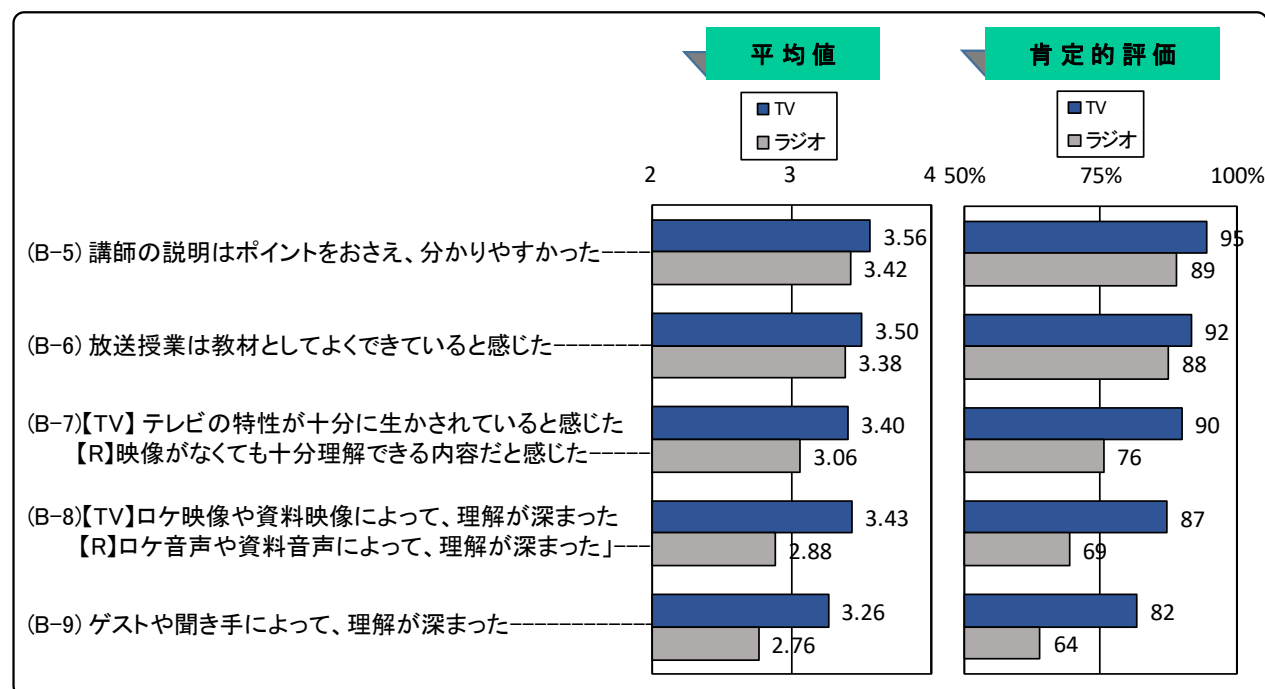
(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は、テレビ科目が95%、ラジオ科目が89%で、両メディア共に、全ての項目の中で最も高い評価であった。

(B-6)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は、テレビ科目が92%、ラジオ科目が88%で、メディア間の差は、4ポイントと最小であった。

本年度新しく加わった、(B-8)「【TV】ロケ映像や資料映像によって、理解が深まった/【R】ロケ音声や資料音声によって、理解が深まった」と(B-9)「ゲストや聞き手によって、理解が深まった」は両項目共18ポイントの大差で、ラジオ科目の評価が低かった。

両メディア単独では、(B-5)が共に、最も評価が高く（テレビ科目:95%、ラジオ科目:89%）、同様に(B-9)が最も低かった（テレビ科目:82%、ラジオ科目:64%）。

図2-76 【大学院】メディア別の放送授業の評価



年齢階層別では（図 2-77）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は、40 歳代、60 歳代、70 歳以上が、93,94%で評価が高く、30 歳代が 84%と低い評価であった。

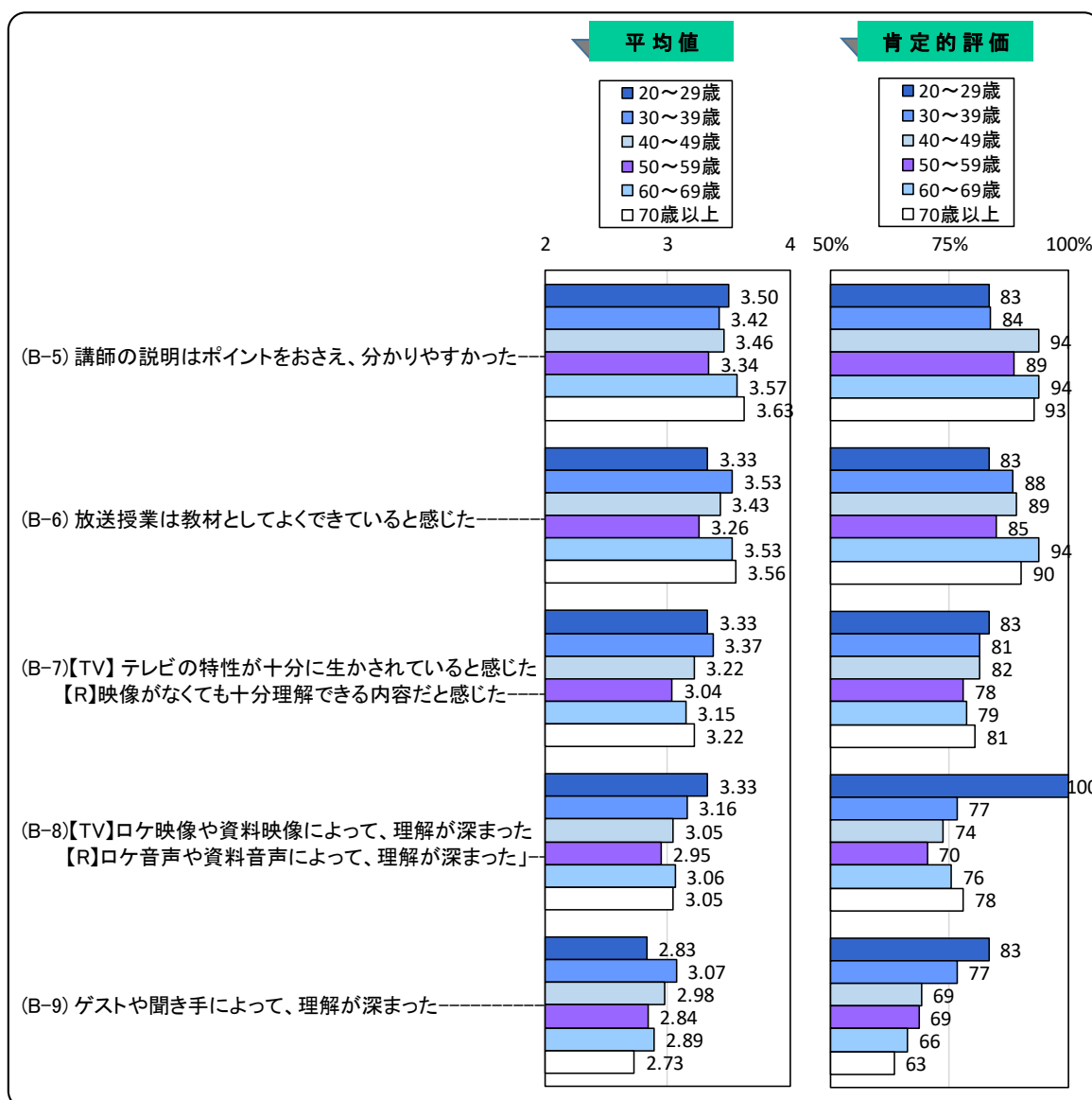
(B-6)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は、60 歳代が 94%と最も高く、50 歳代が 85%で評価が低かった。

(B-7)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた/【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」の評価は 78~82%で、各年代とも同じ水準であった。

(B-8)「【TV】ロケ映像や資料映像によって、理解が深まった/【R】ロケ音声や資料音声によって、理解が深まった」は、70 歳以上と 30 歳代が高く、50 歳代が 70%と最も低かった。

(B-9)「ゲストや聞き手によって、理解が深まった」は、30 歳代が 77%と最も高く、年代が上がるにつれ減少傾向で、70 歳以上で 63%と大きく評価を下げている。

図 2-77 【大学院】年齢階層別の放送授業の評価



所属プログラム別では（図2-78）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は、「人文学」が94%と最も評価が高く、他のプログラムは90%前後で同レベルであった。

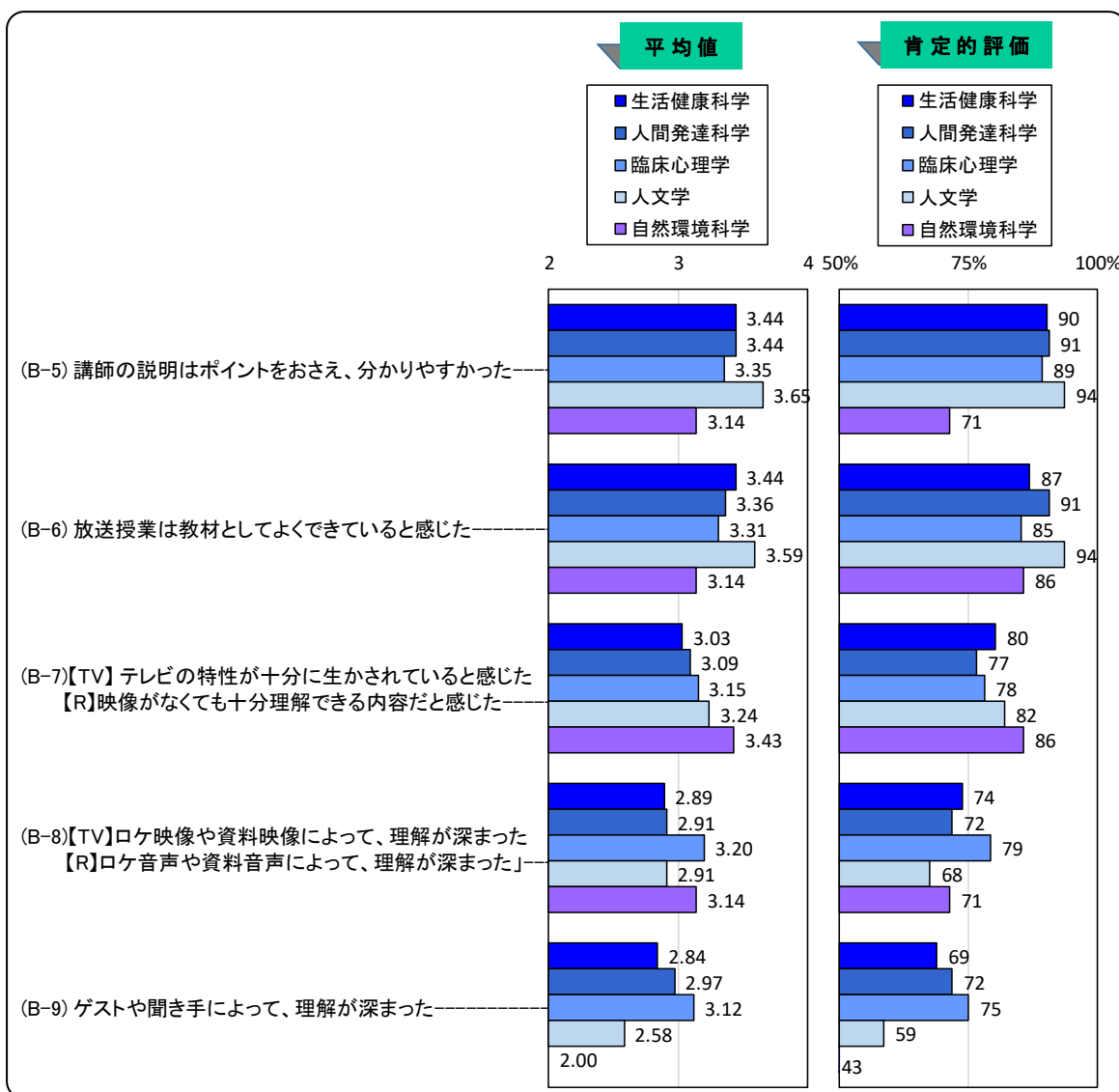
(B-6)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」も、「人文学」が94%と最も高く、「臨床心理学」が85%と評価が低かった。

(B-7)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた/【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」も、「人文学」が82%と評価は高かったが、他のプログラムも77~80%と同じ水準にあった。

(B-8)「【TV】ロケ映像や資料映像によって、理解が深まった/【R】ロケ音声や資料音声によって、理解が深まった」は、「臨床心理学」が79%と最も高く、「人文学」が68%と評価が低かった。

(B-9)「ゲストや聞き手によって、理解が深まった」も「臨床心理学」が75%と評価が高く、最も評価が低かったのは「人文学」で、59%と極端な評価であった。

図2-78 【大学院】所属プログラム別の放送授業の評価



職業別では（図2-79）、全ての項目について「教員」の評価が上位1位か2位と高く、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-6)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」では、94,95%に達していた。

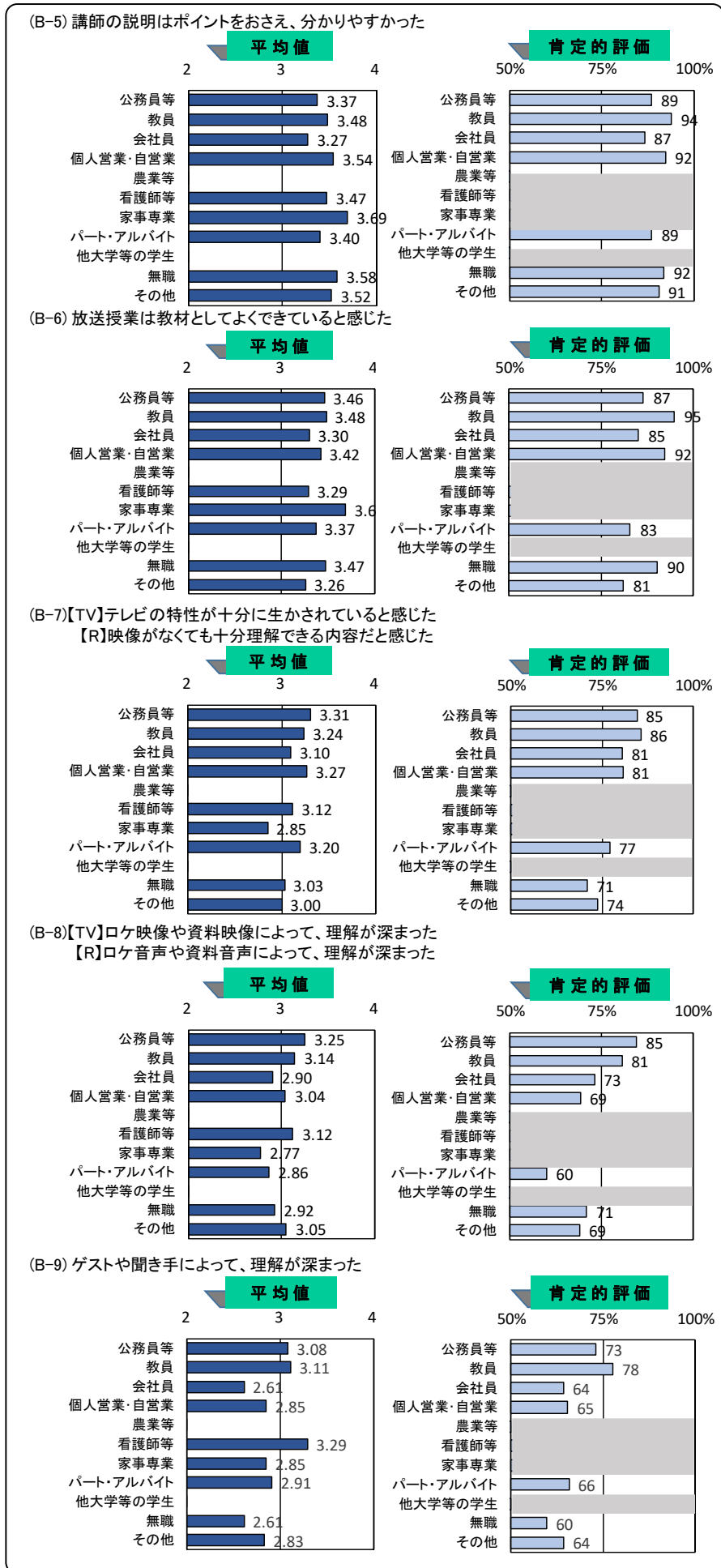
反対に評価が低かったのは、(B-5)では、「会社員」(87%)、(B-6)では、「その他」(81%)であった。

(B-7)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた/【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」では、「教員」(86%)と共に「公務員」(85%)も評価が高く、反対に「無職」は71%と低かった。

(B-8)「【TV】ロケ映像や資料映像によって、理解が深まった/【R】ロケ音声や資料音声によって、理解が深まった」は、「公務員」が85%と最も高く、「パート・アルバイト」は60%と極めて低かった。

(B-9)「ゲストや聞き手によって、理解が深まった」は、「無職」が60%と極端に低い評価であった。

図 2 - 7 9 【大学院】職業別の放送授業の評価

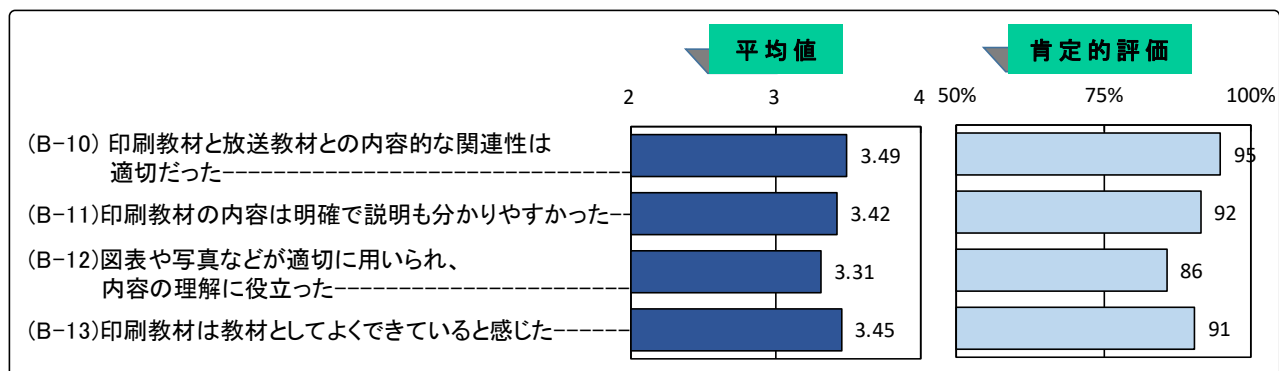


(4) 印刷教材

ここからは印刷教材について、評価項目ごとに見ていく。

印刷教材の評価項目では(図2-80)、(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」が95%と最も評価が高く、(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」が86%と低い評価であった。

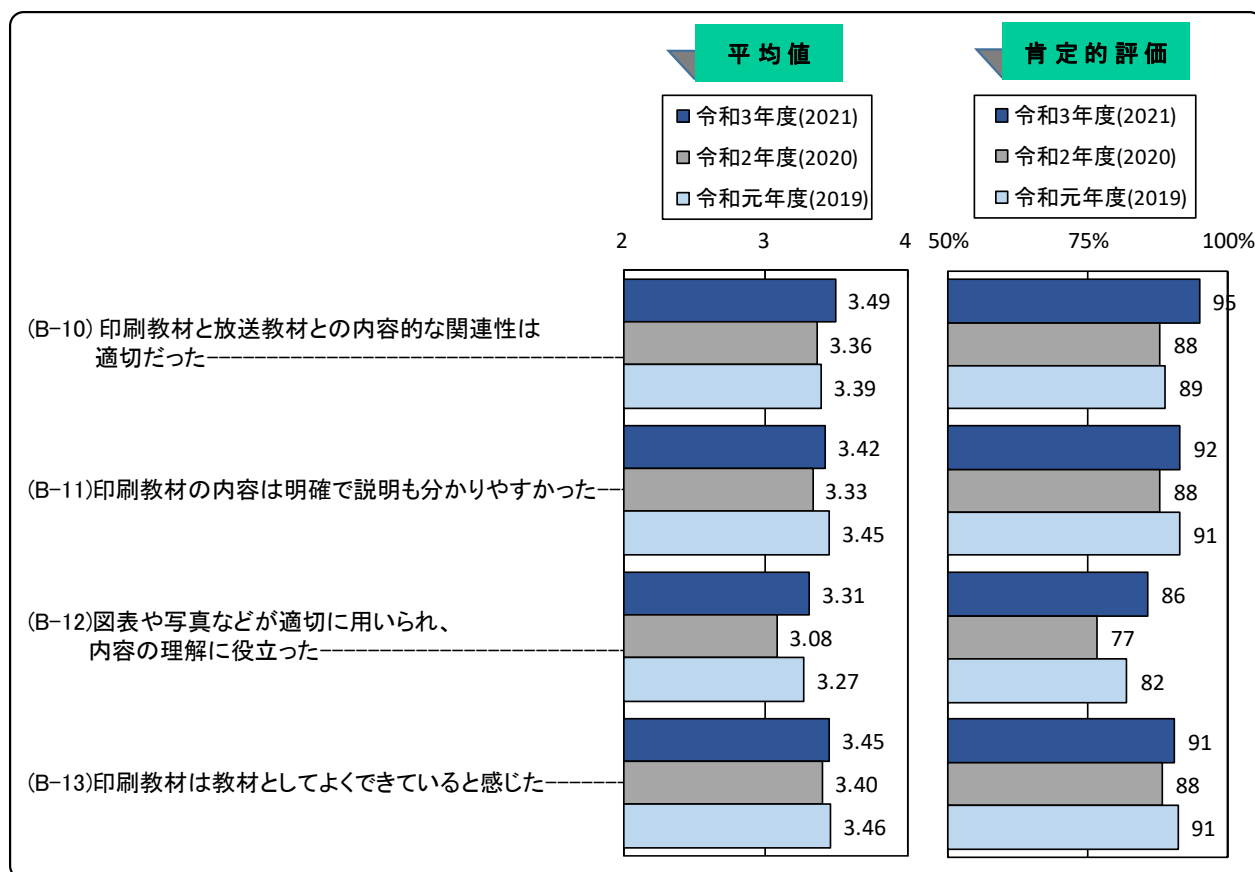
図2-80 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価



印刷教材の評価を時系列で見ると（図2-81）、全項目で、本年度は昨年度を上回っており、特に(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は顕著な上昇で、(B-10)が7ポイント、(B-12)が9ポイントであった。

一昨年度と比べると、(B-11)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」と(B-13)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は、同水準であったが、(B-10)と(B-12)は、本年度に上昇が見られ、同順に6ポイントと4ポイントであった。

図2-81 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価（時系列）

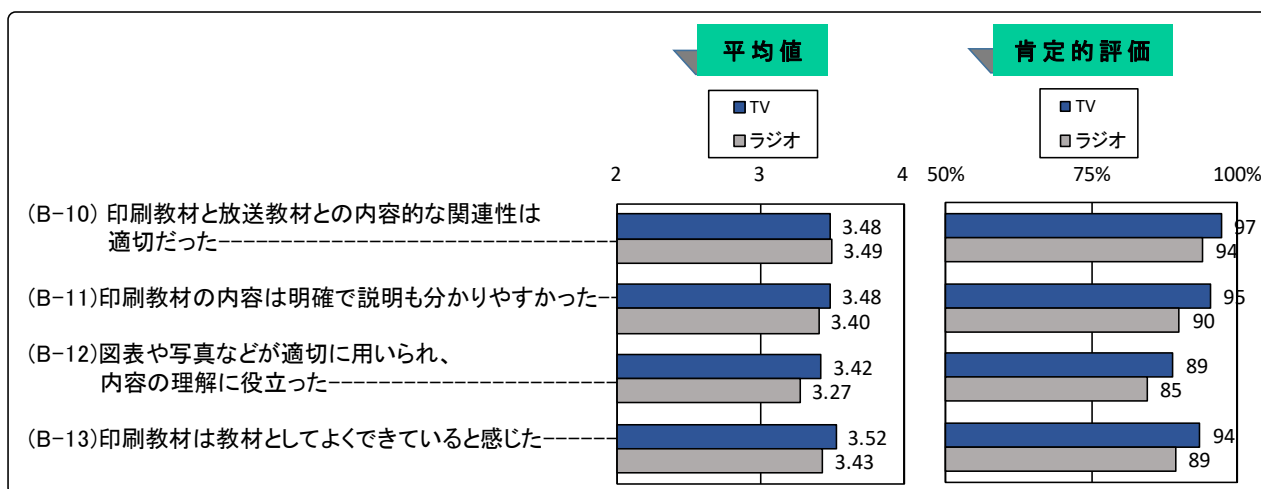


メディア別に印刷教材の評価を見ると（図2-82）、全ての項目でテレビ科目の評価が高く、中でも(B-11)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」と(B-13)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は、5ポイントの差であった。

テレビ科目とラジオ科目で最も評価が高かったのは、(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」で、同順に97%と94%であった。

反対に両メディアで最も評価が低かったのは、(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」で、同順に89%と85%であった。

図2-82 【大学院】メディア別の印刷教材の評価



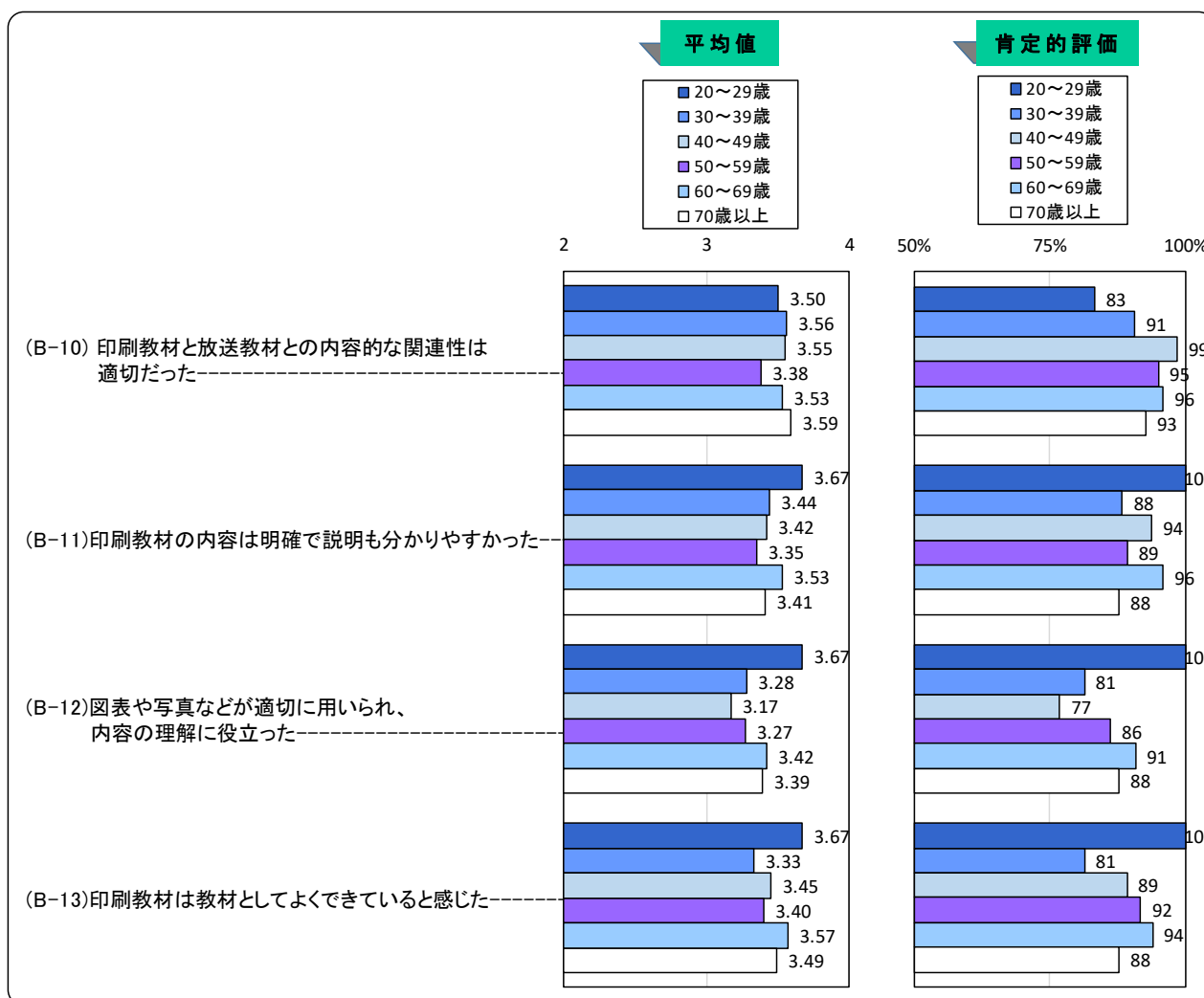
年齢階層別の評価（図2-83）は、(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」は、40歳代が99%と非常に高い評価で、反対に30歳代は91%で、相対的に低い評価であった。

(B-11)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は、40歳代と60歳代が、94,95%で高く、それ以外の年代は、88,89%であった。

(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は、60歳代が91%と最も評価が高く、40歳代が77%と極めて低い評価であった。

(B-13)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は、60歳代が94%と最も高く、30歳代が81%と低い評価であった。

図2-83 【大学院】年齢階層別の印刷教材の評価



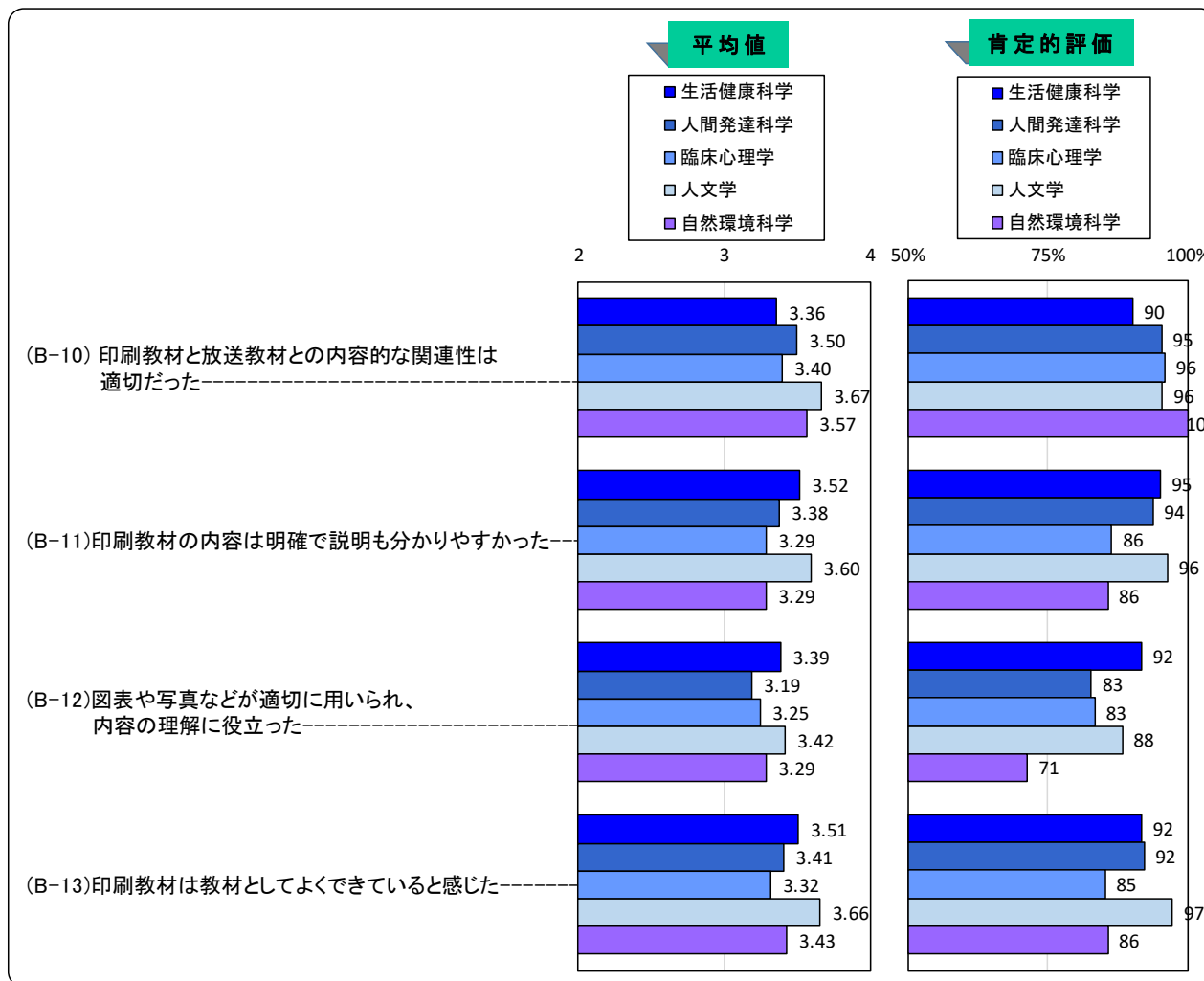
所属プログラム別の評価を見ると（図2-84）、(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」は、「人間発達科学」「臨床心理学」「人文学」が95,96%と高く、「生活健康科学」は90%と低かった。

(B-11)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」では、「生活健康科学」「人間発達科学」「人文学」が95%前後で高く、「臨床心理学」が86%で、他のプログラムと比べ、8ポイント以上上下回っていた。

(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は、「生活健康科学」が92%で最も高く、「人間発達科学」と「臨床心理学」が83%で、低い評価であった。

(B-13)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は、「人文学」が97%で最も高く、次いで「生活健康科学」「人間発達科学」が92%で、反対に「臨床心理学」が85%と、低い評価であった。

図2-84 【大学院】所属プログラム別の印刷教材の評価



職業別では（次頁図 2 - 8 5）、(B-10)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」は、「会社員」の全員が肯定的評価で、「その他」（88%）以外の職業も 90% 越えていた。

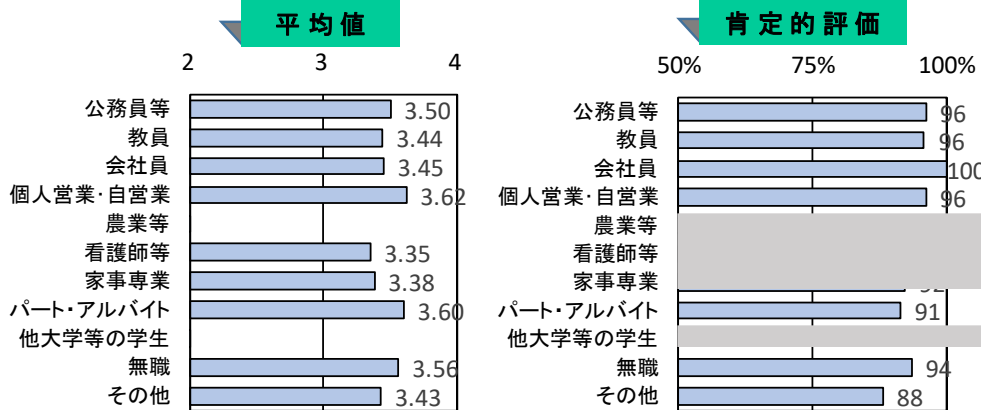
(B-11)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は、「公務員」～「個人営業・自営業」までが、93%前後と評価が高く、「その他」は 86%と評価が低かった。

(B-12)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では、「無職」が 92%と最も高く、「その他」は 79%と、最も評価が低かった。

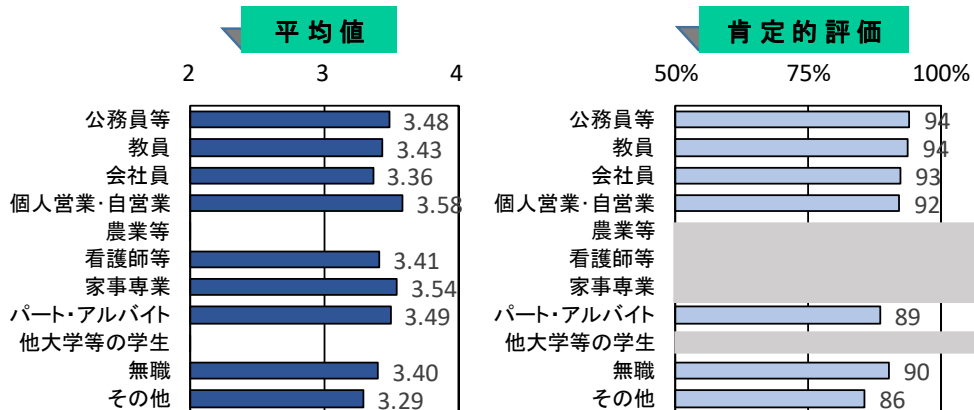
(B-13)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は、「パート・アルバイト」と「その他」が 86%と、評価が低かったが、それ以外の職業は、90%前後であった。

図 2 - 8 5 【大学院】職業別の印刷教材の評価

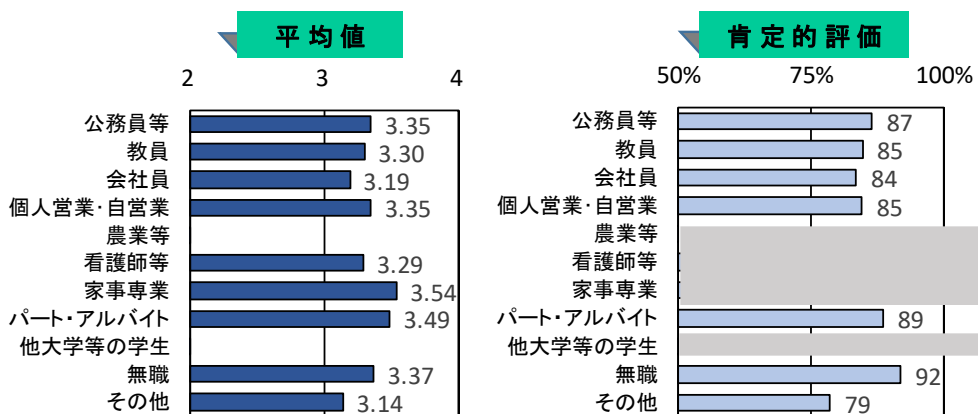
(B-10) 印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった



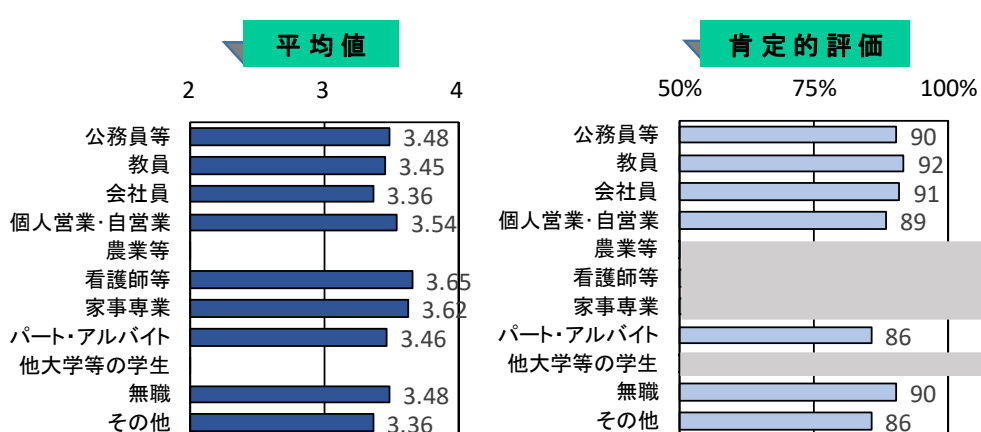
(B-11) 印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった



(B-12) 図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った



(B-13) 印刷教材は教材としてよくできていると感じた

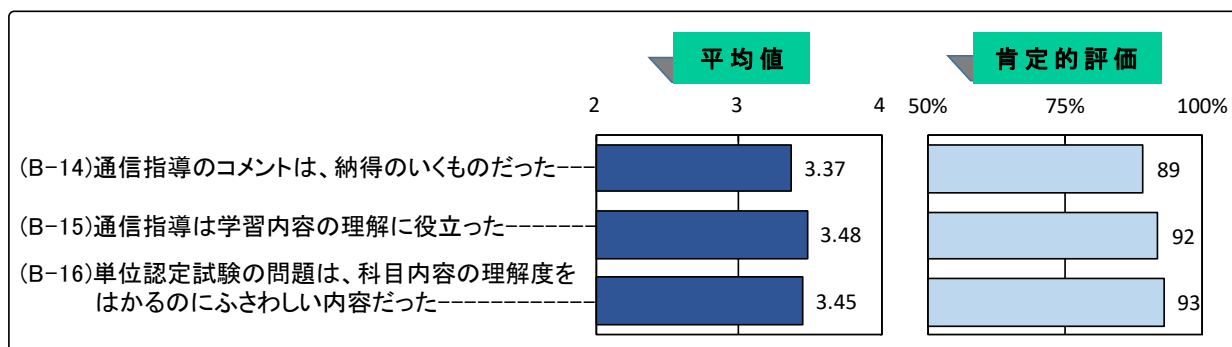


(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとに見ていくことにする。

(図2-86)の通信指導については、(B-14)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は90%にわずかに届かなかったが、(B-15)「通信指導は学習内容の理解に役立った」と(B-16)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」は、92, 93%であった。

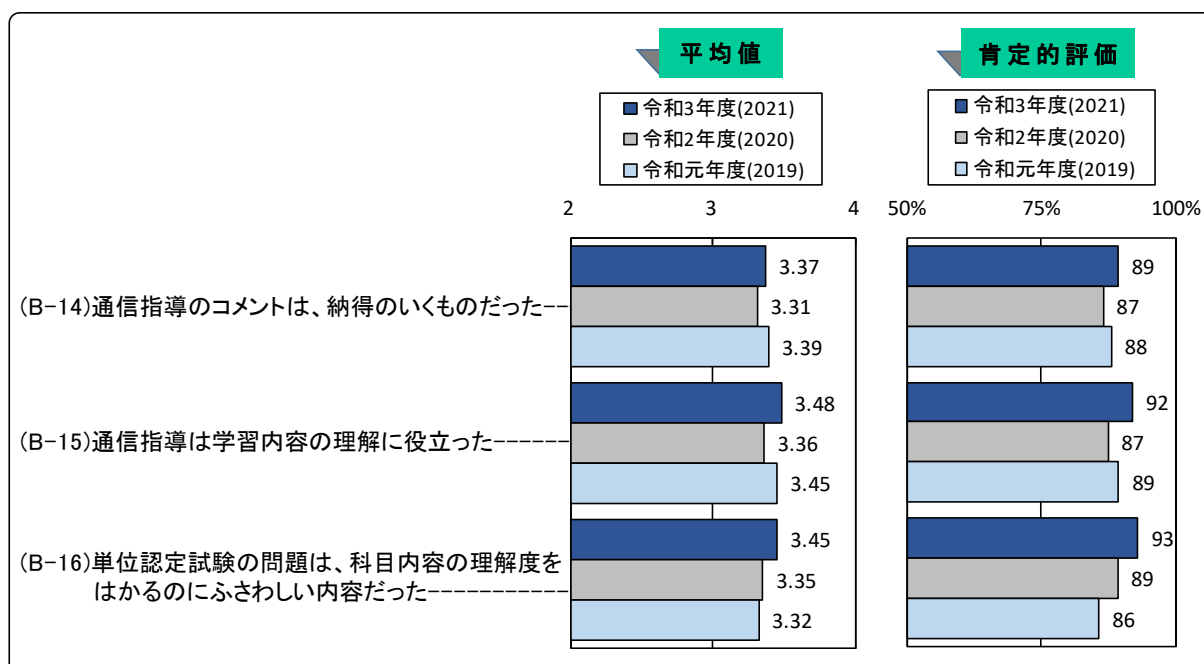
図2-86【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



通信指導・単位認定試験の評価を時系列で見ると(図2-87)、昨年度と比べ、本年度は、全項目が増加傾向で、(B-15)「通信指導は学習内容の理解に役立った」と(B-16)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」は4, 5ポイント、昨年度を上回っていた。

一昨年度と比べると、本年度は増加傾向で、特に(B-16)は7ポイント上昇していた。

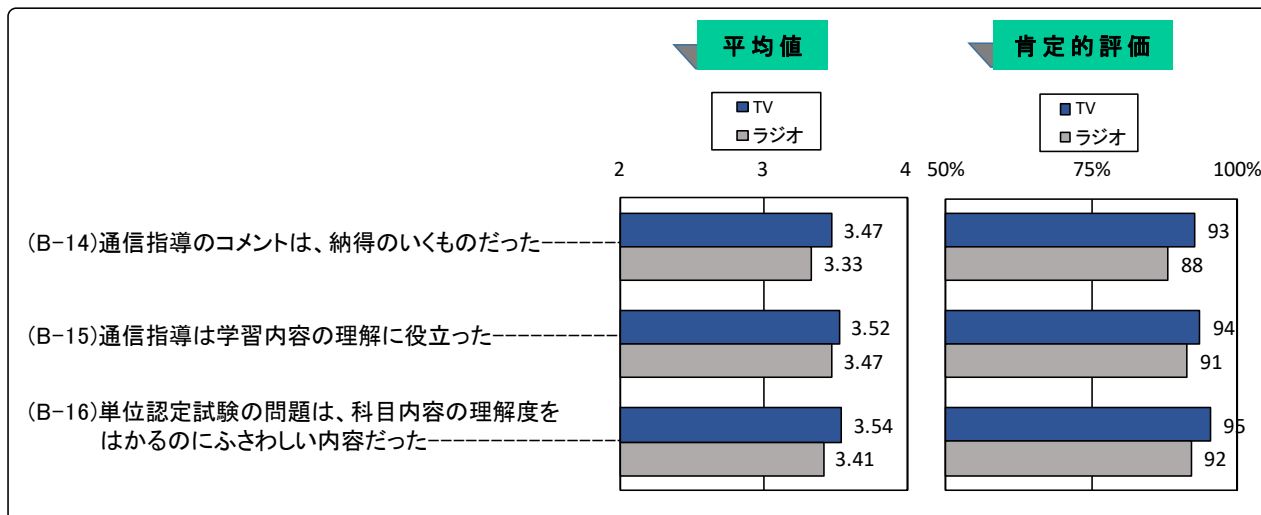
図2-87【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価(時系列)



メディア別に通信指導・単位認定試験の評価を見ると(図2-88)、全ての項目で、テレビ科目の評価が高く、4ポイント前後、ラジオ科目を上回っていた。

テレビ科目の評価は、93~95%で、同等な評価であったが、ラジオ科目は、(B-14)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」が88%と9割に届かなかった。

図2-88 【大学院】メディア別の通信指導・単位認定試験の評価

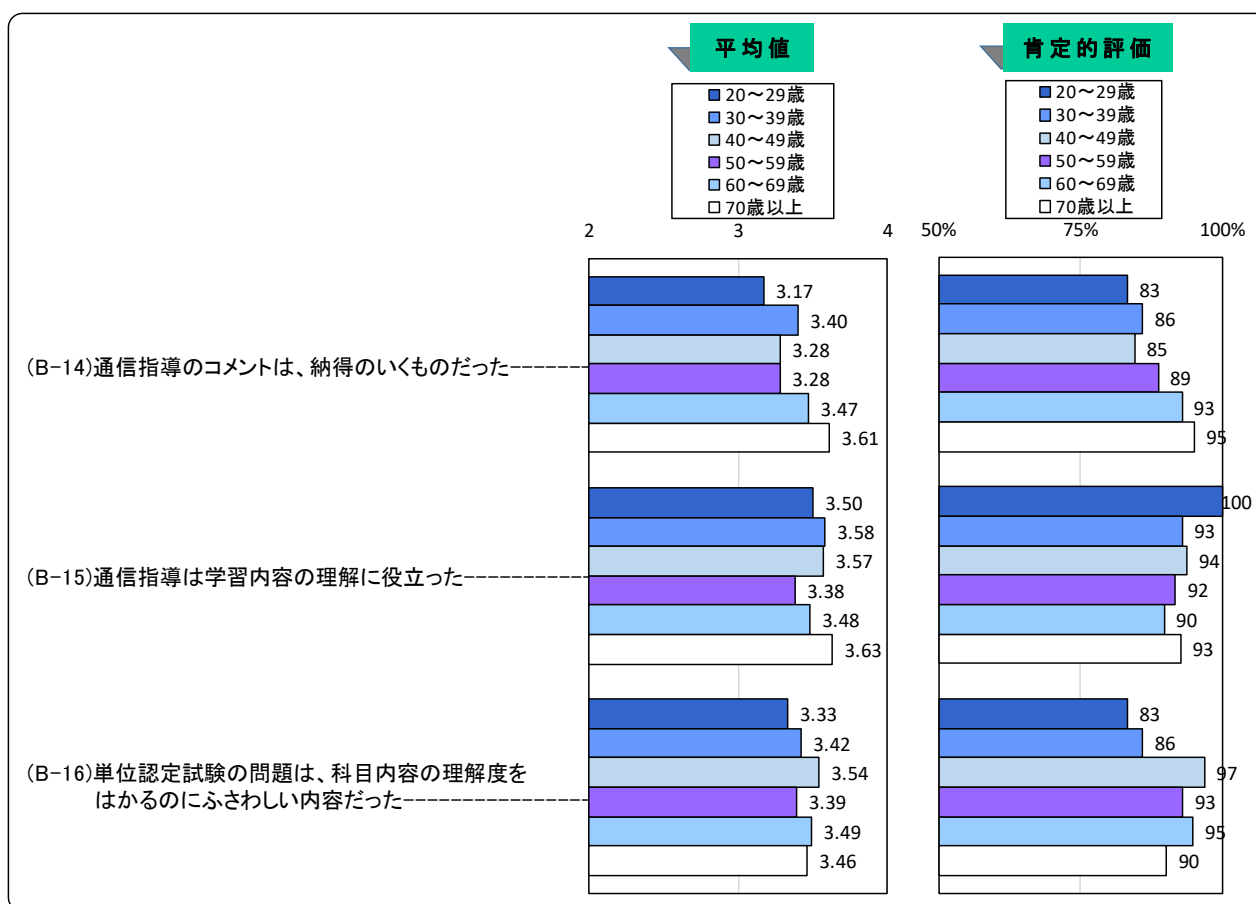


年齢階層別の評価（図2-89）では、(B-14)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は、60歳代（93%）と70歳以上（95%）の評価が高く、反対に30歳代（86%）と40歳代（85%）の若年層は、評価が低かった。

(B-15)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は、いずれの年代も90%以上で、中でも40歳代が94%で、最も高かった。

(B-16)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」では、40歳代が97%と最も高く、反対に30歳代が86%と、低い評価であった。

図2-89 【大学院】年齢階層別の通信指導・単位認定試験の評価

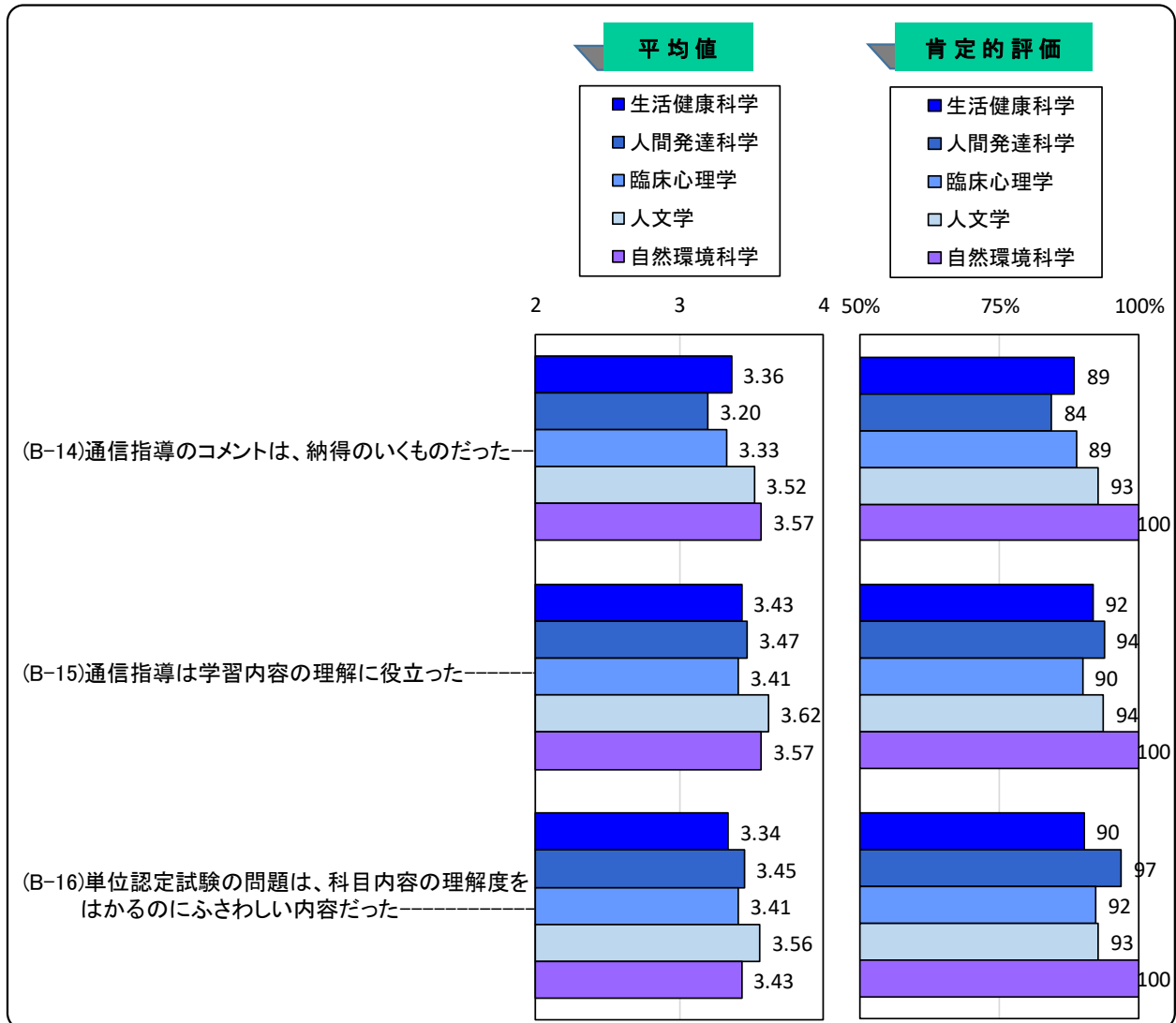


所属プログラム別では（図2-90）、(B-14)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は、「人文学」が93%と最も高く、「人間発達科学」が84%と評価が低かった。

(B-15)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は、いずれも90%以上で、中でも「人間発達科学」と「人文学」が94%で高かった。

(B-16)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」も全てのコースが90%以上で、特に「人間発達科学」が97%と群を抜いていた。

図2-90 【大学院】所属プログラム別の通信指導・単位認定試験の評価

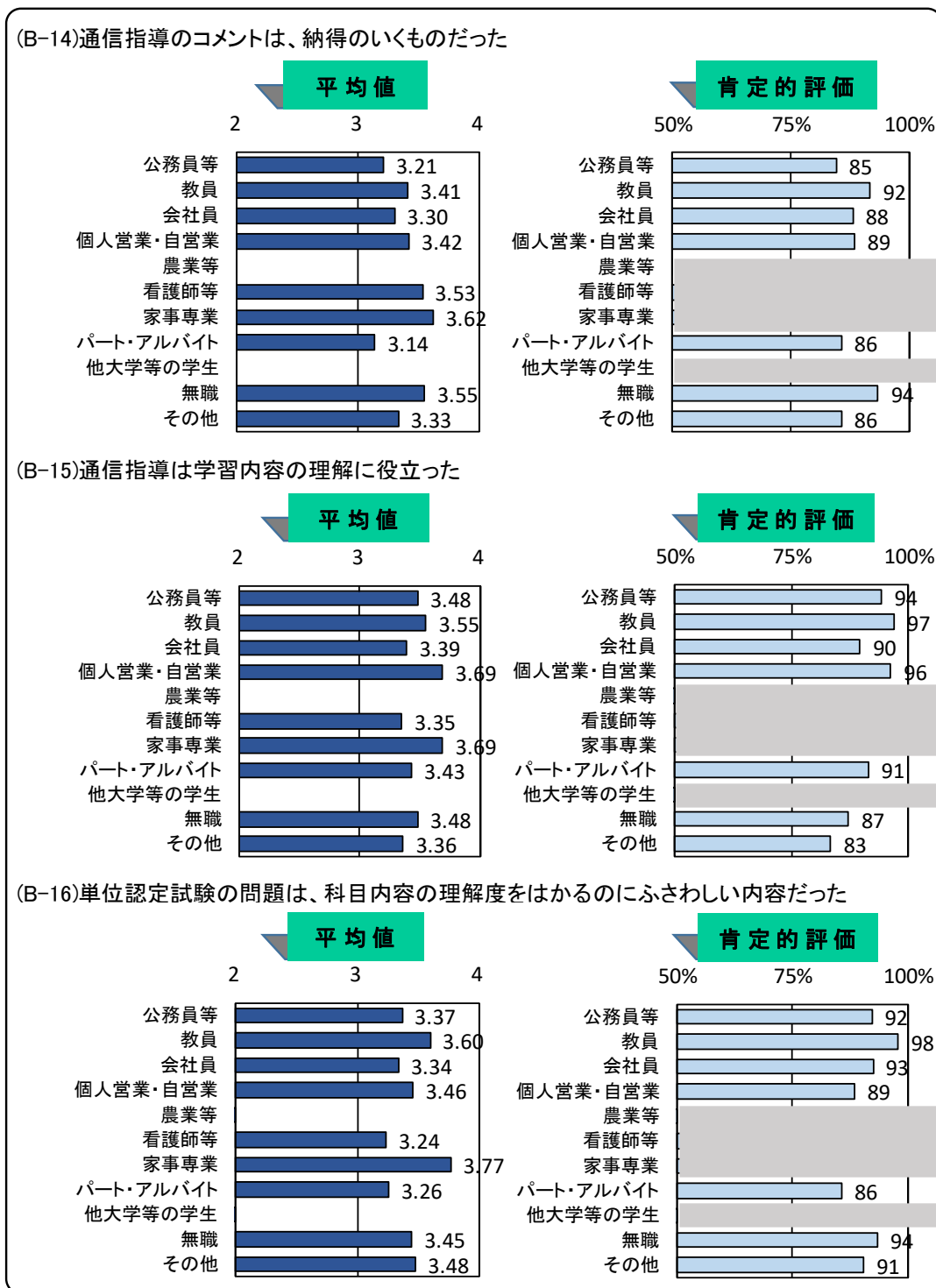


職業別では（図2-91）、(B-14)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は、「無職」が94%と最も高く、次いで「教員」が92%で続き、評価が低かったのは「公務員等」で、85%にとどまっていた。

(B-15)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は、「教員」と「個人営業・自営業」が97,96%で評価が高く、反対に「その他」が83%と、極めて低かった。

(B-16)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」でも、「教員」が98%と高い評価で、「パート・アルバイト」は86%と最も低かった。

図2-91【大学院】職業別の通信指導・単位認定試験の評価



Ⅱ－２－４．大学院の重回帰分析

大学院でも学部同様、重回帰分析を試みた。

その重回帰分析とは、数量データである目的変数と説明変数の関係を調べ、重回帰式（モデル式）を導き出す解析手法である。

今回も、全体の満足度（B-21）「この科目の内容には全体として満足している」を目的変数とし、調査票 I.A「授業への取り組み姿勢」を除く B-1～B-20 の各項目を説明変数として分析を試みる。

本調査の選択肢はカテゴリーデータであるが、平均値の算出と同様『あてはまる→4』のように数値をポイント化する事で数量として扱い、重回帰分析を適用する。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを知る事を目的としている。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度 B-21
説明変数	x_1, x_2, \dots	各項目 B-1～B-20: 全 20 問(項目)
係数	a_1, a_2, \dots	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式 $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{20}x_{20}$ (説明変数が 20 個の場合)

サンプルサイズが十分でない場合や説明変数が多すぎると、全体の満足度を表すのに適した重回帰式を得られない事が経験的に分かっているため、重回帰分析の中で、説明変数間で強い相関関係がある場合、その一方の項目を自動的に削除する「変数減少法」を用いて解析を行う事にする。

使用したデータは質問項目 I.B の全設問を全て回答した、全有効回答者、412 人のローデータを使用した。

その結果は以下の通りであった。

■分析精度

自由度修正済み決定係数とは、得られた重回帰式が目的変数に対してどれだけ説明力(寄与度)があるかを示す指標で、「1」に近いほど良い結果で、この分析では 0.751 であった。

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関（自己相関）を示す指標で、0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差（誤差）に規則性があり、解析自体あるいは、データ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされ、その値は 1.861 となった。

以上の結果から、本分析は問題のない事が示されている。

◆分析精度

決定係数	0.762
自由度修正済み決定係数	0.751
ダーヴィンワトソン比	1.861
残差の標準偏差	0.344

今回の重回帰分析では下表の分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1% である事を表している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p 値	判定
全体変動	194.881	411				
回帰による変動	148.514	19	7.817	66.083	0.000	[**]
回帰からの残差変動	46.367	392	0.118			

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05

下表にある標準偏回帰係数とは説明変数の相互比較を可能にするためのもので、各説明変数の目的変数に対する影響力の度合いがこれで分かる。

標準偏回帰係数（全体の満足度に対する寄与度）が最も高かったのは、B-20「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」で 0.212、次いで B-18「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」（0.185）、他に B-19「新しい知識が身につく視野が広がった」（0.141）、B-5「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」（0.138）と続いていた。

説明変数の影響力の度合いを比較するために、表中の標準偏回帰係数の中で最も小さい B-15（0.087）を基準に、他の項目がその何倍になるか算出してみた。（表中の右端の数値）その結果、高い順に B-20:2.4 倍、B-18:2.1 倍、B-19:1.6 倍、B-5:1.6 倍となり、B-20 と B-18 が 2 倍を超えていた。

今後、「全体の満足度」（本年度の肯定的評価 93%）を上げるためには、上位 2 項目（「B-20 この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」と「B-18 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」）の肯定的評価を上げる事に重点を置く施策が、効果的であると考えられる。

この 2 項目の肯定的評価について見てみると、B-20:90%、B-18:94%で、それぞれの肯定的評価を上げる余地は、まだ残っていると思われる。

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定	B-15との対比
B-21.全体の満足度	0.212	B-20 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)	[**]	2.4
	0.185	B-18 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	[**]	2.1
	0.141	B-19 新しい知識が身につく視野が広がった	[**]	1.6
	0.138	B-5 講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	[**]	1.6
	0.126	B-3 印刷教材の難易度は適切だった	[*]	1.4
	0.113	B-13 印刷教材は教材としてよくできていると感じた	[*]	1.3
	0.101	B-17 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	[**]	1.2
	0.087	B-15 通信指導は学習内容の理解に役立った	[*]	1.0
		定数項	[*]	

※説明変数の中で有意水準が0.05以下の項目だけを掲載した